

飽海郡誌卷四

160
10
130

160-130



1200901383928

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



飽海郡誌卷之四

口 卯寄贈本

目次

第七編 市街

第二章 酒田町下

肴町 片肴町 上袋小路 稻荷小路 山椒小路 渡部氏 中袋小路

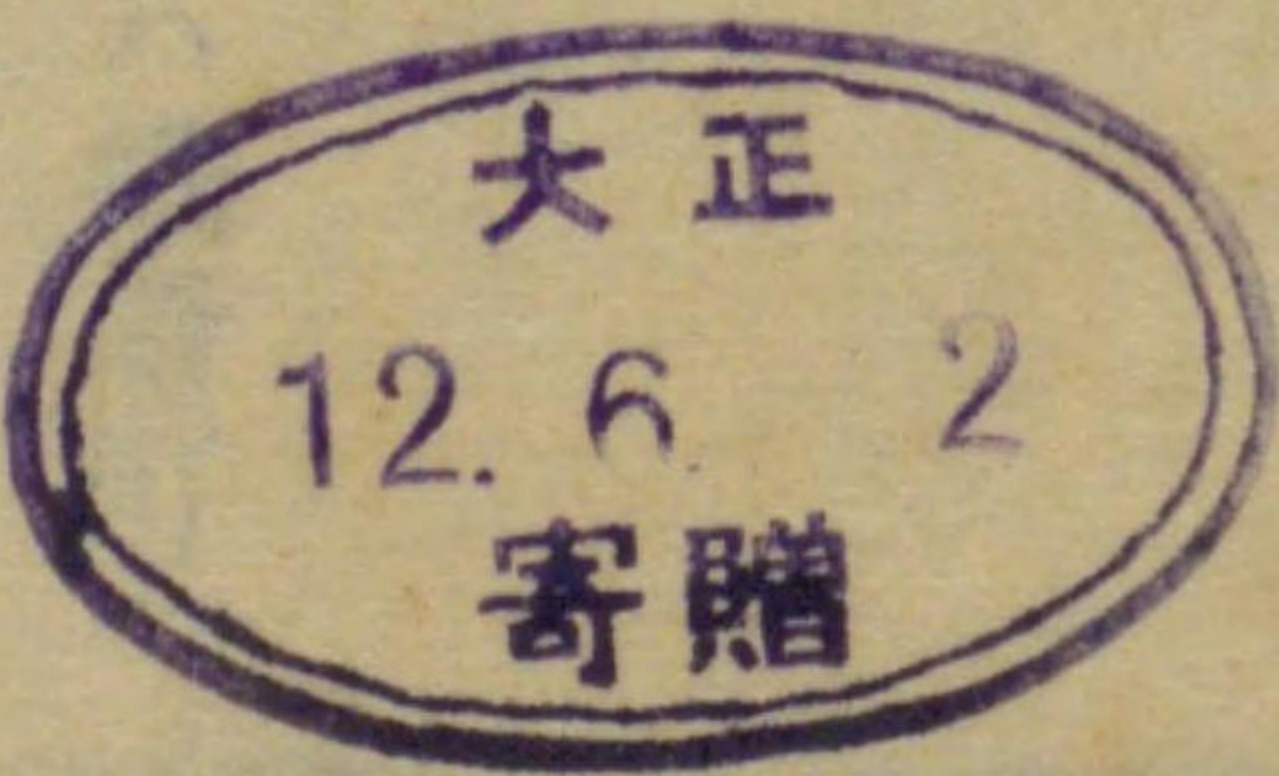
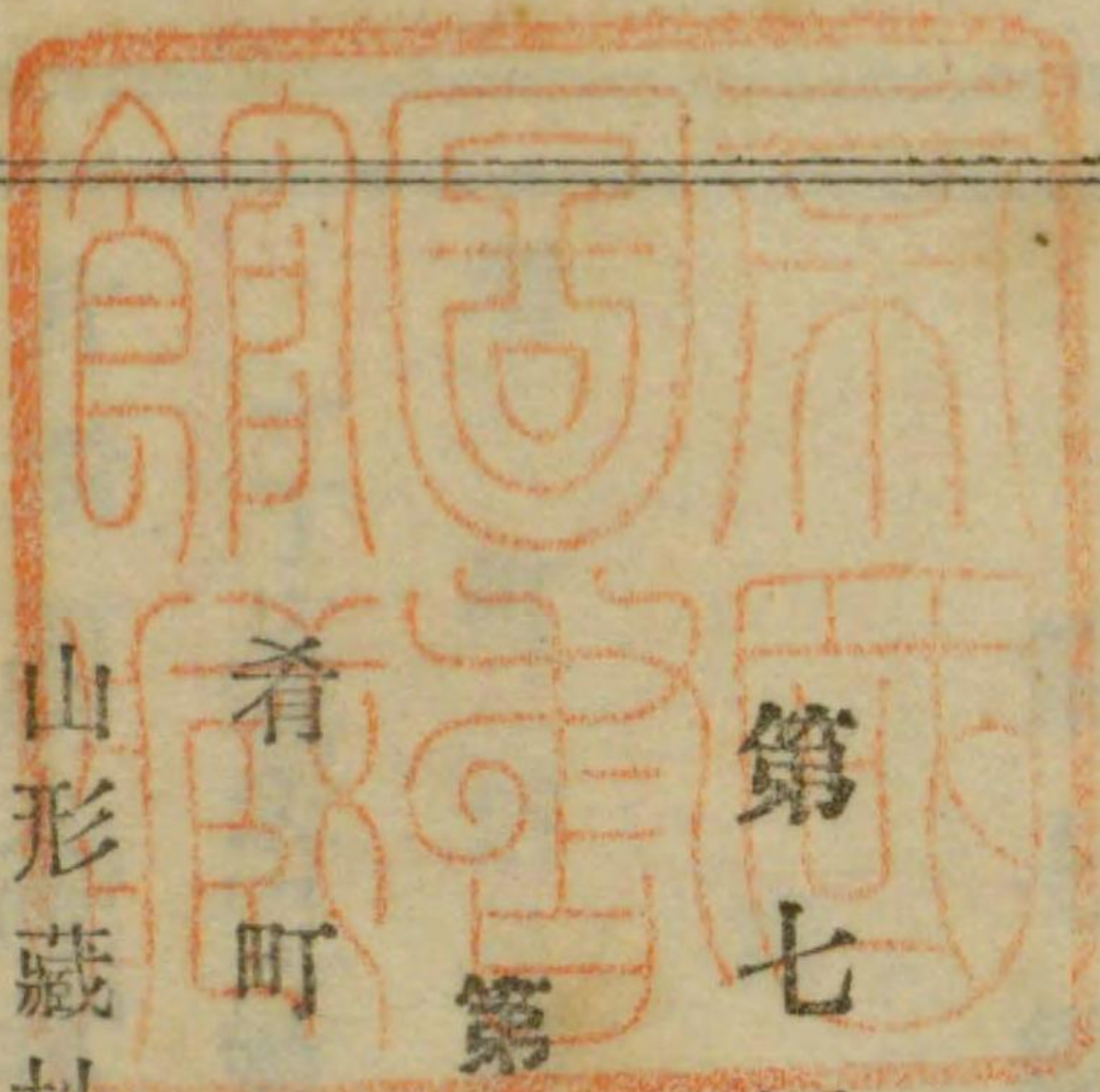
山形藏址 下袋小路 利右工門小路 栗林氏 染屋小路 根上小路

中町通 下鍛冶町 鍛冶町 桶屋町 大工町 上中町 下中町

堀端 林昌寺小路 藥師神社 伊勢津小路 和泉小路 柳小路

持地院小路 粕谷小路 十王堂町 正德寺 海晏寺 愛宕神社 新鍛冶町

坂ノ上 天滿神社 時鐘 内匠町 横町 寺町 妙法寺 龍巖寺



淨徳寺 淨福寺 泉流寺 安祥寺 大信寺 本慶寺 ちろま小路
 林昌寺小路 青物小路 寺小路 南藏院小路 秋田町 永田氏
 御鷹屋敷址 米商會社 傳馬町 白崎氏 今町 善導寺 臺町 日枝神社
 松林銘 糶藏址 海向寺 持地院 荒町 櫻小路 獵師町 出町
 皇大神社 下藏址 日和山 船場町 新町 遊廓 新寺町 新濱畑
 御米置場址 富士權現址 酒田湊 袖之浦

目次

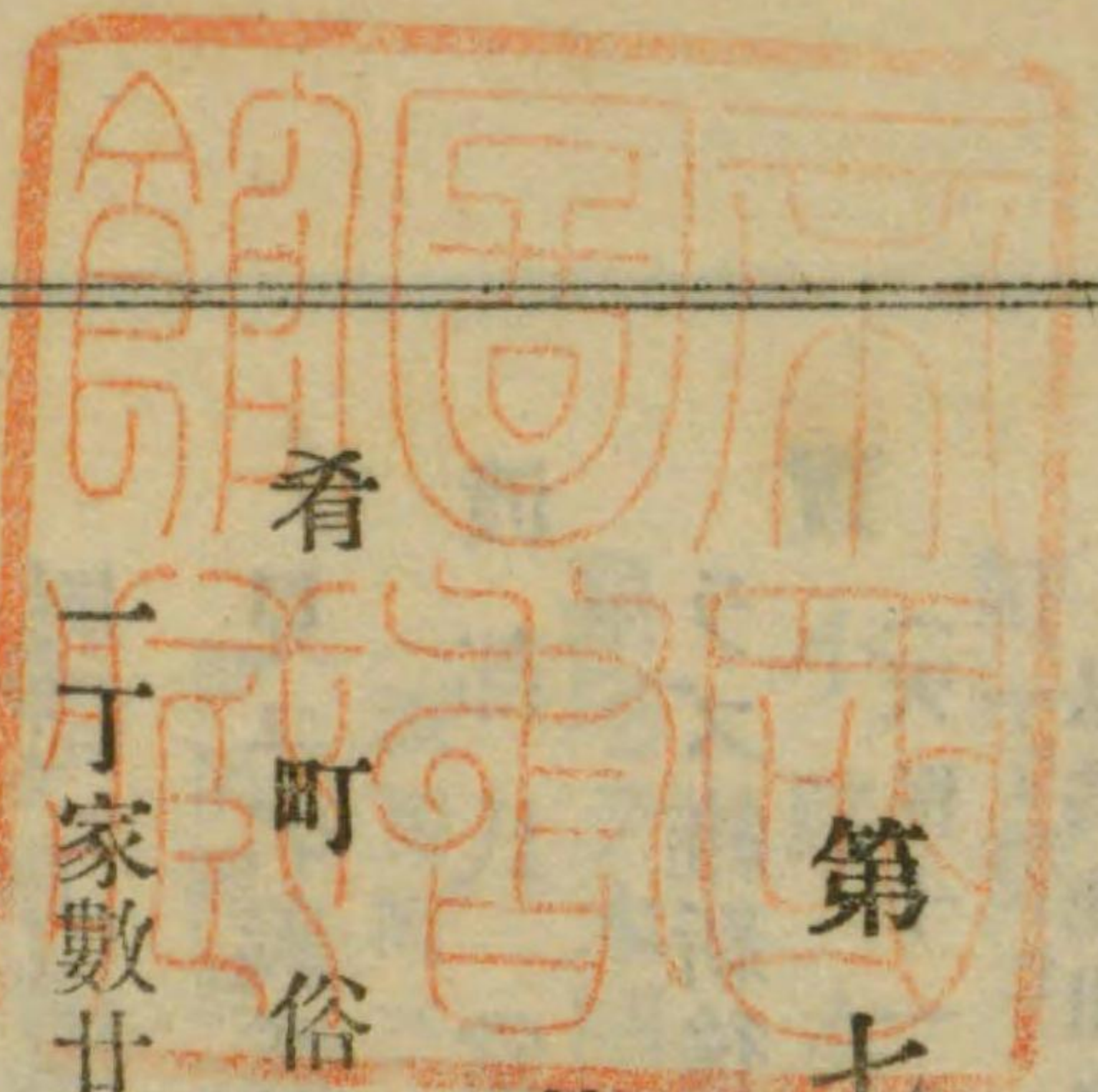
飽海郡誌卷之四

飽海郡誌卷之四

第七編 市街

第一章 酒田町

肴町 俗ニ細肴町ト稱ス明曆圖ニ肴町十六軒「天和三年巡見使調書ニハ細肴町
 一丁家數廿一軒ト見ユ古來魚買多クコ、ニ住ス故ニ名ク



片肴町 同圖ニ片肴町廿六軒「天和三年巡見使調書ニハ片肴町一丁半家數四十
 二軒」ト見ユ其東側ハ龜ヶ崎城外郭ノ壘壕ニシテ人家ハ西側ノミナリシヲ以テ
 町名トナス當町ヨリ南東舊町奉行所址ニ至ル間ヲ廣小路ト字ス但壘壕ハ明治二
 年酒田民政局ヨリ埋立ヲ命セラレ其後宅地トナレリ
 上袋小路 同圖ニ上袋小路三十軒「天和三年調書ニハ家數七十六軒トアリ創始詳

事第三卷内町ノ
 下ニ詳カナリ

カナラズ地形袋ノ如キヲ以テ之ニ名ク

稻荷小路 山王宮當舞帳ニ寛永元年四月いなり小路治兵工ト見ユ由來久シ明曆圖

ニ稻荷小路廿七軒「天正三年調書ニハ稻荷小路二丁七十六軒トアリ町内ニ稻荷神

社アリ故ニ名ク但稻荷社ノ創祀
詳カナラズ

山椒小路 山王宮當舞帳ニ慶長十四年四月山椒小路九郎右工門トアリ由來久シ明

曆圖ニ山椒小路十九軒「天和三年調書ニハ山椒小路一丁十間家數四十六軒」ノ

見ユ名義詳カナラズ

渡部氏 當所ニ住シ古來準人ヲ通稱トナシ世々酒田町組大庄屋タリ事歴詳カナ

ラズ維新後退轉セリ

(天保十一年大庄屋勤書野附氏御
用留所載)

渡部準人
栗林新右工門

私共先祖之儀乍恐御初入以前ハ酒田町組大庄屋役相勤兩人ニ而御町方支配仕候…
尤古控等先年類焼之節焼失仕候ニ付年數駘與相譯兼候

○因ニ云正保五年御城廻リ御成箇土目錄ニ谷地御年貢米貳石七斗五升小遣準人
トアルヲ元文四年大町組谷地目錄ニハ六宮村西白鳥谷地反畝メ十八町三反余小

使準人ト見エ往時白鳥谷地ヲ所有セリ所謂小遣ハ役名ヨリシテ苗字トナレルモ
ノ、如シ同僚栗林氏モ亦當時小遣ヲ苗字トナセリ

中袋小路 明曆圖ニ中袋小路十四軒「天和三年調書ニハ中袋小路一丁家數廿六
軒」ト見ユ

實小路 本ト御宿小路ト稱ス天正十九年前田利家奥州南部ヨリ歸陣ノ途上林和

泉宅ヲ本陣トナシ當町ヲ將士ノ宿所トセラレシニ因リ町名トナス

(酒田町三組古控) 御宿小路廿五軒右御宿小路ハ天正十九年卯七月加賀侯南部九戸ニ

御出陣被遊御歸陣之砌上林和泉守ト申御方御泊相成右之下宿致候故御宿小路ト名

付ケ唱來申候 ○明曆圖書入亦大要之ニ同シ前田侯和
泉ニ係ル事跡ハ第一卷總説ニ詳カリ

明曆ノ比二十五戸ヲ有セシヲ天和ニ至リ三十戸トナリ明曆圖天和
三年調書 明治九年御字ヲ

避ケ今名ニ改メラル

山形藏址 同處ノ川岸ニアリ明曆圖書入ニ

一山形藏屋敷元和八年戌ニ鳥居家え御貸地ヲ同家にて公儀ハ拜領地貞享二年御糺
ニ付左之通

今度最上御藏屋敷御尋ニ付申上候

一山形御藏屋敷之義者出羽守様御代鳥屋五郎右衛門と申京之者にて出羽守様

吳服屋仕候由御當地え罷越御米百表申受沖ノ口入役錢相改申候宿ハ三ノ丁

松田又左工門所ニ罷在右御藏地え番所を立沖ノ口相守申候

一鳥屋五郎右工門京都え罷歸候後酒田町年寄三人ニ而右御米百表申受鳥屋五

郎右工門跡役儀相守申候

一山形者鳥井左京様御拜領庄内者宮内様御入部被爲遊候右之御藏屋敷山形へ

着罷在候様子者不奉存候

内町久敷者共

貞享二年丑十二月

與兵工 新兵工 九郎右工門
與次右工門 清右工門 利右工門

齋藤與右工門殿
伊東彌左工門殿

覺

一山形藏屋敷之儀宮内様御代鳥居左京様江御貸被遊候哉從公儀御拜借地ニ候

哉之旨御尋ニ御座候共其年經候義ニ付拙者共にも爲判然次第不奉存候此段

申上候以上

丑十二月十三日

齋藤喜四郎 伊東彌左工門

池田吉兵工 渡部隼人
栗林新右工門

鱸角兵工殿

右之通申上候へ共其後酒田町年寄二木重之助家ニ而持傳候書物ニ鳥居家ニ而御拜

領地與相分申候當時も山形屋敷と申彼家ヨリ御足輕番指置代々爲相守申候

ト見エ古來其性質不分明ナリシガ酒田町奉行堀平太夫名ハ季 二木相傳ノ文書ニ據

リ本ト鳥井戸澤兩家ノ拜領地タルヲ發見セラレ事ノ顛末所著ノ算露盤ニ掲載セリ

左ニ錄シテ參考ニ供ス

酒田御宿小路の南の川岸に有之山形藏之事いがある子細ありて彼御方へ地方を進

せられたるといふ實説知り難し龍門大夫の咄には鳥居家にて山形を拜領有けると

き達三公の御縁家の御よしみを以て藏屋敷を進たるに其後鳥井家滅亡保科正之の

領地となる時不吟味にて其まゝ附渡りに保科家へ任せられしかば夫より終に山形の

藏屋敷といふ事に成て山形の領主幾度代りても其まゝに持傳へられたるよし聞及

りと申されしもさもあるべき説ながら記録とてもなく只一説に聞てありしに安永

年中雄酒田町奉行え移りて御町年寄加賀屋與助か方にある戸澤侯の書翰を見て始

めて年來の不審晴たり其文に

猶以能處任入候隨而先日ハ能酒給祝着申候

中村助右衛門差越候間一書申遣候仍酒田藏屋敷當地致入部候刻前之從將軍様
鳥居左京拙者拜領申候其後何角取紛候故程延候酒井宮内殿え右之通申入候處
如在無之由申來候間則其方ニ預置可申候條能處を可有請取候委細助右衛門可
申候

八月十七日

戶澤左京 盛 丞

恐々謹言

加賀與助殿

右書翰の趣あれハ元和八戌年鳥居戶澤兩家共ニ最上の舊領を被下候時收納米運送
の爲め酒田にて藏地を公儀を被下たるなるへし元和八新庄へ入部の戶澤侯は政盛
なれば書中に前之將軍とあるハ 台徳院様の御事あるへし其後鳥居家にてハ拜領
の藏屋敷を請取て普請し戶澤家にてハいかなる子細敷ありて其地處を請らて濟來
れると見へたることし其比戶澤家の評議に遠處へ新規ニ藏を建て番人などすへ置
かんより年々限ニ町藏を借て積入たる方火災彼此の心遣ひもあく便利也といへ
る分別にて拜領ハしたれど地所ハ請取らで差置けんも知るへからす

下袋小路

明曆ノ比十八戸ヲ有セシニ天和ニ至リ四十六戸トナレリ

明曆圖天和
三年調書

利右門小路

酒田町長人松田氏ノ家傳ニ村井理右工門コレニ住セシヨリ町名トナ

スト庄内昔聞書ニ據ルニ天文ノ比村井理兵工上林永田ト共ニ町年寄タリシト理

右工門ハ理兵工ノ子孫ナルヘキモ事歴詳カナラズ明曆ノ比十四戸タリシヲ天和

ニ至リ卅三戸トナレリ

明曆圖天和
三年調書

栗林氏

世々酒田町組ノ大庄屋タリ由緒詳カナラズ正保五年御城廻り土目錄ニ

谷地年貢米貳石五斗小遣新右工門ト見エ古來山居谷地反畝十七町七反三畝歩ヲ

所有ス

元文四年大
町組合地帳

但小遣ハ本ト役名ヨリシテ苗字トナリ後チ栗林ト名乘リシモノ

ナルヘシ

染屋小路

山王宮當舞帳ニ正保三年成四月中ノ申日染屋小路亦右工門トアリ明曆

圖ニ町名ヲ記シ戸數ヲ載セズ天和三年調書ニ染屋小路半町家數十六軒ト見ユ

以上上袋小路ヨリコ、ニ至ルマデテ河岸八町ト汎稱ス

根上小路

本町六丁目七丁目、間粕谷小路ノ南通ヲ云フ三十六人ノ内根上善兵工

ナルモノ其東角ニ住ス故ニ此名アリ明曆圖ニ町割アリテ町名ヲ記セズ天和貞享

頃ノ酒田繪圖ニハ之ヲ「イトヤ小路」ト注セリ山王宮當舞帳ヲ閱スルニ元和元年

四月中ノ申糸屋太右工門同三年同月糸屋彦三郎寛永三年同月糸屋太右工門寛文

三年四月四ノ丁糸屋太右工門ヲ始メ糸屋ヲ名乗ルモノ多ク見ユサレバ往時糸屋ナルモノ、宅地若クハ抱地^{ウカヘチ}ナドアリシヨリ字セルモノナルヘシ文化十年ノ酒田繪圖ニハ當町ニ「木戸」ノ二字ヲ記セリ事由詳カナラズ

中町 通向フ酒田ノ人家當所ニ移轉スルヤ本町通先ツ成リ寺院ハ今ノ内匠町通ニ居ヲ占メ隨テ人家其附近ニ点在シ本町ト内匠町ハ裏地接續セシガ慶長元和ノ際其中間一帯ノ裏地ヲ收メ更ニ町割家作セシム即チ中町通ノ起原ナリ事泉流寺縁起ニ詳カナリ 第三卷町役人ノ下参照スヘシ 明曆ノ比七丁ニテ百廿三戸ヲ有セシニ天和二年マテノ間ニ鍛冶町桶屋町大工町ノ名字出テ貞享三年マテニ上中町下中町ト分レタリ

(明曆圖書入) 中町七丁ニ而百廿三軒元和年中ヨリ明曆二年マテノ内ニ出候町ニ相見候其後右七丁之内一丁目を鍛冶町二丁目を桶屋町三丁目を大工町右三町天和二戌年迄之内相分申候但中町七丁ノ内上中町下中町ト相分候者貞享三年迄相分ル

酒田町三組古和之ニ同シ

(天和三年巡見使調書) 中町四丁同横町四丁家數百十六軒

下鍛冶町 本ト新鍛冶町ト稱ス之ヲ下鍛冶町ト云フハ一丁目ナル鍛冶町ヨリ地勢抵下セルヲ以テナリ北側ハ寛永十五年ヨリ正保二年マテニ成リ南側ハ酒田城外郭ノ壘濠ナリシヲ明曆三年ヨリ元祿中マテノ間ヲ以テ漸次家作セルモノナリ但北側ノ小路ヲ俗ニ雷小路ト稱ス由來詳カナラズ

(明曆圖書入) 新鍛冶町ハ今ノ下鍛冶町ナリ北側者寛永十五年ノ正保二年酉年迄八ヶ年之間家作始リ南側ハ古來ハ古堀形土手有之候處明曆三酉年ハ元祿年中迄追々家作相始申候

鍛冶町 明曆圖ニ中町一丁目屋敷十四軒ト見ユルモノ即チ是レナリ天和二年マテニ鍛冶町ト稱セラル古來鍛冶渡世ノモノ多ク之ニ住スルヲ以テナリ天和三年調書ニ鍛冶町二丁家數八十七軒トアルハ當町ト下鍛冶町ヲ云ヘルナリ

桶屋町 明曆圖ニ中町二丁目屋敷二十軒トアリ天和二年マテノ間ニ桶屋町ト稱セラル是レ其桶結多ク住スルヲ以テナリ同三年調書ニ桶屋町一丁家數卅二軒ト見ユ案スルニ山王宮當舞帳ニ慶安二年四月中ノ申桶屋町助五郎トアリサレバ慶安ノ比既ニ此名字アリシヲ天和ニ至リ公稱トナセルモノカ

大工町 同圖ニ中町三丁目屋敷廿一軒トアル是ナリ古來大工多ク住スルヲ以テ

天和二年マテノ間ニ大工町ト稱セラル同三年調書ニ大工町一丁横町一丁此家數三十八軒ト見ユ所謂横町ハ當町ノ北側東通リヲ云フ

上中町 同圖ニ中町四丁目屋敷十九軒五丁目廿一軒ト見ユ天和三年ヨリ貞享三年マテノ間ヲ以テ上中町ト稱セラル

下中町 同圖ニ中町六丁目屋敷廿軒七丁目八軒トアリ天和三年ヨリ貞享三年マテノ間ヲ以テ下中町ト稱セラル

堀 端 本ト片平町ト稱ス其東側ハ酒田城外郭ノ土居堀ニシテ人家ナカリシヲ以テナリ明曆圖ニ片平町屋敷五軒酒田町三組古扣ニ片平町當時堀端ト云五軒ト即チ此レナリ

林昌寺小路 俗ニ上ノ山ト字ス其地高敞ナルヲ以テナリ永祿三年ヨリ寛永元年マテノ間林昌寺ノ境内タリ故ニ名ク今其西側ニ六字名號ノ碑アリ是レ寺址ノ紀念トシテ建テシモノナリト云フ 事林昌寺ノ下ニ詳カナリ

藥師神社 本ト酒田溪藥師ト稱シ高野濱ニアリ別當ヲ万福寺ト云フ年代不詳今ノ

秋田町西側ニ遷サレシガ万福寺廢絶ノ後々寛永中桶屋町ノ修驗寶鏡院ニ別當ヲ命セラル此時藥師堂ヲ宅地内ニ遷シ世々コレニ奉仕セリ明治三年藥師神社ト改メ寶鏡院ノ子孫無量院之レガ社人トナレリ

(元祿九年酒田御町無役地改帳)

一貳軒屋敷

無役

桶屋町 寶鏡院

上拙僧屋敷ニ藥師安置仕候義酒田湊之藥師ト申候而興野之濱ニ御坐候別當ハ万福寺ト申候右之堂秋田町邊え引取御免地ニテ御坐候此寺貧地ニ而倒申候其以後御町奉行阿部五郎右衛門殿勝木多左衛門殿ハ千手院子寶鏡院ニ被仰付拙僧屋敷御堂造立仕候右之藥師佛安置仕候兩政ト申先祖ハ代々拙僧迄六代御免地之由ニ御坐候

參照

(泉流寺緣起)

上

尼公の守り本尊藥師如來を信仰して泉流庵と改め……………文

龜年中當寺の開山風芝正全大和尚……………泉流寺と改め本尊釋迦如來を安置し奉る

……………元本尊藥師如來ハ修驗無量院の願ニ依テ上の山ニ移しぬ云々

伊勢津小路 俗ニ下之山ト字ス即チ伊勢津小路ノ南通リナリ明曆圖ニいせつ小路屋敷八軒天和三年調書ニ伊勢津小路一丁家數十二軒ト見エ北通横町ニ伊勢堂

アリ故二名ク

(元祿九年酒田町無役地改帳)

一貳軒屋敷

無役

大工町藥王院跡

千

鏡

坊

此屋敷古來伊勢宮社屋敷ニ御坐候拙者先祖千壽院と申者本國米澤之者ニ御坐候處最上え罷越山形ニ住居仕候出羽守様御代酒田御城代志村伊豆殿被レ成ニ御坐候節山形酒田え被レ召寄一桶屋町之末ニ屋敷罷在候處ニ何年以前ニ候哉只今之伊勢宮別當被レ仰付一此屋敷え移申候古來之義儲ニ存不レ申候へ共代々伊勢宮社御免地ニ而拙僧迄五代罷在候

和泉小路 明曆圖ニ「御宿小路通五軒」ト見ユル是レナリ俗ニ上林小路又あられ小

路トモ字ス其西側ハ上林和泉ノ宅地ナリシヲ以テ之レニ名ケラル

柳小路 本ト地藏院小路ト稱ス後チ藪田小路ト字ス明曆圖ニ地藏院小路屋敷九

軒「天和二年調書ニ地藏院小路一丁家數十四軒」ト見ユ庄内昔聞書ニ據ルニ往時

此處ニ地藏院ナル佛刹アリシガ住僧死亡ノ後チ廢院トナリ本尊地藏ハ海晏寺ニ

安置スト云フ町名之ニ因レリ藪田小路ノ字ハ松田氏ノ家傳ニ長人藪田彌右衛門

ナルモノ、居宅アリシヨリ名クト藪田氏ノ事歴詳カナラズ明曆四年八月山楯組

御成箇拂御勘定目錄 大泉記 二 年所收

一米千七百卅九表三斗六升九合ニタ

御城米御金拂

内五 百 表

但六十四表三分直段

加賀屋清兵衛ニ渡ス

内四百三 表

但六十三表ノ直段

藪田善兵衛ニ渡ス

一大豆二百四拾九表

御 金 拂

内百六拾四表

但八十三表直段

永田茂右工門へ渡

トアレハ當時加賀屋永田等ト共ニ問屋ヲ營業セシモノナルヘシ

柳小路ノ字ハ寶曆十年火防ノ爲メ道幅ヲ擴メ柳ヲ植付ケ溝渠ヲ堀立テラレシヨリ起レリ事ノ顛末砂瀉文庫ニ詳カナリ即チ左ノ如シ

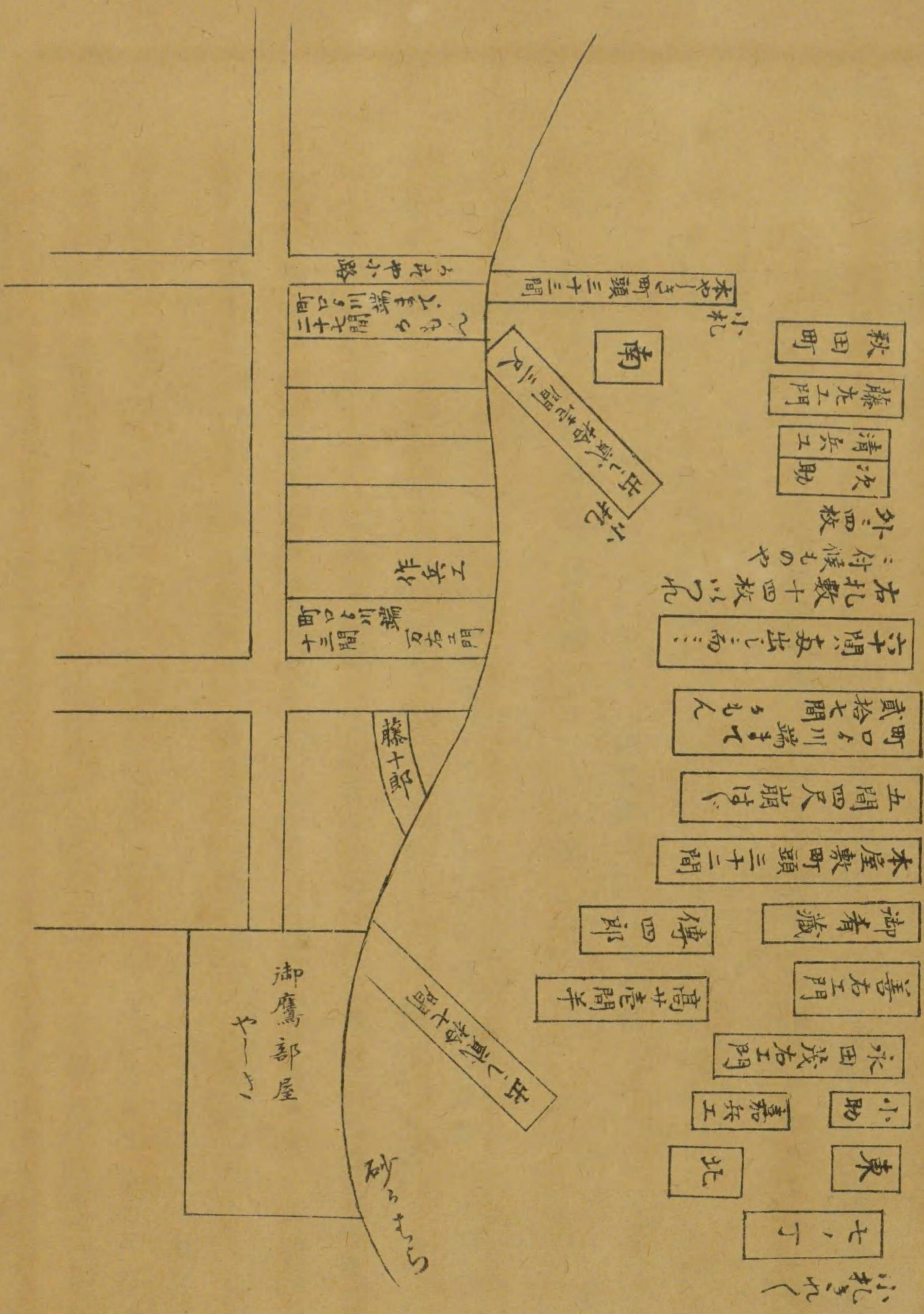
寶曆十辰年利右衛門小路ヨリ寺町迄二百四十三間余巾四間三尺廣目候ハバ都合拾間三尺此地金百兩余内參拾兩上ヨリ拜借被レ仰付一上納者壹ヶ年三兩宛十ヶ年賦殘リ七十兩御町方にて調達いたし其節ヨリ廣小路ニ相成其後中通え柳植付堰を堀立新井田川ヨリ水を揚候事ニいたし候へとも一体砂地にて水持無之夫切にいたし置候處文化十酉年山中傳大夫様御町奉行御在役之節火防ノ爲メ高サ壹丈余之土居古

堰跡へ築立之御工風被成候處同年諸國とも米穀不熟ニ而最上御私料米其外下し物無之冬分ニ至リ舟乗丁持共難澁之折之處右思召ニ付御町方成内之者寸志人足賃錢差出右難澁之もの共相究右塲處へ御取掛被成候處一統骨折土居全成就致然處翌年ニ至リ土居處々地低ニ相成候處根上善平本間正七郎ト遂相談土もり立本町中町工町口之口々切石ニテ積立利右衛門小路ヨリ寺町迄兩側土居敷え土留石寸志差上無殘處成就いたし候ニ付右兩人厚志之義ニ付從御家老中御言葉之御稱譽被成下候其道幅ヲ擴メ廣小路トナシ火防線ヲ作ラレシハ百載ノ下町民餘澤ヲ被リシモ下水ノ溝渠ハ徒ニ汚水ノ溜溜スル所トナリ適々衛生ノ妨害タルニ過キサリシヲ以テ明治卅三年更ニ土樋管ヲ伏セ溝渠ヲ埋メ以テ今日ノ觀ヲナスニ至レリ

持地院小路 明曆圖ニ持地院小路屋敷十軒「天和二年調書ニ一丁十六軒」下見ユ長錄三年ヨリ元龜元年マテ持地院コ、ニ在リ故ニ名ク事彼寺ノ下ニ詳カナリ

(酒田町三組古控)持地院小路十軒此持地院小路之義者長祿三亥年元龜元子年迄百十二年之間持地院境内也

粕谷小路 同圖ニ粕谷小路屋敷九軒「天和二年調書ニ粕谷小路一丁家數十七軒」ト



見ユ往時長人粕谷氏ノ居宅アリシニ因リテコノ名アリ

因ニ云フ明曆二年十月大風雨ニテ本町七丁目裏ヨリ御肴藏下マテ
明曆圖參照スヘシ崩壞セリ
之ニ係ル圖書酒井家御土藏記録寫ニ收メラレ地勢ノ變遷ヲ徵スヘキモノナレハ左
ニ之ヲ掲ク

酒田御町川崩普請御入用之覺

一六十間ハかしや小路出し下より御肴藏出し迄崩申分

一五間四尺ハ崩端但町皆地形ヨリ水きわ迄

一壹間半崩無土

右ハ長六十間巾五間四尺之處土砂俵ニ而置上ケ申分 此坪數算ニハ五百拾坪内
四百五十坪ハ土坪船にて取申分 此人足三千六百人 但一坪ニ付八人宛 (下略)

以飛脚致啓上候其表彌御健勇ニ可被爲成御坐と奉存知候隨而先月大風ニ而酒田
御町七ノ丁川崩之所御普請ニ被仰付御人足万御入目之分もくろみ書付差上可
申之段奉得貴意候彼地ハ兩度迄諸役人召連拙者共罷出明細ニもくろみ仕書付
別紙差上候内々疾にも右之段可申上候へ共打續天氣惡敷御坐候ニ付延引仕候
最早川岸雪積氷り申候而船自由不能成候此分ニ御座候而ハ當年御普請被仰付
候義ハ難罷成奉存知候惣而川岸通リ雪積氷リ候へバ此上冬中破損も出來仕間

敷かど奉存知候間來春中ニ御普請被仰付可然様ニ奉存知候其内罷登可奉得貴
意候條先乍慮外以飛札如此ニ御座候恐惶謹言

明曆二年申十一月十二日

成澤彦右衛門花押

加藤彦兵衛花押

石原平右衛門様

末松吉左衛門様 御小姓中

猶々申上候七ノ丁川崩屋敷形之繪圖差上候間御覽被下度候

十王堂町 十王堂アリ故ニ名ク明曆圖ニ今ノ檜物町北角ヨリ十王堂ニ至ルマテノ
間ニ横鍛冶町屋敷二十軒ト記セリ當時鍛冶町ニ對シ雷小路通りヲ横鍛冶町ト
字セシナリ但十王堂ノ由緒詳カナラス

正徳寺 休林山ト號ス曹洞宗海晏寺末ニシテ釋迦如來ヲ本尊トナス寺傳ニ長祿
二年本寺第三世正全ノ創始スル所ト云フ本末世代御改書上帳ニ據ルニ正全ハ大
永元年巳二月廿日ヲ以テ入寂ス本ト後方ノ砂濱ニアリシヲ最上時代ニ現境内ニ
移轉セラル明曆圖ニ面三十三間三尺裏八十四間ト見ユル即チ是ナリ爾後數回ノ

火災ニ罹リ記録焼失シ事歴ノ徵スヘキナシ

(寺社奉行所留控)覺

一南表口 三十三間 一北裏口 貳拾七間三尺

一西之方 九十四間三尺 一東之方 九拾四間三尺

右者正徳寺々屋敷ニ御座候元來ハ後ノ砂濱ニ御座候處最上出羽守殿御代ニ只今之
處ニ願被下置候由申傳候今度御尋ニ付申上候少茂怪敷儀無御坐候若相違之儀申上
候ハ、後日ニ御驗議之上拙僧何様にも可被仰付候以上

元錄十二年五月

酒田禪宗

正徳寺 印

同宗 加判

天正寺 印

寺社御役所

海晏寺 河雲山ト號ス曹洞宗奥州膽澤永徳寺末ニシテ小本山タリ釋迦如來ヲ

本尊トナス寺傳ニ應永三年三月本寺第二世理元ノ創始スル所ナリ
總光寺開山月庵行
狀記之レニ同シ

本ト向酒田ニアリシヲ年代不詳現境内ノ後方砂濱ニ移轉シ最上時代更ニコ、ニ

移建スト明曆圖ニ南四十六間三尺裏八十四間ト見ユ當寺亦數回ノ火災ニ記録燒失シ事歴ノ徵スヘキナシ塔頭ニ端泉庵アリ

(錯薪編)開山潮海理元永享四年四月十日卒ス河北田川郡向酒田地所ニ引移候哉年數不相知候ヘ共當境内ヨリ後口ノ方濱手ニ引移有之其後最上出羽守様領分之節當境内ヘ引移ト有之候ヘバ慶長六年ヨリ同十九年迄之内ニ相見申候云々

愛宕神社 軻遇突命ヲ祭ル丹波國愛宕山ヨリ勸請スト云フモ年代事由詳ナラス

羽源記及五大院書留夢宅年代記等ニ當社ニ係ル記事アルモ今之ヲ取ラス 明治九年郷社ニ列セラル同卅 年 月 日社殿

類燒同卅六年五月之ヲ再建ス

新鍛冶町 本ト茶筌町ト稱ス住時茶ノ竹編様ノモノヲ行商スル賤民ノ住處タリシ

ニ依リ之レニ名ケラル天和ノ比笠屋町ト改ム同三年調書ニ笠屋町半町十軒ト即チ是レナリ後チ人家漸次増加シ從來住居セシ茶筌笠屋渡世ノ賤民自ラ跡ヲ絶チシカバ文政二年新鍛冶町ト改メ町並ノ歩役ヲ課セラル

(明曆圖書入)茶筌町五軒 天和二年迄之内笠屋町ト改近來住居之者追々他所ヨリ引移候者共ニ而古來ヨリ住居致候茶せん類之者一人も無之候ニ付地面相改鍛冶町

歩役之通新規ニ文政二年卯三月被仰付新鍛冶町ト相改申候當時家數十六軒

坂ノ上 往時南ハ五大院北ハ持地院泉流寺境内ニシテ民家ナシニ寺移轉ノ後

チ町並トナリ内匠町分ニ屬セリ

天滿神社 菅原朝臣道真公ノ靈ヲ祭ル創祀詳カナラス社僧ヲ五大院ト稱ス明治

三年神佛分離ノ際社人トナリ今尙奉仕セリ明治九年村社ニ列セラル

(明曆圖書入)天神堂いつ比造立候哉相分不申候其梅の古木有之候故近邊ニ有リ來る天神堂を引移造立いたせしと申傳其後天和三年香爐の火ヨリ出火して燒失すと

いふ (錯薪編)五大院開山天堂海と申羽黒山一人之行人ニ而天正年中越後國ヨリ引越俗姓高梨氏といふ福藏坊と申弟子有之候得共上杉家領分之節文祿二巳年四月朔日早世スと云其後最上家領分之節志村九郎兵衛殿ヨリ屋敷無役地ニ被申付と云元和八戌年被遊御入國御改之節天堂海右之由緒申上御免地ニ被成下天堂海死去年月書物燒失して不相分といふ跡式平田郷大町村近邊ニ五大院と申羽黒派修驗ニ而相續す (五大院先祖書覺)

大永院殿廣譽法全大居士

天正六戊寅頃ノ人

天童海生國越後國俗姓高梨氏

文祿癸巳四月朔日

福藏坊修驗 但二代目早世

慶長九甲辰比

五大院法印妻帶三代目

右當御城東之方大町村邊ニ住居仕候其後只今屋敷上ノ山ト申處最上出羽守義光公御城代志村九郎兵衛様御祈禱仕拜領地ニ被仰付候處元和八戌年中酒井宮内大輔様御入國被遊候而元祿九年寺屋敷御改在之今度格別御免地被仰付候

東西四十五軒三尺北南貳拾三軒内

參照 (元祿九年酒田御町無役地改帳)

一壹軒屋敷

無役

大工町

教

重院

是ハ最上出羽守様御代龜ヶ崎御城代志村九郎兵衛殿ハ拙僧先祖天堂海ト申一世之行人ニ無役地ニ被下置候宮内様御入國被遊候以後御町御改之節天堂海右之由緒申上御免地ニ被成下持來候天堂海跡式五大院義ハ拙僧親ニ而御坐候親五大院相果候而兄弟一家ニ罷在候處ニ三十八年以前先五大院方々右之屋敷之内分地ニ仕拙僧罷在申候其節御町奉行乙坂六左衛門殿へ御斷申上候へハ先祖ハ修驗屋敷之段御開届被成御免地ニ被仰付候拙僧只今迄罷在申候

時

鐘 元祿三年町奉行鱸角兵衛ノ創意ニ成り五大院ニ時報ヲ司ラシメ撞料ト

シテ年々金拾兩ヲ下附セラル事ノ始末鑄造費用等左ノ記録ニ詳カナリ

(承露盤) 酒田五大院時鐘之由來

元祿三年午年酒田御町奉行鱸角兵衛發端ニ而酒田へ時鐘建立いたさせ度發端ニ而町役人共へ申達候處兼々町中一統に此儀志願ニ候へ共新規ニ鐘樓建立候義過分之入用ト申年々鐘撞料差出させ儀も容易無之候間是迄默止居候由申ニ付右入用之事何分上ヨリ御手當被成下候様申上方も可有之間是非とも申立可然旨勸候間願書差出させ御家老中へ申上候處追而御沙汰可被成由ニ而其後御差圖も無之候間同七戌年又々右之趣奉願候處入用之義ハ御評議之上追而可被仰付候間先ッ町中之力ニ而建立可致旨被仰付三町大分之出金いたし鐘を鑄立鐘樓をも建搗料をも當分町中として差出し上ヨリ御手當之被仰出を相待居候處間もなく角兵衛役替いたし右之くさりをも失候様ニ成候而御手當之御沙汰も無之ニ付寶永二酉年町役人とも連判を以時鐘搗料之義御町奉行山田四郎左衛門へ願出候ニ付其段申上候處翌三年戌十一月右搗料之義此末年々金拾兩宛町役人願書ニハ御米三十表宛被下置度旨相したため候五大院へ被下寺社奉行支配ニ被仰付候旨被仰渡同月晦日四郎左衛門添狀ニ而五大院鶴岡へ罷登寺社奉行御役所罷出此御之寺社奉行安倍惣内野澤與一左衛門吉田八右衛門御家老中御差圖頂戴仕候

覺

一金子拾兩者

酒田天神別當

五大院

右者酒田御町時鐘撞料奉願候ニ付壹ケ年ニ金子拾兩宛右五大院へ被下置候自今以後相渡候様御役人え差圖可有之候以上

戌十二月朔日

賴母(上田)

舍人(松平)

内藏助(水野)

武右衛門(松平)

伊右衛門殿(平林)

宇右衛門殿(大場)

善右衛門殿(長尾)

然處寛延三午年御儉約ニ付右搗料町役ニ可被仰付御計議にて有之候哉御町奉行中田七郎兵衛へ酒田時鐘之由來並搗料上ヨリ被下置候次第具ニ可申上旨御家老中被仰付別段之趣相認差上候處其後兎角之御沙汰無之候

(明曆圖書入) 寛延三午年十一月中時鐘料被下置候譯古來之次第御糺ニ付左之通申上候

酒田時鐘撞料御町役人九人連判を以て公義様へ奉願候處ニ寶永三年戌十一月相叶御町奉行山田四郎左衛門殿え被仰渡候趣右御町役人ヨリ之願ニ候へ共今度別而五大院ニ被下置候間自今以後若者寺社奉行之支配ニ被仰渡候由山田四郎左衛門殿ヨリ拙者被召出同十一月廿九日右被仰渡候由御申渡被成別ニ四郎左

衛門ヨリ御狀御添被成同晦日鶴岡え罷登即刻寺社奉行所御月番野澤與一左衛門殿に罷出候處同極月朔日寺社衆三人安倍惣内殿野澤與一左衛門殿吉田八右衛門殿御登城被成候處ニ御家老中ヨリ御差紙被下置候
右者其節之五大院自分之覺留置候儘ニ御坐候以上

午十一月

(野附氏御用留) 寶永六年己七月五大院ニ御坐候時鐘鑄物師吉右衛門鑄直し申候前の際かね吉右衛門鑄候へ共われ申候ニ付吉右衛門入めに而仕候同時鐘樓堂立直り修覆此入め三町ヨリ出ス一人ニ付壹文半カ、リ但時鐘出來候祝儀銀三枚吉右衛門方へ遣申候

(五大院舊記御用帳) 貳尺六寸之撞鐘入用之覺

一地かね貳百貫目

内百拾參貫目古地金買置代金八兩但壹貫匁ニ付銀四匁壹分六厘三毛
一同九拾貫目 新地かね

代金七兩二步但壹貫匁ニ付銀五匁替

地金ノ位ニヨリ此内殘リ申候とも知れ不申候

一とたん五貫目

代金壹兩壹步但壹貫匁ニ付銀百五拾匁替

是も地かねの位により此内残り申も知れ不申候

一錫拾五貫目

代金三兩三步但壹貫匁ニ付銀百五拾匁替

是も地かね之位ニ付此内残り申も知れ不申候

惣目形ノ貳百貳拾貫目

内六拾壹貫匁ヘリ但減リ二割七八歩之積ニ仕候かね位ニ付二割減リニ成申候
も知れ不申候

同貳拾四貫目 餘慶かね

是ハ地かね之位ヨリ三四十貫匁も残り申も知れ不申候

同百三拾五貫匁撞鐘正味之貫目

一金拾五兩

作料

一同貳兩壹歩位

炭

一同壹歩

土 大竹

一同壹歩二朱

柴

一同貳歩二朱

釘鍵但遣捨ニ仕候分

一同貳歩

作料

一同六兩

惣ノ金參拾兩貳歩

右之通中勘定仕申上候作料之儀御町之儀ニ御座候間拙者利分取申儀無御座候手間
扶持方入用迄勘定仕候己上

戌二月

鑄物師

吉右衛門

元祿七年甲戌閏五月廿四 日御町時鐘酒田内匠町國松吉右衛門鑄ル

鐘樓並常香盤鈴臺諸掛入目之覺

一拾四本

八寸二間角壹兩ニ付十一本替

但金壹兩壹歩貳匁貳分七厘也

一六本

七寸貳間半拾本替

代金貳歩拾匁

一拾貳本

八寸八尺十八本替

代金貳歩十六匁六分六厘

一八本

五寸貳間木廿四本替

代金壹歩八匁三分三厘

一拾五枚

鹿料板

代金壹兩貳歩六百十三文

一 壹枚 六寸貳分かけ
 一 代六百支
 一 貳本 五寸一丈
 一 代貳百五拾丈 三寸釘
 一 八八只十八本釘
 一 八八只十八本釘
 一 七百年本 一寸五分釘
 一 代貳百十文 二寸釘
 一 一千百本 八寸二寸釘
 一 代五百文 戸はぎ
 一 七百年本 車ノしん戸五本分
 一 代百四十文
 一 十本
 一 鐘つりかね 但五貫目
 一 代金貳步貳朱

一 くらん 五ッ
 一 香ばん 代三百文
 一 代壹ノ八百文 但からかねにて
 一 鈴臺 代五百文
 一 金六兩ト九百六拾壹文
 一 戊五月
 右之鐘樓出來三町仲間立會同六月三日ニ時鐘供養五大院宅え談議所申請御布施金
 壹步御同宿三人に鳥目六百文國松吉右衛門え上下一具扇子一枚大工町利兵衛へ鳥
 目六百文出し申候
 人敷之覺
 一 壹萬九百六十八人 酒田町
 一 此錢百六十四貫五百文
 一 貳千二百八十人 内町
 一 此錢三拾壹貫八百文

一千六百五十人

米屋町

此錢貳拾四貫七百五十文

三口合壹萬四千七百三十八人

但一人ニ付十五文宛出錢寺社人名子借宅とも

戊五月二日

栗林新右衛門宅にて割

右は時鐘造用鐘樓入用とも新右衛門勘定請込米屋町分野附七兵衛請込

内匠町 元和五年ノ町割ニシテ肝煎齋藤内匠之二與リテ力アリ故ニ町名トナス

(明曆圖書入)内匠町五丁ニ而九十三軒半此内匠町者最上家領分之節元和五末年齋

藤内匠と申者頭取ニ而御町並ニいたし申候處其節ヨリ代々肝煎役相勤來候處右内

●末孫長三郎岡丁持加役之義ニ付不調法有之寛政二戌年肝煎役共御取上被_レ仰付候

参照 (元祿九年酒田御町無役地改帳)

一軒屋敷 無役

上内匠町

法 性 坊

是ハ會祖父兵部大輔と申者酒田粕谷小路ニ罷在候七十八年以前○元祿九年ヨリ逆算ス最

上出羽守様御代内〇町と申町立申候間肝煎内匠方へ申入一軒屋敷取申候而其節

最上奉行齋藤筑後殿高橋伊賀殿寺内近江殿此三人之衆ヨリ御免地ニ被_レ下置候拙

僧迄四代無役ニ罷在候

明曆ノ比一丁目ハ十九戸、二丁目ハ廿六戸、三丁目ハ廿二戸、四丁目ハ十九戸、

五丁目ハ八戸ヲ有セシヲ天和三年調書ニ上内匠町二丁目横町二丁家數九十四軒

下内匠町三丁目廿間横町三丁家數百十四軒トアリ

一丁目横町 明曆圖ニ屋敷四軒トアリテ町名ヲ記セズ即チ伊勢津小路ノ北通ナ

リ當處ニ神明宮アリ伊勢津小路ノ字盖コレニ因ル伊勢津小路ノ下参照スヘシ

二丁目横町 同圖ニ軒數名字ヲ記セズ俗ニ仙庵小路ト字ス

三丁目横町 同上俗ニ善右衛門小路或ハ柳小路トモ字ス

四丁目横町 同上俗ニ挾ハサミ小路ト字ス

五丁目横町 同上俗ニ於夏小路ト字ス

寺町五丁 明曆ノ比一丁目ハ八戸、二丁目ハ十三戸、三丁目ハ十戸、四丁目ハ

七戸、五丁目ハ四戸通計四十二戸ニ過キス是レ其大部分ハ寺院ノ境内ニ屬セシ

ヲ以テナリ後チ民家漸ク増加シ天和三年ニ至リ八十七戸トナレリ明曆圖天和三年調書

妙法寺 本長山惠光院ト號ス日蓮宗本成寺派准聖跡ニシテ南無妙法蓮花經寶塔

及釋迦如來多寶如來ヲ本尊トナス

草創ノ年月詳カナラズ開基日盛ハ長享元年十月廿八日ヲ以テ入寂セリ

(右什物帳裏書)妙法寺開基惠光院日盛未詳其俗姓焉結堂宇於龜ヶ崎西濱功成長享

元年丁未十月廿八日卒

本ト小湊ニアリシヲ酒田西濱御藤山ノ東粕塚山ノ南安祥寺北西ニ移轉ス舊址今

尙妙法寺屋敷ト字シ往々古墓碑ヲ發見スルコトアリト云フ

案スルニ之レニ係ル事歴文書ノ徵スヘキモノナシ往時小湊ハ繁華ノ地ニシテ應永

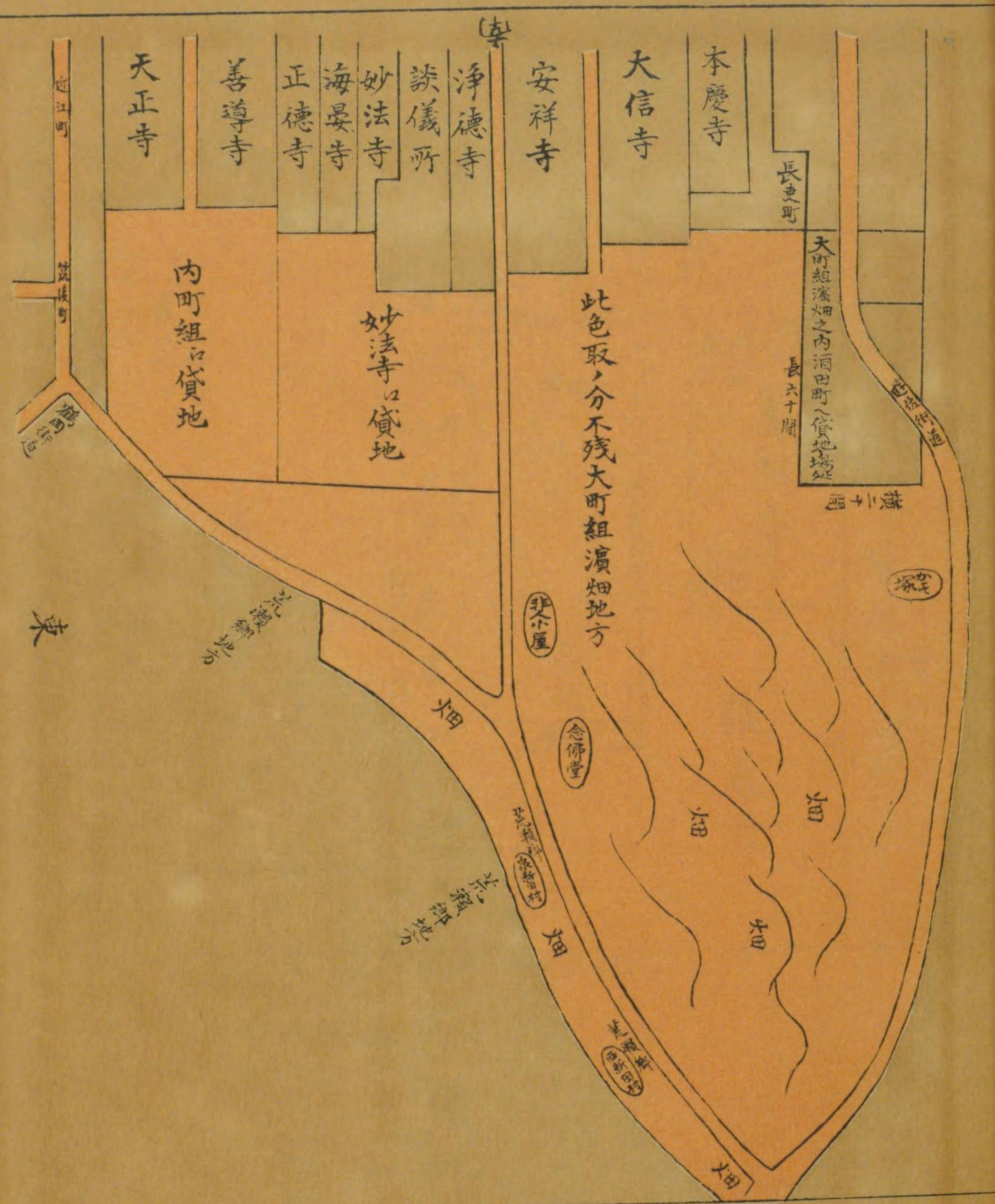
三年奥州膽澤永徳寺理元ナルモノ來リテ一寺ヲ創立シ之ヲ持地院ト名ケタリシヲ

後チ向酒田ノ人家當所ニ移轉スルニ及ヒ小湊ノ民家多ク酒田ニ移住シ持地院亦コ

レニ隨ヒ移リシコト彼寺ノ下ニ詳カナリサレバ當寺モ亦同一ノ關係ヨリシテ移轉

セシモノナルヘシ 移轉ノ年代詳カナラサルモ寺傳ニ大永五年第二世日助ノ時代ナリト云ヘリ夫レ

或ハ然ラン



右以妙法寺所藏原本圖之原圖約十四分一

學

地持院

泉龍寺

道

林昌寺

面三拾三間三尺
裏八拾四間

面四拾壹間三尺
裏八拾四間

正德寺

海安寺

門

佛堂

佛堂

佛堂

庫裏

表里裏八拾五間

佛堂

此間
借地之內

佛堂

客殿

佛堂

此間
四拾八間

面貳拾八間
裏六拾八間

高照寺

佛堂

面貳拾八間
裏七拾六間三尺

淨德寺

談義所

田

海

南北縱八拾間

借地

南北縱八拾間

田畝積百間

北

右繪圖之通大町組濱畑分之地方借用申候處實正御座候明細別紙證文相渡申候以上

元祿拾壹年寅十月

日永時代

酒田妙法寺

加判妙法寺脇寮

立行坊

加判酒田町

粕谷半右衛門

同斷酒田町

永田茂右衛門

惣禮中

濱畑肝煎

甚四郎殿

同町人百姓

彌右衛門殿

同

惣御百姓中

大町村肝煎

字兵衛殿

案スルニ日助ハ古什物帳ニ扇師御本尊妙法寺住持淨泉房日助ノ授與之永正第二ナド見エ過去帳ニ據ルニ永祿

二年四月十四日遷化セルモノナリ

寛永六年第四世日遠御藤山ノ東ヨリ寺町通今ノ丹門ノ中ニ堂宇ヲ建立セラル明

曆圖ニ西二十四間裏六十五間ト記スルモノ即チ是レナリ

(錯薪編)開基日盛長享元未年十月廿八日卒ス往古之境内酒田西濱御富士山より東

に當り馬口勞町通遊佐海道ヨリも少し○此間脱字アルヘシ粕塚山を南ニあたり安祥寺北少し

西にあたりと有之四代目日遠の時寛永六巳年當時のあか丹門の中に引越天和三年

亥正月公儀書上日蓮宗妙法寺と有之其後中興日永の時元祿十一寅年今の境内引移

享保十八丑靈光院様川北御巡國之節書院え被爲入其後代々様川北御巡國之節爲入

御例ニ罷成塔頭眞坊學仙房ニケ寺有

第十一世日永火災ヲ憂ヒ元祿十一年更ニ大町組濱畑地方東西百間南北八十間ヲ

借用シ堂宇ヲ移建ス實ニ是レ現今ノ境内ナリ

(當寺過去帳書入)

元祿十二己卯五月御町寺社屋敷間數明細書上可申由被仰渡候扣

從鶴岡御下り檢地役人 山澤半左衛門殿 御步行御目付 万年治郎左衛門殿

覺

南表口二十二間五尺四寸
北裏通六十一間六尺
但六尺三寸竿
西方五十一間四尺三寸
東方六十一間六尺

右者妙法寺々屋敷ニ而御坐候最上出羽守殿御代迄者安祥寺後當之濱ニ罷在候處源五郎殿御代ニ而只今之處え引越申候由申傳候今度御尋ニ付申上候少茂怪敷儀無御坐候若相違儀申上候者後日而會議之上拙僧何様而茂可被仰付候以上

元祿十二年己卯五月

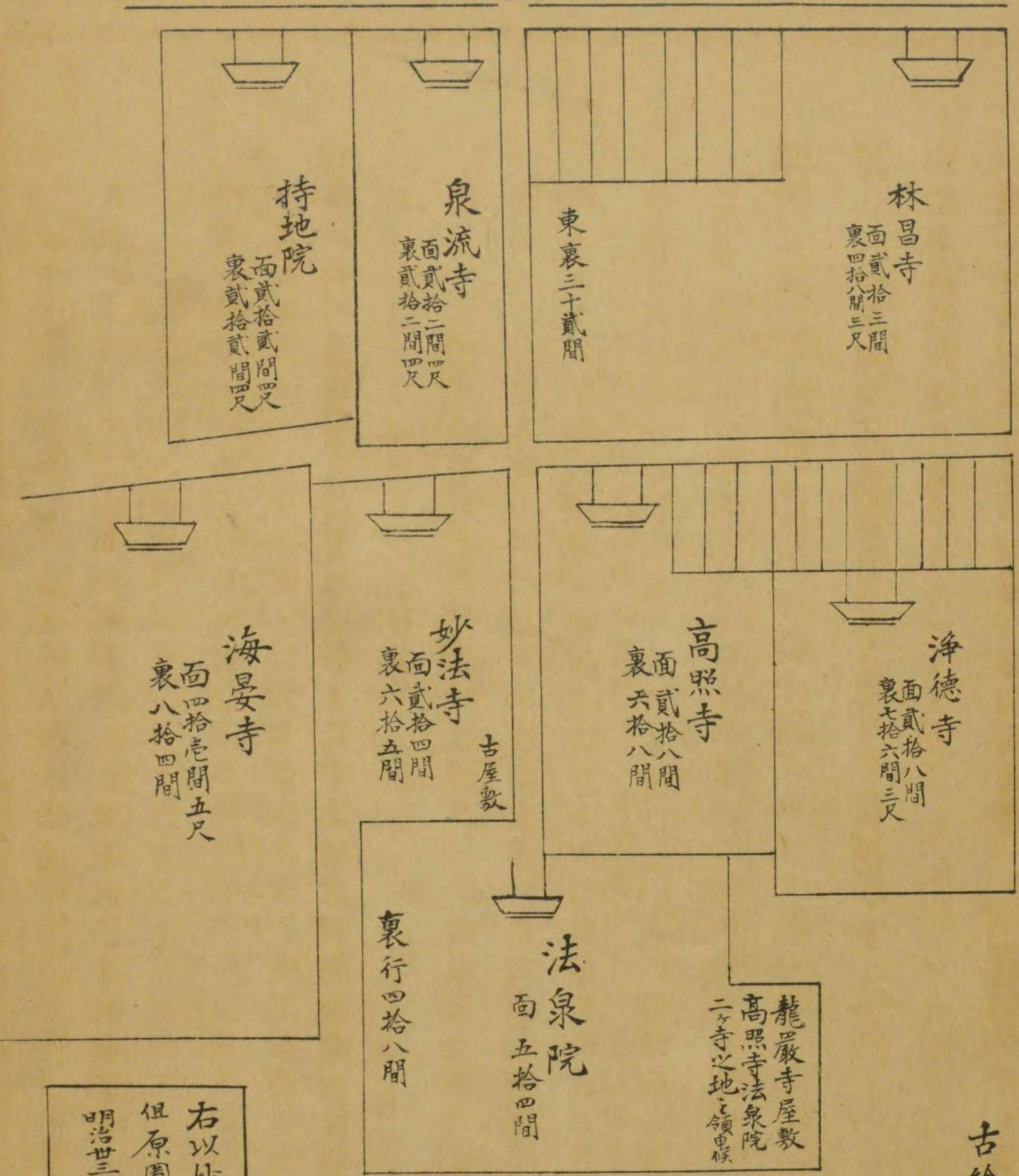
寺社御奉行所

○案スルニ源五郎殿御代云々ノ文字覺束ナシ蓋元和中移轉ヲ計畫シ寛永六年ニ引移レルヲ云ヘルモノナルヘシ

寺町並ノ境内ヨリ現境内ニ移リシハ元祿十一年ニ係ルモ其實同年ヨリ計畫シ翌十二年五月後ニ移リシモノナリ故ニ右ノ間敷改書上ニハ只今ノ處引越候トアリテ尙寺町並境内ノ間敷ヲ記セリ

而シテ其他西北ハ浩漠タル砂原ニシテ朔風吹荒ム毎ニ寺家ノ憂ヲナシカバ日永拮据經營堤塘ヲ築キ樹木ヲ植エ寺僕ヲシテ簣垣ヲ設ケ風砂ヲ防カシム土砂其

學

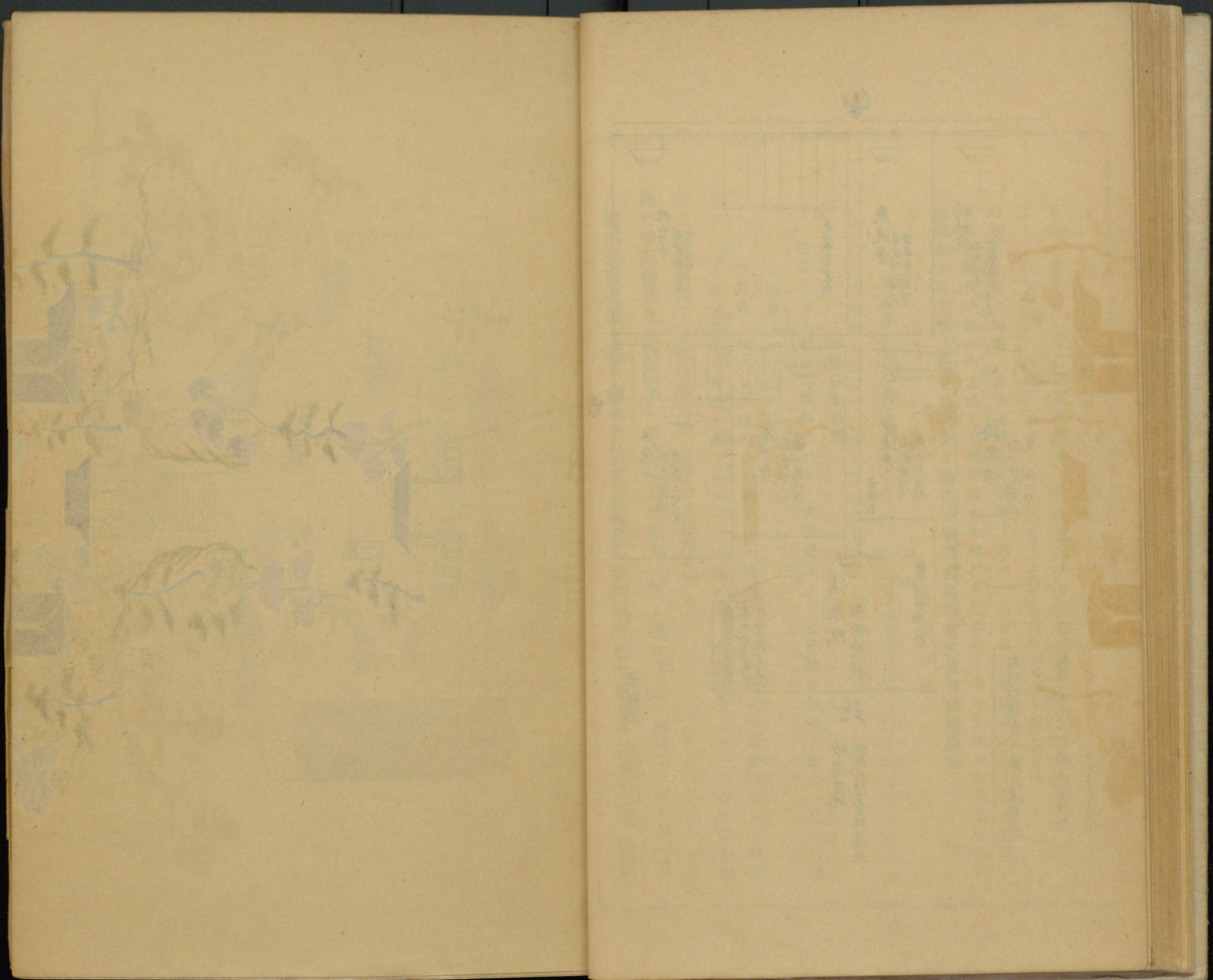


用

古繪圖

北
砂濱空地
此處妙法寺拜借地

右以妙法寺所藏原本寫之
但原圖ノ約七分之一
明治廿三年十二月三日齋藤登致



妙法寺旧伽蓝图
以同寺所藏原本缩定之

番神堂

本堂

十二間半
八十五間
堂宇五間半
如上間
累七間
口又全所

位牌堂

庫裏

鐘樓

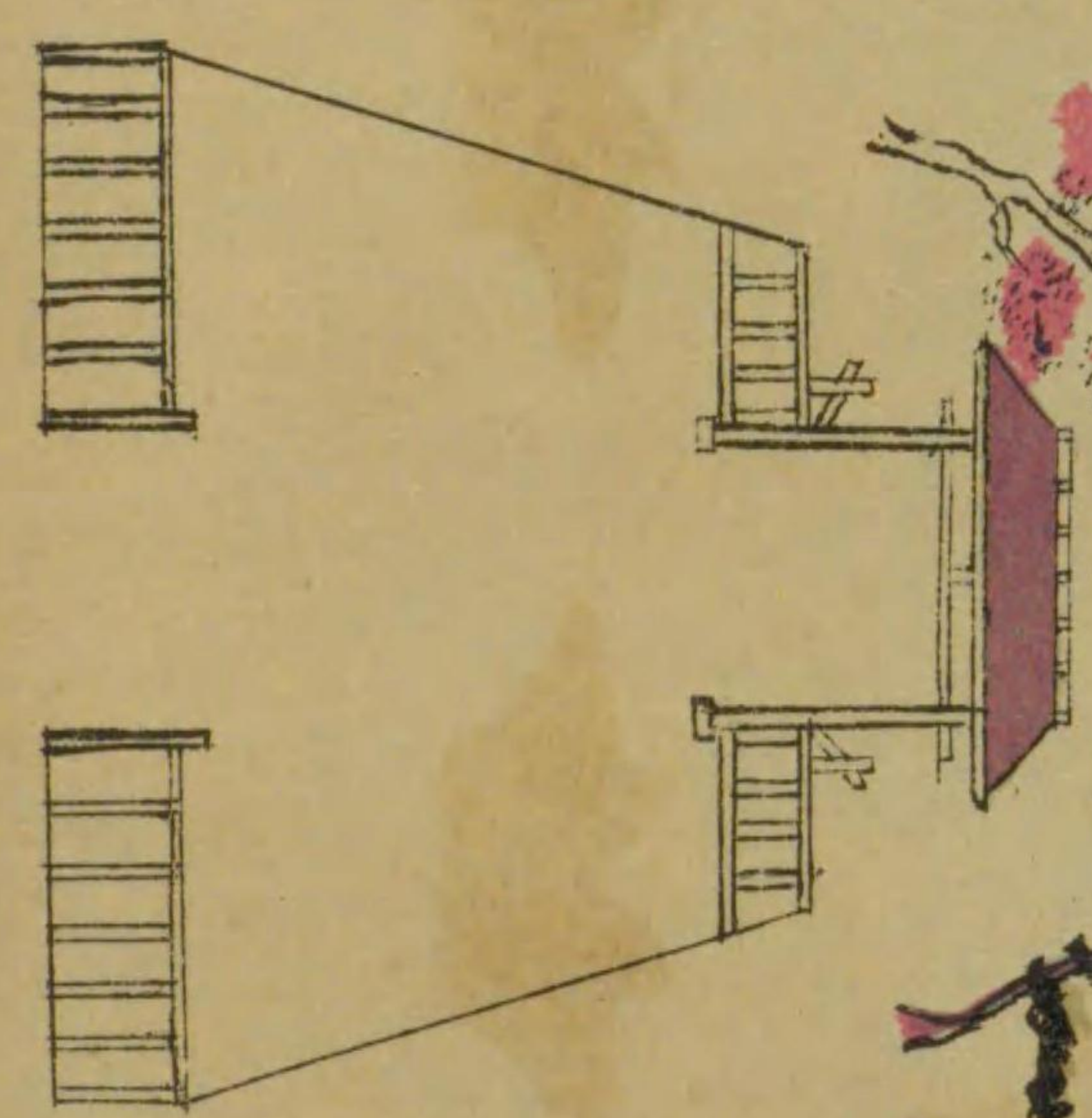
二天門

舍利

三玉門

坊行立

總門



下ニ堆集シ歲月ト共ニ積リテ一大丘卓トナル所謂爺山是ナリ

(庄内昔聞書)畑道ハ東西數百間ハ大町分の濱地ナリしを妙法寺にて借受け六十余才にゐる老僕をして毎日簣垣を立て小山を作らしめたり故ニ世の人此山を名付て祖父山と云へり

日永ノ當山ヲ經營スル唯々風砂火災ノ難ニ備フルノミナラズ堂宇ノ布置ニ意匠ヲ凝ラシ櫻樹數百株ヲ植エ風光ヲ添ヘ酒田ノ一名勝ヲ以テ稱セラレ夙ニ騷客ノ咏吟ニ上レリ享保十八年藩主酒井侯川北巡視ノ途駕ヲ扞ケラレシヨリ後々毎ニ恒例トナレリ是レ其風光ノ美ナルヲ以テナリコヽニ挿入スル見取圖ハ即チ其經紀スル所ノ規模ナリ以テ當時ノ壯觀ヲ想見スベシ日永ノ功績斯克ノ如キヲ以テ後住仰キテ中興開山ト稱ス日永俗姓詳カナラズ本ト丸山本妙寺ノ役僧ナリ元祿ノ初メ入院シ享保二年三月朔日示寂ス本覺院ト法諡セラレ

文政八年隣町火アリ本堂庫裏ヲ延燒ス什物帳裏書ニ其消息ヲ記シテ十五代日苗再勤ノ節新地ヨリ出火之節本堂庫裏共ニ燒失然ル諸器等ハ不出之ト云ヘリ同年六月之ヲ再建セシガ安政三年七月十四日本堂回祿シ爲メニ重代ノ寶物船板題目ヲ失フ爾後庫裏ヲ以テ假リニ本堂ニ充テ明治十九年廿二世日瑤本堂址ニ位牌堂ヲ再建セ

寶物

一宗祖日蓮聖人眞筆十界曼陀羅縱六尺四寸一軸當寺隨一ノ寶物ニシテ日永代擅越玉木
彦兵衛ノ寄附ニ係レリ玉木ハ當港ノ舊家ニシテ此一軸ハ祖先傳來ノモノナル
ヲ彦兵衛ノ妻感スル所アリ夫ニ勸メ寄附セシメシモノナリト云フ

一同眞筆消息紺地金六軸内ハ古來相傳ノモノニシテ二軸
紺表裝ハ十三世日蓮ノ購入スル所ナリ

一同眞筆御經石直徑一寸九分一顆石面ニ法花經ノ文字アリ裏面ニモ文字ノ痕迹ヲ留ム

ルモ不分明ナリ惜哉傳來ノ由緒ヲ詳カニセスト由緒下ニ載スル
什物帳ニ概見ス

一門祖日陣上人眞筆曼陀羅紙本金一軸縱三尺八寸紙表裝橫一尺五寸五分 應永十七年日陣當郡ニ滯在中揮毫セ

ルモノト十二世日等ノ購入ニ係レリ

一釋迦涅槃繪像紙本絹表裝一軸縱八尺四寸延享三年五月擅家粕谷勘左衛門ノ寄附

一船板浪題目臺座火災ニ罹リ全形ヲ留メ一基高サ一尺三寸
ズ元ト四形ノ台座ナリ直徑一尺五寸

緣起曰是當寺什寶中最モ有名なるものにして宗祖日蓮上人回國之節越后國に於て難風に遇ひ波浪の上に揮毫せられしに風雨忽ち休み衆人安堵の思をなす船頭亦太に其徳を感じ宗祖に乞ふて揮毫を求む宗祖即ち船板に書して與ふ爾後數百年轉々して當寺の重寶となる惜哉安政三年七月十四日の火災に罹り遂ニ烏有となる今唯燒殘の臺座一基を留む古雅愛すべし而して北越奇談續考に

も亦其由來を記して

鶴岡と云へる處の川の名も大梵寺と云へるよし之れは湯殿山より流れ出るみあかより出たるありと妙法寺の寶物ある浪の題目も越後の海上に顯れたる法の文字を刻みしものとかや今も酒田に遺り居るとぞ
とあるを見れば其由來の妄誕なるに非ざることを證するに足らん

以上六點ハ明治廿八年七月廿三世日文ガ地方廳ニ差出セシ緣起ニ據ル但十三世日隨力寛保二年七月七日改ノ什物帳ヲ閱スルニ前記什物ノ外尙數十點アリ寺僧ニ就テ之ヲ叨クニ數回ノ火災ト住僧更迭等ニ依リ亡ヘリト眞ニ惜ムヘシ左ニ抄出シテ參照ニ供ス本ト是レ什物、過去帳ニ似タリト雖モ前記寶物ノ傳來不明ニ屬スルモノヲ知り得ルノミナラズ他日遺物ヲ搜索スルニ當リ裨益ナキニシモアラサルヘシ

一大聖人御本尊 日本代納之

一同御消息

大一幅

六幅

一 内 一幅 三者三十三字

先日者九字
天台ノ日極有
錄十九日妙聖人御書切

一幅 大賢ら十一字
右圖を四十字

此二幅 日隨代求之

一同御經石 法花經トアリ 鶯かい丸石也 一ツ 日等代納之

日等曰元祿ノ比玉木繁昌之節鶴岡御家中へ金銀借入タリ時何カシ殿家ニ傳
伊澤川 鶴岡石 秘藏ノ此御經石ナリ逼迫成金廿兩ノ質入其後不受返玉木傳之持玉木彦
兵衛内方……仍而御寺納之真偽ノ事爭有之聖筆徹底砥石ニカケタル口數返
終ニ文字不損驚テ口之此石水ニ入テ志願口頂之口病愈此水ヲ以眼病洗愈リ
數多驗口不空口口無疑者也

- 一 眞向御影 一幅
- 一 紺紙金泥大本尊 玉木彦兵衛内方納之 一幅
- 一 陣尊聖御本尊 理賢授與之 日等代求之一幅
- 一 覺師御本尊 信男蒲田彦四郎授與之 日等代納之一幅
- 一 意師御本尊 妙法寺常住定口或後房 日助授與之天文廿四年 一幅
- 一 扇師御本尊 妙法寺住持淨仙坊日 助授與之永正第二 一幅
- 一 藝師御本尊 越中黒瀨中屋法名好 信授與之天正十八年 一幅
- 一 伴師御本尊 善學院日邊授與 慶長十八 二幅
- 一 教師御本尊 清信女妙融授與 慶長十二年 一幅

- 一 柔師御本尊 妙法寺常住日邊 授與之寛永十九 二幅
- 一 同大上人三尊師勸請 師範日口聖人高位 寛永第八 一幅
- 一 陣師御影 一幅日等代古來有分寫直シ納之 一幅日隨代納之 二幅
- 一 涅槃像 一幅 一幅
- 一 番神繪像 一幅時代不知表具日等代 一幅日隨代表具 二幅

番神堂 緣起ニ「傳話に由れば寛永年代の建築にして同六年三世住職靜諦院日
然の時迄ハ舊本堂の由其後元祿十一年十一世住職本壽院日永の時且越泊谷三左
衛門玉木彦兵衛と計り舊境内より引移して現地に定め山内の鎮守堂とす」ト
アルモ誤レリ什物牒裏書ニ棟札ノ寫アリ左ノ如シ

當番神拜殿我師量壽院日漸願主ニ而明曆三丁酉九月十四日
三間四間建立從其己來卅九年雖然堂内依狹窄

二聖 魁 魁 子神 大肝煎 渡邊山三郎
鬼 南無妙蓮奉經 日蓮大聖人 妙法寺
二天 鬼 十多女 時代本壽院 日永在判

今般惣且中助成別而當番神講衆且粕谷三左衛門玉木彦兵衛
爲大且那造立之酬此功德現世安穩未來成佛自他俱安同歸常
寂病即消滅不老不死

元祿八乙亥八月十五日
中興開基棟札二枚之寫

聖主天中天迦陵頻伽聲
南無上行無辺并 大日天王 建治元年
南無多寶如來 尸葉大梵天太子母神

南無妙法蓮華經 日蓮在判

南無釋迦牟尼佛 釋提桓國 十羅刹女
南無淨行安立菩薩 大月大王 八月十八日
哀愆衆生者我等今敬礼



遷座正徳元辛卯十月十一日
酒田中町
齋藤三右衛門大工作右衛門
同 勘九郎
高橋彦十郎同 松兵衛
(裏)棟梁
荒瀬平澤村
本長山妙法寺十一代
本壽院日永在判

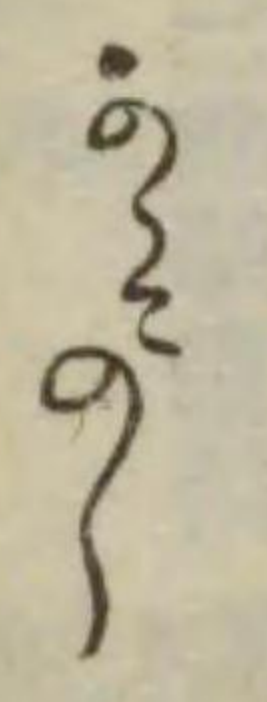
我此土安穩天人常充滿
身上水出 身下水出

聖主天中天迦陵頻伽聲 天照大神

南無妙法蓮華經

王者大乗 住王舍城

哀愆衆生者今我等敬礼
身上出水身下水出
身我得佛來速成就佛身



遷座正徳元辛卯十月十一日
本長山妙法寺十一代
本壽院日永在判

トアリ之ニ據レハ明曆三年九月第九世日漸ノ創立ニ係リ三間四間ノ建物ニシテ
本ト惣門ノ右側ニアリシヲ元祿十二年
伽藍圖參照後チ狹隘ヲ告ケ元祿八年日永更ニ四間七間
ノモノニ改造シ同十二年本堂等現境内ニ移轉後正徳元年ヲ以テコ、ニ移建セル
モノナリ

孟夏遊妙法寺

沙白松青繞畫堂 薰風日暮送清涼 此間別有仙源趣 滿院梵聲洗俗腸

春日遊妙法寺

成蹊堂主人

滿院春風吹老櫻 彩霞一縷弄新晴 古松凝翠幽琴靜 黃鳥涉園嬌舌輕
天女廟前香寂々 白狐祠畔花盈々 晚來更見鈴聲急 幾隊紅裾賽佛行

妙法寺松濤

徐晏 坡清人

妙法莊嚴古寺高 石門松徑少塵囂 鶴聲乍驚風過處 却疑碧海捲銀濤

妙法寺

木 足日光

澄せたる鐘行音や秋のくれ

壽山福海兩袖の如し

春日庵極

處上州

蓬萊によきものニツ妙法寺

龍嚴寺 酒田山法泉院ト稱ス龍嚴寺ハ其寺號ナリ新義眞言宗御室仁和寺末ニシテ釋迦如來ヲ本尊トナス

創始詳カナラズ宥遍ヲ中興開山トナス其入寂ノ年代ヲ知ラス二世道宣ハ明應七年六月十五日入寂ス當時天台ナリシヤ將タ眞言ナリシヤヲ詳カニセズ

(錯薪編)法泉院 開山宥遍大和尚死去年月相分不申第二世道宣律師明應七年戊六月十五日死去三世之前後界名相見候へども天台眞言不相分云々

(當寺世代報)當寺中興一世宥遍上人師傳曰龍嚴寺開基文明中トアリ寺建立ノ後吹浦神宮寺ニ退キ其後神宮寺ニテ入寂ス年號不知二世律師道宣明應七戊午六月十五日寂

明曆圖ニ法泉院面五十四間裏四十八間ト見ユ後チ眞言一派ノ寺院當寺ニ集會シ經論ヲ談議スル所トナル故ニ談義所トモ稱シ終ニ當寺ノ代名詞トナレリ延寶八年ノ勸進狀ニ願主酒田山談議所龍嚴寺當住法印權大僧都遠連「天和三年巡見使調書ニ眞言宗酒田山談議所トアリ由來久シ

元祿十一年十月第 世晃辨京師御室仁和寺ノ宏徳院ヲ相續セラレシヨリ其末

流ニ属シ寶永三年知積院小池坊ヨリ庄内ニ於テ五箇ノ勝地ヲ選ヒ常法談林ヲ定ムルニ及ヒ當寺其隨一二斑セラル

(當寺文書)出羽國莊内領之處ニ雖多一派寺境依無常法談所學徒無由論量教義可謂欠矣因茲釋五箇勝地以定談林訖酒田龍嚴寺是其隨一也自今以後恒建法幢夏冬二季報恩講不可懈怠者也仍如件

寶永三丙戌年二月十二日

小池坊僧正亮貞印

知積院僧正覺眼華押

古來雨乞ノ祈禱毎ニ感應アリシヲ以テ龍ノ字ニ散水ヲ加ヘ瀧嚴寺ニ作レリト其年代詳カナラサルモ延寶八年ノ勸進狀ニ龍ノ字ヲ用ヒ元祿十一年春晃辯ガ血脉受領ノ勸化帳ニ瀧嚴寺トアレハ蓋其間ニ於ケル事歷ナルヘシ寛延二年四月散水ヲ除キ舊ニ仍リ龍嚴寺ニ作レリ

(寺社奉行所留書)龍嚴寺ノ龍字瀧ノ字ニ候處散水取申度相願寛延二年巳四月於會所申上候處散水取候斗之事ニ候間書付差出ニ不及役所切ニ可申付由加藤清右衛門殿被仰聞候通申付候事

寶曆元年三月廿九日酒田大火ノ際燒失シ爾後ノ消息詳カナラズ天明四年本間四

郎三郎大施主トナリ造立アリ棟札寛政十年 月 日本堂庫裏焼失シ其建立セララル

ヤ藩主例ニ依リ米五十表檜材百本ヲ寄附ス是レ龜ヶ崎ノ祈禱所タリシヲ以ナリ

(野附氏御用留)酒田談議所寶永元申年正月十八日迄ハ古來ル龜ヶ崎御城へ上リ申

大般若ノ執行一ヶ年ニ一度宛正月斗被行之處寶永二年ヨリ正五九三度宛於御城勤

被申筈ニ被仰付候御町役人ハ此年ヨリ御城へ上リ不申候

(錯薪編)上略いつの比よりか龜ヶ崎御城大般若執行被仰付寶永元申正月十八日迄一

度宛被行候處同二酉年より正五九三ヶ月被仰付同六丑年より定日廿五日と被仰付

○但供物料トシテ年々三十表宛ノ下附アリシヲ寶曆八年後二十四表ニ減セララル

故ニ酒田寺院ノ筆頭トシテ年始登城ノ時ハ二ノ丸門マテ乗物ヲ聽サレ黑書院ニ

於テ所謂御盃頂戴御返杯ノ格式ニ預レリ

高照廢寺 吉祥山ト號ス創始詳カナラズ明曆圖ニ高照寺二十八間六十八間トア

リ天和三年巡見使調書ニ所見ナシ當時既ニ龍嚴寺ノ塔頭ニ屬ス

(錯薪編)高照寺 出羽國風土略記ニハ天台宗ニ而寛文中迄有之とかや龍嚴寺

末と有之天和三年公儀え書上ニハ無之何れの年にか明曆年中ヨリ天和二年迄之間

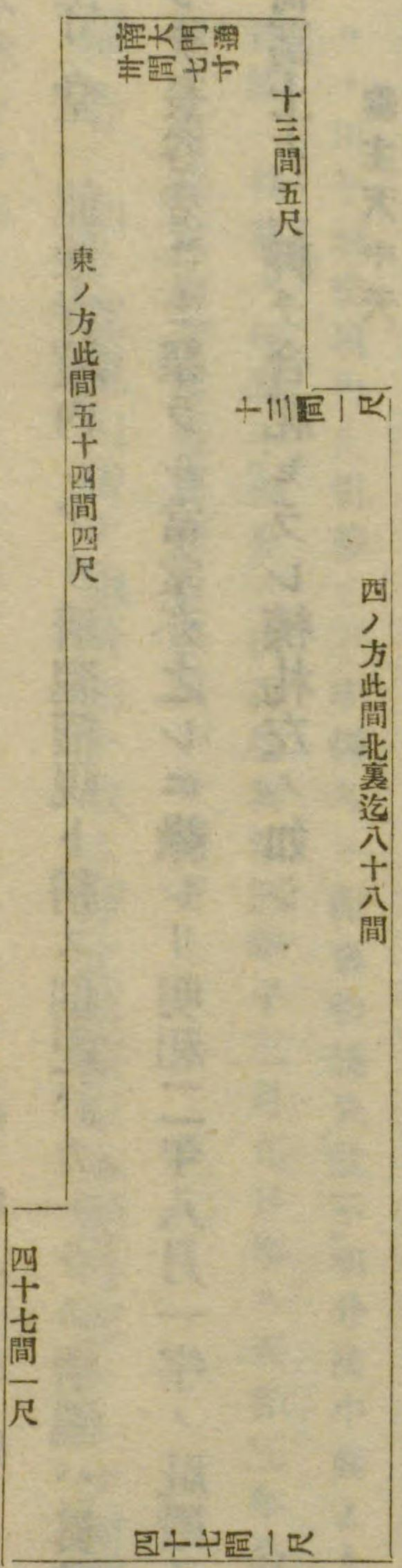
龍嚴寺の塔頭ニ相成當時無住候へとも山號ハ吉祥山といふ

元祿十一年ノ比ハ其境内ヲモ本寺ヨリ併有セララル、ニ至レリ妙法寺藏同年諸寺

院境内圖ニ「龍嚴寺屋敷高照寺法泉院ニケ寺之地を領申候」ト即此

參照 (龍嚴寺文書)

覺



右者談議所寺屋敷ニ御坐候龜ヶ崎御城付御代々御祈願地ニ御坐候間尺之儀右之通
少も紛敷儀無御坐候若相違成義申上候ハ、後日御食議之上拙僧何様にも可被仰付
候以上

元祿十二年卯五月

眞言宗 談議所
同宗加判 海向寺

寺社御奉行所

(張紙)
此節龍嚴寺上京看主心得違繪圖面差出候ニ付北ノ方十四間余妙法寺拜借へ境内入込候趣寛延三年龍嚴寺申出候間遂吟味候處元高照寺境内東ノ方南北六十八間龍嚴寺境内東ノ方南北四十八間都合百十六間ニ無相違候然共東之方龍嚴寺境内南高照寺境内へ入込當時有間百壹間五尺此處古繪圖ヲ以吟味候處全龍嚴寺心得違ニ而申出候趣申之ニ付新規繪圖面申付爲差出置候北ノ方四十八間と有之候へとも古繪圖之通今以五十四間有之上ハ古來之通仕度趣申出吟味之上申付候右之趣役所聞濟達御家老中御承知之上張紙致置候尤屋敷改渡邊宇太夫小黒仁右衛門方へも申達此張紙之通被差遣置候

白井久兵衛
町野宇兵衛

鎮守堂 龍嚴寺境内ニアリ清瀧權現ト稱ス創祀詳カナラス清瀧ハ眞言護法神ト

シテ長谷寺ニモ祭ラル當堂亦之レニ縁レリ明和二年八月一字ノ社殿ヲ造立シ稻

荷富士ノ二神ヲ合祀セラレ棟札左ノ如シ

聖主天中天

迦陵頻伽聲 稻荷大明神 大檀那大梵天王 明和二乙酉天八月大吉祥日

○奉造立當山鎮守清瀧大權現會社一字今般新三社此地選座 寺内安全當所諸檀

繁榮悉地圓滿所 哀憐衆生者 富士大權現 大願主帝釋天王 酒田龍嚴寺住法印則瑞謹言

我等今敬禮

淨德寺 池寶山ト號ス淨土宗京師知恩院末ニシテ阿彌陀如來ヲ本尊トナス寺傳

ニ天文十一年寅八月法譽ナルモノ知恩院ヨリ來リ田川郡○向酒田ナルヘシニ之ヲ創始シ

年代不詳中興然譽當處ニ移建スト云フモ事歴ノ徵スヘキナシ明曆圖ニ七十六間

三十八間トアリ爾後ノ消息詳カナラズ

(錯薪編)開山法譽年曆不相分此間數代在之候へ共不詳中興然譽之時田川郡の地方ヨリ川を越當境内へ引移とぞ申傳斗ニ而書物焼失故不相分候中興より二代目向譽他國へ轉移ス年曆不相分三代西譽萬治三年子三月九日卒ス天和三年公義書上には淨土宗池寶山淨德寺塔頭口正院一ヶ寺有

淨福寺 初メ篠菰山後チ龜崎山ト改ム淨土眞宗東本願寺末ニシテ阿彌陀如來ヲ

本尊トナス

文明中釋明順ノ創始スル所ナリ明順俗姓菊池氏名ハ武邦世々肥後國菊池郡深河

城王タリ本願寺第八世蓮如ニ歸依シ師弟ノ禮ヲ執リ明順ト稱ス 秋田淨願寺開基弘賢ハ其兄ナリト云

大谷一乱ノ際師ニ從ヒ越前吉崎ニ赴キ北陸ノ教化ニ與リテ功アリ文明五年秋明

順ヲシテ遠ク宗風ヲ興羽松前ニ布カシム同七年地ヲ大泉庄袖浦附近 所謂向酒篠田地方

原野ニ相シ一字ノ道場ヲ剏建シ篠山清淨福德寺ト名ケ略シテ淨福寺ト稱ス實ニ是レ當時ノ濫觴ナリ後チ上京シ師ニ謁シ之ヲ復命ス師大ニ悦ヒ末世化益ノ資トシテ寶物ヲ授ク以上天正十九年釋永照ガ淨福寺由緒記ニ據ル

參照 (當寺寶物彌陀如來影像裏書)

方便法身等形文明六甲午年七月廿四日釋蓮如願主明順

文龜元年實弟弘賢ト共ニ上京ス會々蓮如遷化セラレ第九世實如立ツ乃チ之ニ謁シ弘法ノ狀ヲ具ス實如深ク其功勞ヲ嘉ミシ乃父ノ遺墨正八幡ノ消息ヲ賜ヒ且ツ東奧傳道ノ偉績ヲ永世ニ表セントシテ特ニ寺名ニ夷ノ字ヲ冠セシム當寺ヲ夷淨福寺ト稱スル之ニ起因スルモノナリ天文三年八月十五日寂ス享年九十余同上妙順尼ハ明順ノ女ナリ天文中篠原野ヨリ當酒田ニ移轉ス同上其地何レノ處ナリシヤ詳カナラスト雖モ庄内昔聞書ニ據ルニ本町三丁目小路今ノ下ノ山ナリヲ淨福寺小路ト云ヘレバ妙順ノ移サレシ寺地ハ蓋其附近ナルヘシ錯薪編ニハ本町一ノ丁二ノ丁ノ間林昌寺小路ノ東側ナリト云ヘリ

是時ニ當リ室町幕府ノ號令行ハレズ群雄割據シ諸國大ニ乱ル我カ庄内モ亦之レヲ承ケ寺院多ク破却セラル而モ當時ハ本願寺一派ノ舊蹟タルヲ以テ天文十二年四月六日領主ヨリ末代異亂ナク相續スヘキノ證狀ヲ下附セラレタリ妙順示寂ノ年月詳カナラズ

(當寺文書) 今度酒田津本願寺門徒之道場庄中門弟准據令破壞之處彼等之事者元來上方此間文字剝落不分明致造立干今以加力連續之段言上之上者彼ノ一字末代無相違可立置茲但當庄之住人不論貴賤親疎無許容者所口可逮違變仍後日之証狀如件

天文十二〇年卯月三日

明順公

禪棟
氏 賴

○案スルニ天文十二年ハ武藤義氏ノ時代ニ係レリ禪棟氏賴何人ナルヲ知ラス義氏ノ家老ニ杖林アリ杖林ノ文書ハ狩川村ニ傳ハリ杖林禪印ト押署セリ(第一卷總說ノ下ニ出ス)疑ラクハ同人ナラン而シテ氏ノ字ハ武藤家ノ通字ナレバ同家ノ一門ニシテ老臣タリシモノナルベシ但明順ト宛テタルハ其名聲ノ高キト通音ナルトニ依レルナラント現住菊池秀言云ヘリ

第二世永照ノ時會々石山ノ合戰起レリ之ニ係ル教如ノ消息アリヤツ矢文ノ御書ト稱

シ今尙寺家ニ相傳セリ慶長十三年四月十日寂ス

急度染筆候今度當寺院可相果候處以覺悟無異儀相踏候然處雜賀より御書並以使節當寺之義不可有馳走候旨國々在々所々へ被仰越候由候此條御供輩今度之無事令張行剩信長へ以一味同心之内存可様ニ申成當家破滅の造意共あさましく歎入候就其是非共當寺相拘慈尊三會之曉までも聖人の一流退轉なきやうにとの憶念又者蓮如上人己來數代の本寺を此度法敵に可相渡事無念之條如此候然者佛法再興たるへき時者雜賀にも連々可有御納得候歟此刻諸國門徒之輩豫一味同心に當寺相つゝ候様に馳走候ハバ聖人へ報謝併可爲満足候兼又今度直參ニ可被召之旨被仰出或者望申輩有之由候不可然候又門徒者他の坊主に可被仰付候由候縱思食害又者依望雖被仰付候重而自是可申付候條可得其意事肝要候就中彌信心決定歟佛恩報謝の稱名念佛油斷あるへからず候なを佛法の一儀可有崇敬事肝要候萬端頼入斗候猶按察法橋可申候穴賢々々

六月廿日

教如忠

淨福寺
同門徒中

(當寺寶物親鸞上人影像裏書)

本願寺親鸞上人御影

大谷本願寺釋教如印

出羽國庄内田川郡酒田夷淨福寺常住物也

文祿五丙申年四月廿三日

願主 釋永照

(同上蓮如上人影像裏書)

蓮如上人眞影

本願寺釋教如花押

田川郡大泉庄酒田夷淨福寺常住物也

慶長十二丁未稔七月廿一日

願主 釋永照

○文祿慶長ノ比既ニ飽海郡ニアリ然ルヲ之レニ田川郡ト記スルハ舊地ノ郡名ヲ襲用セルモノニシテ斯クノ如キ文例往々アリ

第三世永賢元和三年寂シ第四世永存寛永五年十一月十五日寂ス本町ヨリ現今ノ境内ニ移轉セシハ永存ノ時代ニ係レルモノ、如シ明曆圖ニ所謂面五十六間裏八十五間ハ即チ其方域ニ属セリ

參照

(錯薪編)淨福寺開基明順俗姓菊池氏といふ西國之産にして由緒有之といへ

とも畧之文明五年奥羽ニ下向同七年袖之浦篠原ニ一字建立して篠葩山福徳寺と號二代妙順天文元年境内ヲ廣而同十二年六月本山○本山ニアラス願主ナリ文中「上方云々」ノ字面証スヘシ許狀有其後代

々相續して天正年中石山合戰之節も右境内に在て○當寺ノ境内ハ袖浦地方ニアラスシテ今上ノ方ヘノ酒田ナリシコト妙順ノ下ニ詳カナリ登ルと有之候へバ天正十年比迄も右境内ニ住て其後最上家領之時本町一ノ丁之間當時林昌寺小路と唱候東側え引越スと見えたり元和八戌年御入國之後寺町之當境内え引移と云何れ之年淨福寺と改院家地ニ被申付天和三亥年正月公義え書上ニハ一向宗篠葩山淨福寺と在之何レノ年カ山號龜崎山と改塔頭雲龍寺德念寺普明寺蓮容寺長專寺觀法寺善稱寺七ヶ寺有

第五世了吞ノ時塔頭雲龍寺德念寺ヲ剏始シ普明蓮容觀法寺ノ三寺相踵テ成ル是ヨリ先キ本堂ハ茅葺ニシテ靈寶法器等未タ備ハラサリシガ了吞拈据經營佛閣經藏鐘樓及什器等ヲ備へ規模稍々觀ルヘキニ至レリ明曆三年九月二日寂ス

第六世休故、俗姓大町氏、名ハ康勝加賀ノ人ナリ弱冠笈ヲ京都ニ負ヒ松永昌三ニ學ヒ後々桑門ニ入り了吞ノ知ル所トナリ當寺第六世ノ法燈ヲ繼續セリ慶安二年塔頭善稱寺成ル寛文五年春堂宇ノ修造ヲ企テ翌六年土功ニ從事シ殿堂庫裏門廡頗ル壯觀ヲ極ム事勸進狀ニ詳カナリ寺家ニ傳フル延享四年境内圖ハ即々休故ノ經營スル所ノモノニ係レリ天和二年塔頭長專寺成ル寶永七年四月十三日寂ス

第七世休意ノ時天和二年鯨鐘ヲ鑄ル貞享二年七月八日寂ス

第十二世了澄ニ至リ滋野井大納言公澄卿ノ猶子トナリ公圓ト改稱ス寶曆元年三月廿九日酒田町大火ノ際堂宇悉ク焼失ス寶曆以下久留氏書留ニ據ル同七年ヨリ造立ヲ計畫シ同

十三年ニシテ竣功ス安永八年七月廿六日寂ス

第十四世公巖ハ第十三世了現ノ子ナリ天明六年三月本間四郎三郎佛供田ヲ寄セ寛政三年九月鐘樓ヲ建ツ同十年二月廿八日秋田町火ヲ失シ延焼六百六十余戸當寺亦烏有ニ屬ス十年以下野附氏御用留ニ據ル爾後造立ヲ計畫セシカ事ニ依リ未タ工事ニ着手ス

ルニ及ハズ文政四年八月十一日加賀遊化中いふり橋ニ於テ入寂ス享年六十四人トナリ學ヲ好ク内外ノ典籍ニ通シ内典ハ兼テ華嚴天台ノ蘊奧ヲ極メ且ツ叡山普門律師ニ就テ梵曆ヲ修メ外典ハ皆川淇園ニ私淑シ經史百家ヲ涉獵シ皆造詣スルル所アリ書法ハ初メカヲ王氏ニ用キ後々大師流ノ神髓ヲ會得シ筆力勁秀飛龍天馬ノ勢アリ

博聞該識斯クノ如キヲ以テ其宗門ニ於ケル見識モ大ニ等儕ト趣ヲ異ニスル所アリ毎ニ本願寺學師力様ニ依リ胡蘆ヲ畫キ却ツテ宗祖ノ精神ヲ失ハシコトヲ憂ヒ多年研鑽ノ餘別ニ一機軸ヲ出シ之ヲ以テ羽越ノ間ヲ教化セラレシガ道俗ノ歸依スルモノ頗ル多カリキ是ニ於テ享和二年夏上京シ學療ニ於テ「宗意安心」ノ論ヲ出願セシニ本山ハ認メテ宗規違反トシテ住職ヲ召上ケラル之ニ係ル消息ハ公義被仰出書ニ見ユ左ノ如シ

口上之覺

其御領内當山末羽州酒田淨福寺住持公巖儀當夏中本山學寮ニ就席之上宗意安心之義ニ付及法話度旨同人願出候ニ付則願之通被致許容其筋え被申付追々被相尋候處宗意安心筋之事故容易之儀にも無之候得者本山ニ差留被置寛々可被及示教候就夫右公巖隨心之者共御領内にも有之候由若此之者共公巖儀ニ付其御役筋へ御苦勞之儀可申上候哉難計ニ付自然如何体之義申出候共御貪着無御坐候様致度存候仍此段兼而申入置候様京都表被申越候以上

(享和二戌年)

七月

本願寺御門跡使淺草

原山專右衛門

口上之覺

其御領内酒田淨福寺公巖儀ニ付先般御達被申入候通本山ニ於テ宗意安心之議追々被聞糺候ニ付而者羽州並越後表ニ而同人ニ隨逐之者共も有之別呼登是又糺被申付候然ル處公巖儀是迄祖判ニ無之自己之妄儀を以荒涼ニ申勸尤宗教ニ差障候事故段々被相糺候處公巖始一類之者共悔先非誤入已來宗意ニ不相背様急度可相守旨回心之証狀差出候間尙又厚加教誡候上夫々落着被申渡候併公巖儀ハ右等之譯故何分於寺法其儘難差置儀ニ付此度住職取上諸事相慎候様被申付候就夫右体心得違候者全宗意ニ疎故之義ニ候へハ此段不便ニ被存慈悲を以爲致在京宗意之趣可被申聞候尤モ舊執ハ難去ものニ候へバ寛々致示教篤と宗義相心得候上ニ而歸國可被申付候右ニ付公巖實子刑部卿を始其餘相殘候隨從之者共法上義安心筋調理之上同寺住職之義ハ追而可被申付候依而先無住中宗判法用等ハ當分刑部卿へ被申付候間此段承知可被下候勿論右聞糺候義ハ全寺實法年限之事ニ候得共祖師之所判ニ無之妄義故追々致增長候様ニ罷成候而ハ第一對公儀候而茂難相濟儀且者宗法之亂れ終ニハ御領法御面倒筋ニも可相成哉旁以不得止前段之通慈悲を以精減取計被申付候事ニ御坐候へハ先達も被申入候通此儀ニ付如何体之儀申出候者有之候とも御貪着無御坐候様被致度奉存候此旨御合置被下候様可及御懸合段京都被申付越候以上

(享和三年) 正月

本願寺御門跡使

原山專右衛門

右ニ付寺社奉行評義之趣書付差出候付閏正月廿九日江戸へ申遣委細之義江戸案文ニ有當三月十五日之江戸案文又四月之案文ニ有

然此通牒ニ依リ其裏面ヲ觀察スルニ是迄祖判ニ無之自己之妄儀ヲ以テ荒涼ニ申勸」ノ文字ハ適サニ當時ノ學師力論理何如ヲ推究セス一ニ宗規ヲ以テ律シタルヲ露出スルモノニシテ公巖ノ公巖タル所以實ニコ、ニ存スルナリ

寛政十年堂宇回祿以來造立セシモ會々宗門一件及ヒ本間四郎三郎死去等ノ事アリ未タ着手スル能ハサリシガ第十五世公海ニ至リ土功ニ從事シ天保ノ初メ之ヲ竣功ス弘化二年寂ス享年六十一公海天保十一年藩主長岡轉封ノ命ヲ受クルノ際爲メニ奉效セラレシコト本間家ノ文書ニ見エタリ

世傳シテ現住秀言ニ至リ明治廿七年十月震災ノ爲メ本堂顛倒セリ爾後銳意造立ヲ計畫シ同卅五年之ヲ落成ス即チ現今ノ建物ナリ

泉流寺 東永山ト號ス曹洞宗海晏寺末ニシテ釋迦如來ヲ本尊トナス文治五年平

泉没落ノ際遺臣等德前ト稱スル女性ヲ擁シ秋田ニ遁レ立谷澤ニ潛ミ後チ袖浦附近ニ庵室ヲ結ヒ之ヲ泉流庵ト稱シ身ヲ佛門ニ委ネ勤行怠ラズ建保五年四月十五日示寂シ洞永院水庵泉流禪尼ト法諡セラレシ事前卷酒田町三十六人ノ下ニ詳力ナリ爾後比丘尼ニテ相續セシガ文龜中正全ナルモノ奥州永徳寺ヨリ海晏寺ニ住シ同寺第三世トナリ退隱ノ後チ當庵ニ移住シ規模ヲ改メ曹洞宗ノ佛刹トナシ洞永山泉流寺ト改稱ス大永元年三月二十日寂ス實ニ是レ當寺ノ開山ナリ

詳カ
ナリ

事前卷三十
六人ノ下ニ

二世寶屋ニ至リ大永中平田郷大町村地方ニ移建ス寶屋ハ天文五年申三月九日ヲ以テ寂ス承應元年更ニ之ヲ寺町通妙法寺前ニ移轉ス明曆圖ニ面二十三間四尺裏二十二間四尺ト即チ是ナリ

(錯薪編) 泉流寺開基ハ洞永院水庵泉流德公尼往古庵室有之建保五年丑四月十五日遷化ス其後何宗ト申義も數年不相分處正全ト申僧の代より曹洞宗ニ定ル依而當寺之開山ト稱すといふ右正全大永元年三月廿日遷化庄内物語ニハ宮之浦地續向酒田

と唱候處ニ境内有之趣ニ而右之近邊ニ泉流寺林といふ處有之趣相記ス其後平田郷
大町組大町村ニ境内有之當時新百姓唱候由故ニ古キ家ハ大方泉流寺且家と相聞候
承應元辰年寺町分ニ罷在候一條院と云修驗之屋敷泉流寺ヨリ寺地ニ願出候ニ付右
一條院十王堂町ニ替地被下と有其時大町村ヨリ妙法寺前坂之下え引移候哉外ニ引
移候年號書物無之相分不申候天和三年亥正月 公義書上ニハ曹洞宗泉流寺と有之
廿一世之時延享二年ニ奉願二十三世の代ニ至リ寶曆十年當境内え引移

參照 (元祿 年御免地改帳)

一半軒屋敷 無役

十王堂町普明院

是者先年最上出羽守様御代拙僧先祖大千坊と申候而寺町分ニ屋敷一軒御免地ニ
而罷在候大千坊相果候而其子一乘院と申ヨリ四十五年以前 ○元祿九年ヨリ逆算スレバ承應元年ニ當レリ 泉
流寺ヨリ右之屋敷寺院ニ被申立候ニ付御町奉行乙坂六左衛門殿御了簡を以替地
被仰付則十王堂町末ニ屋敷一軒被下候

享保元年火難ヲ避ケ大町組濱畑分即チ現今ノ境内ニ移轉セシガ 東永山 縁起 寶曆元年

三月廿九日酒田大火ノ際燒失セリ 久留氏 書留 再建ノ年月詳カナラズ明和五年洞永ヲ

東永ト改ム

(東永山縁起) 洞永山の洞を東の字に改めしは明和五年也故ハ加賀の國より易に達
せし僧の泊りて當寺山號洞の字なれば寺號の泉流も水の縁陰十分せり依て洞を改
めて東となすへし若し改めすは火災近きにあるへしと云はれたるが元より洞の字
なれば其儘差置れしに間もなく火災にかゝりし故東永山と書改めしとぞ惠黙和尚
の語りき

天明五年十月又燒失シ 下ニ引ケル寛政元年ノ願書ニ據ル 寛政元年三月先ツ庫裏ヲ建ツ 同本堂造立

ノ年月詳カナラズ寛政十年二月廿八日酒田大火ニ類燒セリ 野附氏 御用留 今ノ本堂ハ天

保三年提全代建立スル所ナリ 東永山 縁起

尼 公 堂 一ニ開山堂ト稱ス創始詳カナラズ本ト本堂ニ接續セシ建物ナリ寶曆

元年ノ類燒ニ尼公ノ影像亦烏有ニ屬セシヲ以テ明和元年本間久四郎 後チ四郎三郎ト改ム

施主トナリ更ニ影像ヲ之ニ安置ス 此時本堂等既ニ造立セラレタルナルヘシ

(酒田町年寄御用留)

口 演

尼公様御尊像先達海路御無難被爲御着宿候段恐悅御同意奉存候隨而幸明日御忌日
ニ付御尊像泉流寺へ被爲遊御入院候様ニ仕度奉存候彌々可然思召ニ候ハバ明十五
日巳之刻皆様御始メ長人衆私宅へ御越御拜禮之後御供被成候而御尤ニ奉存候且又

右之儀ニ付泉流寺へ御案内等内談可仕候間夕飯後長人衆之内御一兩方御出奉待入候此旨惣仲間中え宜様ニ早々御文達可被下奉願候以上

(明和元年)

七月十四日

本間久四郎

上林勇右衛門様	鏡谷惣右衛門様
加賀屋永藏様	西野長兵衛様
永田茂右衛門様	粕谷源次郎様
成田此右衛門様	松田又右衛門様

天明五年十月本堂庫裏ト共ニ燒失ス但影像ハ火災ヲ免レタルナラン寛政元年先ツ庫裏ヲ作り本堂

ノ建築ヲ計畫セラレシガ同二年本間家施主トナリ本堂ニ先チ尼公堂ヲ建築ス盖是レ現今ノ位置ニ造立セシモノナリ

(同上)

乍恐以書付奉願上候

拙寺開山堂古來ハ梁間九尺行間貳間ニ而本堂ニ付造立仕置候處三十九年以前未ノ年○寶曆元年ニ當レリ酒田御町方出火之節右堂本堂庫裏衆寮共類燒仕候其後本堂庫裏衆寮者奉願造立仕候處是又五年以前巳ノ十月○天明五年不殘燒失仕候依之當三月○寛政元年中奉願先庫裏斗造立取懸申候追而本堂之儀奉願造立仕度奉存候今度施主有之候ニ付右開山

堂元間數別紙繪圖之通梁間九尺行間貳間ニ而來戊年○寛政二年春中迄何様ニ茂造立仕度施主之任意外佛像等も安置仕度奉存候末々修覆之義寺且中え茂苦勞相懸ケ申間敷儀一札取置申候間右奉願候通被仰付被下置候ハハ難有仕合可奉存候以上

月 日

酒田 泉流寺

寺社御奉行所

○右ハ年月ヲ欠キタレトモ文中ノ干支ヲ以テ之ヲ推スニ寛政元年ノモノニ係レリ

尼公ノ忌日四月十五日ニハ三十六人及ヒ縁故ヲ有スルモノコ、ニ參集シ寺僧ヲ請シ追善供養ヲ修メ率都婆ヲ建換フルヲ古來ヨリノ例トナセリ

(三十六人御用留)文化十三年子四月十五日

泉流寺泉流院尼公六百回忌御法會ニ付持參之品左之通

燈明代百疋 松式立花代百匹ニテ相頼ム 此二口仲間用金ヨリ出ス

塔婆壹本 六七角 代壹メ貳百十五文 大工作料とも

スクハトウ淺黄縮緬貳尺五寸代三百六十八文 但此二口も用金ヨリ出ス

奉	供燈料	百疋
	立花	兩瓶
	御齋料	銀一枚
以上		
		三十六人

一御齋料金三步

當時五百文
兩替六八八文

此分ハ仲間年寄中ヨリ貳百文ヲ取立候尤
モ時々盛衰ニ而出し兼候仁右取立錢ヨリ
補ヒ申候尤モ取立左之通

(中略)

外ニ立花兩瓶 御供燈料 金百疋
御堂帳一下リ 御布施 金百疋

本間外衛殿

本間正七郎

渡邊久右衛門

山田太右衛門

上林治郎治

本間正七郎

白崎五右衛門
根上善兵衛

幕 壹 通

淺黃縮緬襟卷

安祥寺 寶池山ト號ス淨土宗京都東本願寺末ニシテ阿彌陀如來ヲ本尊トナス

創始詳カナラズ本ト天臺宗ニシテ本郡荒瀨郷政所村ニアリシヲ文永二年住僧某

本願寺第二世如信ニ歸依シ弟子トナリ如實ト名ケ是レヨリ其末寺ニ属セリ

(當寺寶物八祖御影記文)文永二暮初冬

花押 ○如信ノ押署ナリ

後チ同郡平田郷小牧村ニ移轉シ更ニ田川郡袖ノ浦附近ニ建立シ天正九年ニ至リ
中免照立ナルモノ當地ニ移建スト云フモ之ヲ徵スヘキ記録ナシ明曆圖ニ境内六
十七間裏八十五間ト見ユ爾後ノ經歷詳カナラズ明治廿七年十月震災ニテ本堂顛
倒シ目下建築ヲ計畫シツ、アリ

大信寺 清涼山ト號ス淨土眞宗京都西本願寺末ニシテ阿彌陀如來ヲ本尊トナ

ス年代不詳淨泉坊了立ナルモノ、創始スル所ナリト了立俗姓新田氏名ハ宗忠越
後國蒲原郡新田村ノ人ニシテ新田義宗ノ五代孫ト云フ薙髮シテ淨泉坊了立ト稱
シ新潟ニ勝樂寺ヲ建立シ後チ當國ニ來リ袖ノ浦附近ニ道場ヲ創始シコレニ住ス
即チ當寺ノ濫觴ナリ入寂ノ年代詳カナラス二世了夢勝樂寺ヨリ五尊ヲ請受シ西
隆山淨圓寺ト稱ス

其後チ當所ニ移轉ス明曆圖ニ表廿間二尺裏十八間トアル即チ是レナリ天和二
年巡見使調書ニハ一向宗林昌山淨圓寺ト見ユ山號變更ノ年代亦詳カナラズ元

八年第四世曉周二至リ西本願寺派ニ属シ清凉山大信寺ト改ム明和八年火難ヲ避ケ寺地ノ後方ニ移建斯塔頭圓正寺ハ第三世了周ノ創立ニ係レリ
(當寺文書)出羽州大泉庄内他川郡龜ヶ崎西酒田湊清凉山道場

開基淨泉坊了玄上人家譜附法統系圖

新田小宗

左少將前武藏守 義宗 遷居越後蒲原郡新田村 義安 安定 宗定 宗忠 新田權之助 出家住新潟勝樂寺後遊出羽

凉清山法系

淨泉房了玄 肇興 道場 了夢 隨勝樂寺請受 五尊稱淨四寺 肇小院 田正寺 了周 歸依本席 稱大僧寺 慧周 一新堂字 大振門風 智周 欲復興三月寺 慶周 鷲尾頭中將隆熙 卿猶子改名道粹

寛保改元辛酉年秋八月十五日清凉隴傳法七世正統釋道粹純叟廿九才謹書印
(錯薪編)淨圓寺開基淨泉坊了玄ハ越後國蒲原郡ニ一字建立シ勝樂寺ト云よし年號不相分夫より右僧當國に來り宮ノ浦地續向酒田ト唱候處え寺建立シ西隆山淨圓寺ト號シ其後右寺ニ而了玄遷化年號不相分夫ヨリ後當處え引移天和三年公義へ書上ニハ一向宗林照山淨圓寺ト有之元祿八亥年西六條龍谷山末派ト成清凉山大信寺ト號す其時之住僧曉周ト云寶永四年亥五月三日遷化す其後明

和八年奉願當境内へ引移塔頭圓正寺壹ヶ寺有

爾後ノ事歴文書ノ徵スヘキナシ明治廿七年十月震災ニテ本堂庫裏顛倒セリ

本慶寺 松柳山下號ス淨土眞宗東本願寺末ニシテ阿彌陀如來ヲ本尊トナス寺

傳ニ慶長中法春ナルモノ加賀國小松ヨリ來リ之ヲ草創シ慶長十八年三月廿三日

寂スト 明曆圖書入錯薪 編亦之ニ同シ 當時ノ境内ハ明曆圖ニ表二十間裏三十五間ト見エ本ト寺町

通り町並タリシガ寛保元年十二月火災ヲ憂ヒ平田郷大町組濱畑分ノ内南三十間

裏三十五間ヲ借地シ移轉ヲ請ヒ同二年春之ヲ聽サレシモ砂除植付土居築立等ニ

從事シ荏冉十余年ノ久キニ亘レリ會々寶曆元年酒田大火アリ當寺烏有二属ス此

時且徒亦多ク類焼ニ罹リシヲ以テ之ヲ再建スル能ハズ舊境内ニ 即チ寺町通りニアルモノ 假堂

宇ヲ作り纒ニ法要ヲ營ミツツアルニ安永二年三月廿九日隣地大信寺火ヲ失ヒ假

堂宇悉ク延焼セリ同三年拮据土功ニ着手シ同四年之ヲ竣フ寛保元年移轉ヲ企テ

シヨリ三十四年ノ星霜ヲ閱シコトニ至テ初メテ其志ヲ成セルモノナリ

爾來舊境内ハ當寺ノ拘地トシテ菜園トナリ寛政三年三月請ウテ屋敷守ノ名稱

ヲ以テ名子ヲ住居セシム同年二月廿八日六軒小路ヨリ出火シ泉流寺淨福寺安祥寺大信寺及穢多町牢屋等類焼シ當寺幸ニ之ヲ免カレシモ其結果舊境内ノ空地長廿六間ヲ牢屋火除用地ニ收メラレ更ニ替地巾六間東西廿六間ヲ大町組分砂濱地ニ於テ永代無役寺地ニ下附セラレタリ

以上ノ顛末ハ當寺ノ書留ニ詳カナルモ繁キニ依リ文書ノ掲載ヲ畧ス

安永ノ建築

ニ係ル本堂ハ明治廿七年十月ノ劇震ニ顛倒シ目下造立ノ計畫中ナリ

じろま小路 寺町一丁目ノ東南小路ヲ云フ文政ノ酒田繪圖ニハ寺門前ト記セリ其

東側ハ泉流寺西側ハ林昌寺屋敷タリシヲ以テナリ

林昌寺小路 寺町二丁目ノ小路ヲ字ス本ト林昌寺小路ハ本町二丁目ノ東北小路ナ

リシヲ文政六年林昌寺當處ニ移轉ノ後チ舊址ヲ單ニ上ノ山ト云ヒ林昌寺小路ノ

名稱ヲコ、ニ存スルナリ

青物小路 寺町三丁目ノ小路ヲ字ス其表通ニ八百屋渡世ノモノ住セシヲ以テナリ

寺小路 寺町四丁目ノ小路ヲ云フ文政酒田圖ニ寺小路ト記シ文化ノ繪圖ニハ狹

小路トアリサレバ内匠町四丁目東小路ヨリコ、ニ至ルマテテ斯ク汎稱セシカ

南藏院小路 寺町五丁目ノ小路ヲ云フ北西角ニ修驗南藏院住ス故ニ名ク

秋田町 天正ヨリ慶長十七年マテノ間ヲ以テ成ル其地秋田街道ニ属セリ故ニ

名ク一説ニ永田若狹秋田ヨリ來住セシニ依リ之レニ字ストモ云フ是非ヲ知ラズ

明曆圖ニ三十三軒トアルヲ天和三年調書ニハ秋田町一丁十五間家數四十七軒ト

見ユ

(明曆圖書入)秋田町三十三軒天正中ヨリ慶長十七年迄ノ内ニ家作始ル尤秋田海道故町名道故町名ニいたし候様申傳候

(酒田三組古控異本)天正年中ヨリ慶長十七年迄ノ内ニ家作始ル尤秋田海道故町名

ニいたし趣申傳又永田若狹トテ三河國ノ産ニシテ越前ヨリ船ニテ松前へ下リ其後

秋田久保田茶町拾人衆ノ内ニ罷在天正年中迄ノ内七ノ丁ノ末ニ家作イタシ右之譯

等モ有之

永田氏 家傳ニ先祖若狹ハ三州ノ人ナリ秋田久保田ニ住セシヲ年代不詳秋田

町ニ轉住シ慶長六年ノ戰役ニ由利仙乏ノ兵ト戰ヒ菅野楯前ニ死ス後チ茶右衛門

勘十郎相續キ年寄役ヲ勤ムト云フ

永田家傳

(寶曆十一年三十六人筋目書)

永田茂右衛門

一拙者先祖若狹儀生國三州者ニ御坐候其比秋田久保田ハ罷越住居仕候處何年以前ニ御坐候哉最上様御時代御當地ハ引越只今之屋敷拜領仕御町年寄被仰付相勤罷在申候其比下口一戰之砌菅野館ニ申處落城ニ付討死仕候遊佐郷大井村之邊ニ若狹塚ニ申處御坐候夫ヨリ同苗茶右衛門勘十郎ニ三代年寄役相勤罷在候只今拙者迄十代罷成申候當時所持仕罷在候書物一通別紙ニ寫差上候○別紙ハ編纂ノ都合ニ依リ第九卷川行村宮田橋ノ下ニ載ス

案スルニ庄内昔聞書ニ向フ酒田ノ年寄ハ上林七郎右衛門永田茂右衛門村井理兵衛ニシテ當所へ移轉ノ後モ舊ニ仍リシト云ヘレハ最上家領ノ時代コ、ニ引越セリトスルハ蓋誤レリ慶長六年ノ戰死ハ上杉氏ノ爲メニスルモノニシテ最上家領ノ時ニアラサルナリ戰後勘十郎年寄役タリシハ下ニ載スル文書等ニテ自ラ明カナリ家傳ニ茶右衛門勘十郎卜次第スルモ野附氏御用留ニ收ムル三十六人由緒書ニハ茶右衛門ヲ以テ酒井家入部後ノ人トナシ且庄内昔聞書異本ニ茶右衛門ハ當時ノ町奉行ヲ殺害シ秋田ニ逐電スト見ユサレド町奉行世次調書ニ據ルニ入部後殺害セラレシ奉行其人ナシ粕谷家記ニ慶長六年永田讚岐上林等相議リ鎮守山王

宮ノ南殿ヲ創始スト之レニ據レハ讚岐ハ勘十郎卜時代ヲ同ウスルモノ、如シ必竟スルニ當家ノ世次ニ係ルモノハ左支右吾幾ント不明ニ属スレハ姑ク闕如ス維新後退轉ス今ノ米商會社ノ敷地ハ實ニ其宅址タリ同姓永田匠藏山椒小路住今内町ニ轉居ス家ニ最上時代ノ文書數十通ヲ傳フ皆勘十郎ニ宛テタルモノナリ左ニ之ヲ掲載ス

覺

一百六拾三々九步者

駒口五ヶ月分

一百貳拾々者

とゞ島ヨリ
いか拾壹駄分

ハ貳百八拾五々九步者

銀子

此永錢四貫貳百八拾文

但壹々ニ付拾五文ツ

一四拾八々五步者

役罽之銀子

但此銀子ハからかねたま五千七百くろかねたま貳千七百

ちや五斤永錢百五十文ニ而取之

一九拾五俵者

役罽但はま通八村ヨリ

以上

かま數貳拾八此内つりがま三ツ

右之通請取候也仍如件

慶八極月十三日

覺

駒口と島役いか並濱通がま役之鹽右之通舟役算用之刻万相澄候者也仍如件

慶九

霜月廿七日

覺

駒口役銀並飛鳥いか銀之事

合四百七拾六匁四分

此内貳百貳拾三匁四分

同貳百五拾五匁ハ

但駒口

但と島鳥賊代銀

右請取則□□へ山がたへ爲上申候者也仍如件

慶十三年

極月十日

進藤但馬

覺

右はまどをり塩かまの役鹽之算用相澄者也以上

慶長十八年

十二月廿三日

永田勘十郎とのへ

口上

殿様御遠行ニ付而態飛脚差越候事令祝着候尙頓而下候時可申理候間不具候恐々謹言

二月六日

志九郎兵衛

光惟

永田勘十郎とのへ

下

御慈札披見過分之至候仍屋形様御遠行被成候付而九郎兵衛様但馬殿爲御音信態々御使者被遣候御太儀之至候即但馬殿へ之御狀披見仕候遠路忝候由被申候其地無何事由承満足仕候此方御用候者可蒙仰候罷歸候砌期貴面萬々可申述候條不具

候恐々謹言

二月六日

永田勘十郎様 貴報

友井三九郎



覺

右濱道之鹽竈役慶長十六年之分算用相澄者也仍如件

慶長十七年

十二月廿六日



永田勘十郎とのへ

覺

右慶長十七年分ノと島年貢いか代相澄者也以上

慶長十八年

十二月廿三日

永田勘十郎とのへ

此中ハ此方降雪ニ付而御無音ニ罷過無御心元存候左様ニ候へバ爰元ニ能さやし

無御坐候而我々腰指さや仕候ニ差越申候委御所衣茂助殿へ申越候其元さやう□□候而其元九郎兵衛殿さや申候者ニ御あとへ可給候彼者共其方ニ二三日も踞可申候間腰指迄ハ貴殿所ニ御をさ候て可給候御隙候ハ御越待入候又上方ヨリ米買參候ハ爲御聞可被下候少賣可申候委彼者可申事ニ候恐々謹言

新關因幡守

久而



永田勘十郎殿

人々御中

御ねんく鹽之事

合貳百九拾九表ハ

但二斗入

此内二表ハ松下作丞かん惣左衛門ふくらにて七月請取候てつかい申され候殘貳百九拾七俵ハ儲ニ相請取所實正也

慶長拾九年

十二月廿八日

永田勘十郎殿

安部越中



請取申けんさうりやう之銀子之覺

合百拾七匁壹分五厘りん 但まち はかりにて

慶長十六

極月十三日

宗左衛門

永田勘十郎殿

濱通竈役鹽之事

合貳百八十表壹斗二升五合

但貳斗入

此外拾壹表七升五合ハめかの秋竈おつるニ付て引

同三十表ハ青塚村火事ニ付て引

右算用相澄者也

慶長十七年

十二月廿六日

永田勘十郎とのへ

駒口並と島役之事

右慶長長拾壹同拾貳年分共ニ算用相澄候狀如件

慶長拾三年

二月廿六日

覺

右と嶋之役物慶長十六年之分ハ算用相澄者也仍如件

慶長十七年

十二月廿六日

永田勘十郎とのへ

借用申いたの事

合貳拾つほハ

右借用申所實正也來於夏中ハ急度相濟可申爲後日壹札指上申候仍如件

慶長十七年

霜月十六日

池田刑部左衛門

武田喜助様參

覺

一貳百四拾四丁ハ

筒 木

一貳百卅八間ハ

板

一八八丁ハ

檜 丁 木

一七枚ハ
一貳拾本ハ
一六間ハ
貳枚ハ
一參千八百枚ハ

以上

右慶長十七年ノ拂殘並當役物指引算用相澄如此預ケ置候者也

慶長十八年

十二月廿三日

永田勘十郎とのへ

杉小羽之事

合三千八百枚

右荒井彌右衛門ニ可被相渡者也

慶長廿年

八月二日

あら板
長木
檜板
べさいの板
ふるふねの
小羽

御算用所へ遣申候

齋藤筑後



安部越中



高橋伊賀



此内貳拾間ハ御鍵藏ふき押也
同十七間ハ御鐵砲藏之押也
同三間ハてつくらの下敷也

齋藤筑後



安部越中



高橋伊賀



永田勘十郎殿

右之板扱之事

合三拾八間者

右荒井彌右衛門へ可被相渡者也

慶長廿年

八月二日

永田勘十郎殿

請取申候板筒木之事

一貳百四拾丁者

一貳百間者

右内五間ハくちてすたり申候

一八丁者

一七枚者

一貳拾本者

一六間者

一貳枚者

右請取申候所實正也仍如件

元和貳年

拾月八日

永田勘十郎殿

覺

但古木

合四丁ハ　　りの木是ハ御鷹口衆御賄ノ時四度ニはし木ニ遣申候

元和二年極月十五日

松下作丞

杉筒木

松板

檜筒木

壹間物古木ひの木
たいから板

杉ノほそ木

ひの木板

べざい舟ふる板
但くち申候板也

河内刑部

西野長右衛門

永田勘十郎殿

組中喜利支丹宗旨又ハ此跡ころい候者無御坐候事

一伴天連入滿惣而喜利支丹宗旨並不届成者其上行衛不存候者宿仕者無御坐候事

一不審成者町中へ參候ハ、改置可申上候事

右之通自今以後相背者御坐候者急度とらへ置可申上候組中の外成共右之旨相背者

御坐候ハバ承次第ニ可申上候何事ニよらず惡敷儀仕候者御坐候者言上可仕候乍存

隱置申者御坐候者其身ノ儀ハ不及申組中迄も御かより可被成候爲後日一札指上申

候仍如件

中町肝煎

永田次右衛門

子の寛永十三年

三月廿四日

戸田半四郎殿

石川角兵衛殿

坂尾甚兵衛殿

先頃御見せ被下候永田方數通之古書緩々忝存候致返進候

二月七日

一書翰並証文十通

清右衛門様

甚三郎

一水帳 一冊

外ニ手控トモ

一志村伊豆守黒印ノ証文ハ珍敷ものニ候一ツニ被成うら打可仰付候

志村 是ニテ候
寶印

一同嫡子九郎兵衛書翰の名乗ハ光惟ニテ候

伊豆九郎兵衛但馬墓青原寺ニ在

一進藤但馬ハ志村家の家老ニテ候由

一慶長十九年ニ志村打死其年最上ノ酒田へ役人町奉行ヲ被置候由元和八年迄最上家ノ役人持之由此方様酒田の城受取帳ニハ阿久津右近門田造酒之亟名ニテ渡シ帳有之由齋藤筑後安部越中高橋伊賀ハ最上ノ役人ト聞エ申候

右數通之古書元文二年松平甚三郎様ニ差上候處表具仕候様ニ被仰付其砌一紙

卷ものニ仕置候前段之御書付者松平甚三郎様御直筆志村之印名乗等相分リ候

酒田御町永田治右衛門と申者之方ニ所持仕候古キ書物拾壹通御慰ニ奉入貴覽候

右書付古キ物故唯今相知レ不申候義も相見へ申候拙者相考候義左ニ申上候

一新關因幡書狀之内ニ腰指と御坐候脇指之書違ニ可有之と存候但古來脇指を腰指と申候義御坐候哉

一駒口と申は唯今申渡役口錢之事ニ御坐候哉と存候

一飛鳥之義をとと島と御坐候古來とと島と申候哉不審

一壹乃ニ付拾五文宛と御坐候是ハ銀割と相聞へ申候是銀割を以相考候へバ殊之外下直ニ相聞候へ共寛永之新錢出不申候以前故唯今之錢通用ニ違申候等ニ御坐候

一からかねたまくるかねたまくと御坐候處是ハ鐵砲玉之事ニハ有之間敷候唐金くろかねをも銀子のことと通用仕候哉と存候

一けんさうりやうと申ハ船新造作之節之役と承候元造料と書候由

一荒井彌右衛門と申者相見へ申候是ハ今御門番彌右衛門先祖ニテ可有御坐候哉普請方之役務申候と被存候鳥海山宮ノ棟札にも右彌右衛門假名御坐候由及承候

一齋藤筑後ハ酒田町筑後町ニ居候由高橋伊賀ハ今之町奉行屋敷ニ居申候由安部越中ハ今ノ近江町ニ居申候哉と存候元和三年ノ比寺内近江と申者筑後伊賀同役ニ而近江町ニ居申候由承候

右之通御慰ニ奉入貴覽候以上

正月廿八日 栗田清右衛門

御鷹屋敷 附御鷹匠宿址 明曆圖ヲ案スルニ今ノ六軒小路以南河岸ニ至ルマテノ間此屋敷ヲ以テ充タサレ永田氏ノ宅ハ其中ニアリシモノ、如シ酒田三組古控異本

曆圖書入ニモ記サレタレド異本ハ殊ニ之ニ係ル文書アリ録シテ参考ニ供フ

御鷹屋敷御鷹置宿 是ハ古來 公方様御鷹部屋相守候御鷹匠衆御宿仕三軒屋敷諸役

御免ニ御坐候趣元祿九年子九月秋田町茂右衛門と申者書付差出し申候同町七兵衛

と申者半軒屋敷諸役御免ニ而同年同月茂右衛門同様之書付差出申候外ニ四ノ丁三

人之者左之通

一壹軒屋敷無役本町四丁目六右衛門是ハ殿様御鷹宿廿年以前親六右衛門代ヨリ仕候ニ付無役御坐候

一壹軒屋敷無役同町惣七郎是ハ古來曾祖父太右衛門代 上様御鷹宿仕候ニ付其節

御町奉行勝木太左衛門殿御代御赦免被遊候由承傳申候其以後 殿様御鷹宿代々
 仕來申候右御免被遊候年數之儀相知不申候
 一貳軒屋敷無役同町彦兵衛是ハ先屋敷主古來 上様御鷹宿仕候付右惣七郎同前御
 赦免被成候由承傳申候其以後 殿様御鷹宿代々相勤罷在申候由先長右衛門申傳
 候と有之年數之儀ハ相知不申候
 右三人モ茂右衛門七兵衛同様同年同月書付差出申候處其節御町中諸役御免之者御
 改之上七十八人以來御町役相勤候様被仰付候右五人も七十八人之内ニ相見申候其
 後享保二年酉九月右五人之内秋田町茂右衛門へ御糺有之左之通書付差出申候
 一公方様御鷹古來役松前爲御登被遊候其比御鷹匠山本藤右衛門様と申御方拙者方
 え年々御宿被仰付候由承傳候
 一古來御鷹部屋有所御肴藏ニ被成置候拙者屋敷之北御圍之内ニ御鷹部屋有之東之
 方御門有之候様承傳候
 一御鷹匠様御登之節拙者御泊之節御城代松平甚三郎様御見舞被遊其外御役人様御
 詰被遊候由承傳候御逗留之日數相知不申候
 右之通御坐候御鷹松前ヨリ爲御登相止其以後年數凡七十年余にも罷成候哉と拙者
 親茂右衛門存生之内右之物語仕候委者不奉存候以上

酉九月

永田茂右衛門

上林七郎右衛門殿
 加賀屋與助殿
 笠谷惣右衛門殿
 栗林新右衛門殿
 渡邊隼人殿

一寶曆十二午年松前ヨリ御鷹爲御登候ニ付公儀に御伺出道筋諸大名方え御奉書ニ
 付御家老中ヨリ御達左之通
 松前ヨリ御鷹通行ニ付御奉書出候間寫差遣申候外ニ御書付兩道も遣申候延享四
 年之御例を以御用意可有之候
 從松前献上之御鷹出羽路秋田本庄汐越之方道中筋ニ御坐候へハ左衛門尉領分左之
 通御坐候
 由利郡御料ヨリ女鹿吹浦村酒田清川拍谷澤村
 右之通ニ御坐候
 一松前ヨリ出羽路秋田新庄之方道中筋ニ御坐候得者左衛門領分村々無御坐候
 一奥州道中筋ニ左衛門尉領分無御坐候
 以上
 三月
 右書付三月廿日池田筑後守様へ於御城御部屋番差出ス

從松前指上之御鷹各領分相送之刻松前若狹守斷次第人馬並御鷹之餌等如前々
可致沙汰之旨 上意ニ候可被存其趣候恐惶謹言

寶曆十二年三月廿八日

松平右京大夫輝高判
井上河内守利容判
秋元但馬守治朝判
松平右近將監武元判

宛 ○沿道諸候
ノ氏名アリ

右御鷹宿舟場町本間久作に被仰付

米商會社 秋田町ニアリ古來幾回ノ沿革ヲ閱シ今日ニ至レルモノナレドモ未タ之

ヲ徴スヘキ文書ヲ得ルニ及ハズ目下採集中ニ属セリ故ニ姑クコヽニ闕如シ他日

材料ヲ得ルノ後チ補遺トシテ卷尾ニ附録スヘシ

傳馬町 慶長十七年ヨリ明曆二年マテノ間ヲ以テ成レリト云フ秋田街道ノ入口

ニシテ驛馬旅店コヽニアリ故ニ名ク

(明曆圖書入)傳馬町慶長十七年ヨリ明曆二年迄之内ニ家作始リ候様相見候明曆ノ

比戸數三十三ヲ有セシニ 明曆 天和三年ニ至リ六十六戸トナレリ 同年巡見使
御用覺書

白崎氏 先祖某ハ越前國南條郡白崎村ノ人ナリ年代不詳當港ニ來リ商業ヲ以

テ一家ヲ興セリ因テ白崎ヲ氏トシ越前屋ヲ家號トナシ 先代良彌ノ
談話ニ據ル 子孫相承ケ五

代ニシテ五右衛門ニ至ル諱ハ一恭字ハ子謙文フミノヤ廼舍ト號ス人トナリ篤實ニシテ氣

節アリ學ヲ好ミ和歌ヲ善クセリ 松雲居夜話ニ據ル
原文下ニ掲載ス 寛政五年藩主酒井侯本間四郎三

郎ノ建議ヲ採用シ農政改革ヲ實行セラル、ヤ同八年ヲ以テ爲メニ金吾兩ヲ献ス

藩主其篤志ヲ嘉ミシ俸五口ヲ賜ヒ御用達格トナシ帶刀並ニ三ツ星御印ヲ免サル

同十二年五月九日酒田町救恤錢トシテ四百貫文ヲ效シ之ヲ究民ニ貸附シ小商賈

ノ資本トナシ生計ヲ助成セシム因テ金三百疋ヲ賜ハリ大庄屋格ニ補セラル 勤
書

(野附氏御用留)寛政十二申年

白崎五右衛門殿御町困究之者爲御救錢四百貫文被差出度願之通被仰付此度爲御稱

譽酒田御町大庄屋格被仰付御金三百疋被下置候此段御達申候様被仰付候

五月九日

帳付 ○町奉行所
ノ書役ナリ

三町月番 ○大庄屋ノ
月番ナリ

寛政十二申年八月八日

一御用之趣申來罷出候處先達白崎五右衛門困究御救錢四百貫文差出候ニ付右錢を

以當年の困究者へ其者々々五百文なりとも一貫文なりとも貸渡右錢ニテ菓等にも
賣出し相續相成候様致度尤取立之儀ハ來四月五月兩度取立申付又秋ニ至リ候へバ
又々貸渡毎年右之通貸渡尤モ少々利足付候間取立人ハ肝煎ニハ無之町内ヨリ申付
尤人えらみ之儀ハ御同心ニ申付候各別心無之候ハバ御家老中へ御伺之上其通被仰
付候へバ尙又各々へ可申達者被仰聞候ニ付一統別心無之趣申立候○但本件ハ町奉行ヨリ藩老
へ經伺ノ上同年九月十九日
ヨリ實施セラル事同御用留
ニ詳カナナルモコレヲ略ス

(松平家文書)去月晦日之御封印令拜見候酒田御町人御用達格白崎五右衛門儀同所
御町方救之爲錢四百貫文寸志上之義此表之模様内膳相認吉之允殿御下之節御頼申
候處早速被及御沙汰候右五右衛門儀全以内含等有之願候事ニハ無御坐候由右ニ付
御封印御細書之越委曲令承知候則倉右衛門を以相伺候處寸志願之通四百貫文差上
候様被仰付候五右衛門爲御褒美酒田町大庄屋格被成下御金參百疋被下置度旨御伺
之通被仰付候別紙書狀を以申進候宜御沙汰可被成候以上

壬四月廿九日

酒井吉之允様
竹内八右衛門様
(江戸在勤)
松平内膳
服部圓藏

朝岡助九郎様

酒田ハ西大海ニ瀕シ南最上川ニ枕ミ東北平野ニ連リ地物ノ蔽障トナルヘキモノ
ナキヲ以テ一旦火ヲ失ヘハ風伯之ニ乗シテ勢威ヲ逞ウシ數百戸ヲ延焼スルモノ
古來幾回ナルヲ知ラス故ニ便宜「用水」トシテ漆喰水溜ヲ設ケ豫メ消防ノ用ニ
供ヘシモ當時設備全カラス非常ニ際シ往々欠乏ノ憂アリ文化五年町奉行高田織
大夫之ヲ五右衛門ニ諮詢シ其方法ヲ開陳セシム爲メニ建議スル所アリ即チ私資
ヲ以テ「用水」ヲ増設シ且修覆料トシテ田地ヲ效シ永ク失墜ナカラシメントスル
ニ在リ町奉行其議ヲ採用シ之ヲ實行セシム同年五月因テ永代山王宮祭禮神宿ヲ
免除セラル同七年消防設備ノ賞トシテ御紋附袴ヲ賜ハリ且向後火防ノ際町年寄
同様出役スヘキヲ命セラル七年以下勤
書ニ據ル

(野附氏御用留) 覺
一用水

凡百ヶ所余
巾三尺壹寸長五尺八寸
但三石桶入位

但酒田町組

是迄有來候用水相除

右ハ當年々五ケ年目申年迄出來上候様仕度奉存候

一用水場處杉原伊平太殿へ内談之上御町役人衆立會を請場處相定度奉存候

一用水不殘出來上リ候迄伊平太殿拙者兩人え御任被成下度奉存候

一用水年々十一月中掃持仕候節其町内ヨリ人足御差出被成下度奉存候

一御田地五十表揚ケ

右用水不殘出來仕候上未々爲修覆料御田地相應之場處並地元証文共ニ御役所へ

差上申候其節右御田地ハ永ク拙者へ御預被成下度奉存候且修覆料之内貳拾表宛

拙者親類之内世話仕候者へ年々爲世話料被下置度奉存候

右用水之義心付候次第書上候様被仰付候間乍憚覺書を以申上候以上

(文化五年)

辰四月

白崎五右衛門

覺

今度爲火防禦町方用水百ケ所余寸志として新規造作いたし其上未々御町方失墮無之様右用水爲修覆並世話人手當料御田地永ク差出候ニ付火防備爲立御町方救ニも相成候ニ付神宿永々相除候儀今度相極相違無之候爲後証仍如件

文化五戊辰年五月

年寄

大庄屋

白崎五右衛門殿

町奉行高田織大夫殿添判

用水ノ設備粗々具ハルト雖トモ當時酒田ノ家屋ハ率ネ構造簡笨ニシテ葺クニ茨茅ヲ用キ毎ニ延燒ノ媒介ヲナセリ是ニ於テ家屋改良ノ必要ヲ認メ行々瓦ヲ以テ葺カシメントスルモ庄内地方ニ於テ未タ曾テ製瓦ノ業ナシ今悉ク之ヲ他邦ニ仰カンカ價格不廉ナルノミナラス正貨流出ノ憂アルニ依リ爲メニ資ヲ投シ人ヲ越前ニ遣ハシ其製法ヲ傳習セシメ又瓦師ヲ招聘シ工場ヲ遊佐郷野澤山ニ設ケ盛ンニ之ヲ製造セシム實ニ是レ庄内ニ於ケル製瓦ノ嚆矢ナリ松雲居夜話ニ據ル原文下ニ載ス

同九年八月町奉行市民ニ令シ資力ノ堪フルモノハ瓦若クハ小羽板ヲ以テ改葺セシム蓋シ是レ五右衛門ノ業ヲ創始シ之レニ供給スルモノアレハナリ

(同上)近年御普請所々ニ而被仰付候越前並地瓦屋根雪中氷痛も無之甚丈夫ニ付御町方ニても瓦屋根ニ致度存居候者も可有之哉乍去花美ニ相見候ニ付致遠慮ものも

可有之哉ニ付申達候御町方專火防之爲メニ相成且ハ始終勝手之筋ニ相聞候間瓦屋根ニ致度望之者無遠慮可致普請勿論小羽屋根之儀も是又火防ニ相成候ニ付以來致普請候面々相成丈右兩様之内致普請候事ニ候ハ、御町方一統火防之爲ニ相成申候ニ付此段申達候

文化九年申八月

町奉行

同十年五月十四日筑後町火ヲ失ヒ三百六十三戸悉ク烏有二属セリ公儀被仰出書コ、ニ

警鐘ノ無カルヘカラサルヲ知り同年八月之ヲ鑄造シ酒田町十ヶ處ニ懸ケ非常ノ警報トナシ用水百貳拾六ヶ所ノ外新ニ用水五十一ヶ處ヲ増置シ之ニ係ル修造費トシテ再ヒ所有ノ田地ヲ效シ其他豫メシホゴモ塩菰ヲ蓄フル等心力ヲ之レガ設備ニ盡シ大ニ其面目ヲ改ムルニ至レリ同年十月爲メニ御紋付袴一領ヲ賜ハリ宅地ノ賦役ヲ免サル

(野附氏御用手鑑)文化十年八月御町方万一出火之節爲知合喚鐘懸置度旨白崎五右衛門願立被仰付

(同御用留)

酒田御町年奇格

白崎五右衛門

右之者先年酒田御町火防用水造立置當年ニ至リ用水不行屆場ハ五十一ヶ所造立且場處見計十ヶ處程喚鐘掛置右兩様普請掛居修覆之爲所持之田地又々御町方ハ差出置其外鹽菰等拵置年來火防之義心を盡一段ニ付爲御稱譽御紋附御上下被下置居家數御町役御免ニ被仰付候此段可被申渡候

酉十月

五右衛門ノ消防設備ニ於ケル既ニ斯クノ如クナルモ自ラ以テ足レリトセズ尙其完成ヲ冀望シツ、アリシニ從來酒田習慣トシテ各自尿溺ノ溜桶ニ滿ツレハ之ヲ附近ノ堰溝或ハ物蔭ニ委棄シ有益ノ肥料ヲシテ無益ニ属セシムルノミナラズ汚穢惡臭幾ント名狀スヘカラズ五右衛門嘗テ之ヲ憂ヒ廢物利用ノ方法ヲ案出シ同十一年即チ自費ヲ以テ溜桶ヲ作り各戸ニ配布シ人ヲ賃シ汲取ラシメ更ニ之ヲ大溜桶ニ移シ蓄ヘ村落ニ賣却シ其純益ヲ以テ消防器具ヲ調製シ並セテ酒田ニ定火消ナルモノヲ組織センコトヲ請願シ之ヲ實施セリ同十三年火防ニ係ル前後ノ功勞ヲ嘉セラレ年寄格家ニ列シ酒田御町惣火消世話役ヲ命セラル十三年以下勤書ニ據ル而ル

ニ其經營セル肥料特賣ノ方法ハ頗ル有益ノモノタリシモ總ヘテ利ニ趨ルハ人情ノ免レ難キ所ニシテ當時町民直接賣買ノ利益ナルヲ知り後チニハ五右衛門ノ手ヲ離レ直ニ之ヲ郷中ニ賣却スルモノ續々輩出シ爲メニ當初ノ目的ニ非常ノ影響ヲ與フルニ依リ文政元年町奉行令シテ自家田畑ニ使用ノ外郷民ニ賣買スルヲ禁ジタリ

(野附氏御用留)文化十一戌年白崎五右衛門願立町々小便郷方へ爲登候義願之通正月中被仰付

(酒田町年寄御用留)六年以前戊二月中申達候御町方家々々小便肥シ白崎五右衛門申立郷中ニ相廻シ右代錢相渡猶融通を以違々定火消新ニ備相立往々ハ一統安堵之義與存候乍去是迄冬分ニ至リ候テハ溜置候桶等も莫大之事ニ而差支候得者自汲方行届兼候次第も相聞候處今度汲廻り度旨申出候間御町方ニ而面々所持之田畑ニ持運ヒ肥しに相聞候ハ格別ニ候ヘ共此節ニ至リ五右衛門同様郷方に賣遣候ものも有之哉ニ相聞候前々右小便多クハ捨りものニいたし來り候處畢竟五右衛門工夫を以郷方に相廻し候得者惣御町中ニ取候而ハ潤ヒ夥敷其上火消備相立候儀御町方ニ對シ甚深切之至ニ候處聊カ之事ニ目出賣遣候儀ハ趣向を破候筋にも相成行候間此後

端々まで致謝酌心得違無之様申達尤五右衛門方ニ而汲方不行届次第も有之候ハ、此段相斷候様各ヨリ町々肝煎を以可申合候

四月

役所

年寄
大庄屋

サレト此禁令モ漸次相弛ミ其方法終ニ廢絶スト雖古來無用ノ汚物トセルモノヲ有益ノ肥料ニ充テ市中ノ臭穢ヲ排除セシメタルハ實ニ五右衛門ノ功績ニ属スルモノナリ文政元年十一月廿五日没ス享年五十五

六代五右衛門一實名ハ正字以直幼名直太郎歳甫メテ十一ニシテ青原寺住僧金龍和尚ニ托セラレ書ヲ讀ミ字ヲ習ヒ餘暇徒弟寺僕ト同シク洒掃等ノ勞力ニ從事セシメラル當時其家ハ酒田有數ノ素封者タリ而モ先代五右衛門ガ最愛ノ一子ヲシテ厠養ニ服役セシムルハ世間ノ父母或ハ兒孫ノ愛ニ溺レ徒ラニ温飽ニ狙レ惰弱ニ陥ラシムルノ流弊ヲ矯正セントスルニアルモノ、如シ十五歳ノ時米澤ニ赴キ藩學養賢堂ノ提學神保蘭室ニ就テ經史ヲ攻メ學業大ニ進ミ最モ左氏ニ通シ之ガ

會頭トナレリ居ルコト六年ニシテ父ノ喪ニ丁リ辞シ歸リ跡式ヲ襲ヒ亦五右衛門ト稱ス是レヨリ翰墨ヲ投シテ専ラ家道ヲ修メ乃父ノ遺績ヲ繼キ奉効慈善ヲ努メ數々賞賜ニ與カル文政七年製靱場ヲ松山ニ設ケ松山城大手門ヲ改修シ且乙矢山ニ松壹万本ノ寸志植付アリ爲メニ俸二口ヲ賜ハル松雲居夜話天保二年酒田町年寄添役トナリ併セテ町醫修行引立掛メ命セラル勤書之ニ係ル功勞ハ既ニ十全堂ノ下ニ詳カナレハコレニ省略ス

同四年巳歲大凶荒ノ救恤及ヒ多年ノ篤志ヲ嘉ミセラレ年寄格家御流頂戴格ニ列セラル勤書其究民ヲ救濟スルヤ自ラ資ヲ効スノミナラズ本間外衛町奉行小川渡大夫等ト議リ心力ヲ盡シテ之ニ衣食ヲ給與シ一民モ飢寒ニ仆ルモノナカラシム

本間家日記正徳寺法經塔記

故ニ町民其德ヲ慕ヒ活觀音ト稱スル至レリ

松雲居夜話

(野附氏御用留)

白崎五右衛門

右ハ去巳年大凶ニ付當春中ヨリ飯料合積被仰出候處深切ニ取扱賣座米宿救金錢請拂其外施行之儀大凶作ニモ不限出火洪水ノ度毎厚心ヲ盡シ小前ノ者共引立酒田御

町方ノ儀ハ旅人モ多入込締方大切之場處ニ候處万端主ニ立諸事行届拔群精勤ニ付今年寄格家被仰付二代御流頂戴格被成下候

同十一年十一月藩主越後長岡ニ轉封ノ命ヲ受ケ武州河越城主松平大和守ニ庄内ヲ賜ハル事匆卒ニ出テ土民措ヲ失ヒ物情恟然タリ時ニ五右衛門本間氏ノ用務ヲ帶ヒ出府滞在中遊佐郷升川村ノ人佐藤々佐ナルモノト竊ニ相謀リ矢部駿河守ニ倚リ主家ノ爲メニ大ニ効ス所アラントシテ縁ヲ川越藩士ニ求メ陽ニ忠勤スルマネシテ陰ニ内部ノ形勢ヲ探知シ松平侯就封ノ後機ニ投シ變ニ應シ主家復舊ノ奇謀ヲ畫策シ其歸國スルニ臨ミ故ラニ我力藩邸ニ辞セズ川越 邸ヲ過キリテ途ニ上ル事高瀬村ノ下ニ詳カナリ

同十二年七月藩主本領安堵ヲ命セラル曩ニ五右衛門等ノ川越ニ對スル畫策ハ當時秘密中ノ秘密ニ属シ其苦心慘憺ノ真相ハ固ヨリ士民ニ知ラレサリシヲ以テ五右衛門等ヲ目シ舊主ニ背キ川越ニ親ミ他日ノ利益ヲ計ル賣國ノ奸賊トナシ一犬虛ニ吠ヘ万犬之ニ應シ物論囂々終ニ百姓等嘯集シ有司ノ制止スルニモ拘ハラヌ

家屋ヲ破壊セントス五右衛門難ヲ鶴岡ニ避ケシモ農民事毎ニ五右衛門藤佐ニ慚然タラズ動モスレバ不穩ノ舉動ニ出テントス故ニ同十三年五右衛門ニ退隱ヲ命ジ養子謙吾ニ跡式ヲ賜ヒ民心ノ動搖ヲ鎮セシムルニ至ル而レモ事實ハ既ニ斯クノ如ク必竟「天狗連」ト稱スル一部ノ農民ニ誑誤セラレ不幸事コトニ及ヘルモノナルヲ以テ弘化二年復職シ年寄月番勤ヲ命セラレ俸五口ヲ賜ハリ士班ニ列セラ

ル嘉永三年九月十九日歿ス享年五十四

書

當主良彌ハ實

謙吾相續シ亦五右衛門一誠ト稱ス町年寄火防世話役故ノ如シ
ニ其三世ノ後ナリ明治廿七年十月ノ震災ニ家屋悉ク烏有ニ歸シ現今山椒小路ニ住シ家道昔日ノ如クナラスト雖モ酒田町越前屋ノ宗家トシテ尙町民ニ重ンセラ

參照 (松雲居夜話)

白崎五右衛門名ハ誠字ハ子謙酒田の富商にして氣膽節行あり書を讀み和歌を好て詠せり酒田ハ海ニ近く濱風烈しくして時々大火ある處なれハ五右衛門深く之ヲ憂

ひ防火の事に心を盡くしてつとめ謀る家資を以て半鐘を多く鑄させ市中處々に立て又用水溜を三十六ヶ處にほり居へて一ツニ水二百四十桶を入る沙地にて水洩るゝ故にシツクイを厚くぬりかためて水を貯ふ且家抱への火消夫も三十人あり給米ハ取らせ置て常ニ其身を勝手に致させ置くも出火といへば即時に一同集り來りて龍吐水やら水やら桶階子旗など火消の道具を持出して火事場へ駆け付働く事なれハ之を白崎の火消と云ひて市中大ニ頼ミニす莊内ハ富饒の地にして何事も不自由なく事足りて能所なるも屋根瓦のみハ出來ずして越前より取寄することなり五右衛門これを國の欠事として又家財を以て人を越前に遣ハし習はしめ越前よりも瓦師數人を呼下してかゝへ置き官に願ひて河化野澤山ハ松木多く土も宜しければ其所に瓦塲を營ミ立て日々に焼かしむるに屋根瓦能く出來て四方にひろまり國に不自由なくして諸人大に便なりとす五右衛門總へて市中の爲に益あることは心力を盡してこれを行ふ市中元より沙地なれば家々に小便所の壺といふハあくみな沙地に溺し捨る事なり五右衛門思ふに小便ハ畑地に用ひて大に能き養ひを得るものなるを幾千幾萬人の出す所を空しく沙上に捨る事甚惜しむべきなりとて市中家々の小便所に桶を据へ置きて溜しめ人を遣ハし酌取る時ハ代錢を其家に遣ハし故に家々にてはこれまでたゞ沙上に捨る小便を今度代金を貰ふことになりけれハ大に悦

びこれを徳とす五右衛門其小便を近郷の村々へ賣り捌きければ近郷にてハ大に悦ぶ事になりぬこれ莫大の小便天物の暴にあるを取上げて民用に致すなれば大徳にして天地の恵みを得へき事なり五右衛門平生市中の事に心を用て締り方を付け人の爲になることは専ら務めて貧究の者へは米金を借しました賑はし與へてこれを救ふ故に市中皆悦びて白崎の親方さまと稱しける

一人男子ありて名を正字を以直といへるが十一歳になりし時青原寺の金龍和尚は其頃の禪學高德の人なりければ此人に托し置て書を讀み字を學はしむ餘暇には小僧と共に庭の草を取り寺中の掃持板間をどふき淨むるからさわさまでも致させて勞を知らしむ酒田にも名高き富豪の一人の男子を愛に溺れずかくまで勉行せしむる事尋常の人にてはならぬことあり十五歳になりし時より米澤にやり神保蘭室先生を師として其家塾に居らしむ正も俊才ありて學稍々進み左傳會頭となり勤て米澤公より賞賜あり會頭を勤るには杜注は勿論注疏まで委しく左傳一部を明らかにして無本の所に其事を問はるゝも答への出来る事にならでは左傳會頭は勤まらぬ事の上し二十歳になりし時父五右衛門病て容子頼み少き体に成りければ米澤へ人を遣りこれを告げて歸り侍養せよと言遣はす正驚き即日に急ぎ立て夜を日につきて歸りけるも父五右衛門己に死せり正大に哀痛哭泣して性を減する斗りに毀し

月日立ちて喪を終へたれども十一歳の時より家に在らざれば家業の職体少しも知らず然るに手代助作といふ者ありて甲斐々々敷忠勤して正に教しへまた正か母か蕨岡大泉坊の女にして和歌を詠し常に源氏湖月抄を見て娛みとし家事を能く熟知せしかば此兩人して正に教しへ習はしむ正も才敏なりければほどなく家業を飲み込みて家政を執りて衆僮を御し能く行ふ事になりぬ家名を襲きて五右衛門と稱し父の志を繼きて市中貧究の者を救ふをつとめとす天保四己年ハ諸國凶餓せりといへども奥羽は尤甚しく外には餓死の者多く聞へしも庄内にては歡喜公是を大に憂ひ給ひて大夫水野重榮に厚く任し救はせ給ふ重榮心を盡し有司と計畫して米金を他邦に借り貧究の者を救ひ寒き者へは古衣を與へ着せしめ病る者へは醫藥を施し與へらる時に加藤伊右衛門酒田の市令たりしが正が志氣あるを知り救ひ方を命し勤めしむ正已れよりも米金多分に寸志に上げ才敏能くとゞきて米金古衣の與へ方大に其宜きを得てくまなく行渡り上より賜はる古衣に己れよりも數百金を出し買ひこれを與へければ市中悦び稱して生きたる觀音さまといひ尊ぶに至る飢寒の救ひ方には實に心力を盡して勤め酒田市中數千軒に一人の餓死寒死もあし翌午年は稀なる豊作にして米も早く出來ければ上にては大に悦ひ給ひ賞褒ありて町年寄家知行取鷹匠格に申付らる酒田には古來より町方三年寄とて町大庄屋の上に立ちて

市中取扱ひ居る家三軒ならで無之を五右衛門は鷹匠格故三人の上座になること面目を施し世の聞へも大方ならさる事なりき然るに其後上にては越後長岡へ轉領の幕命を蒙られ庄内へは河越の松平大和守殿人替りの事にありければ庄内中の上下悲憤に堪へず両郡の衆民江都へ歎願に出て居りけるが正先年松山へも瓦塙を立て焼きし時大手門及靈屋等へ多分の瓦を寸志に上げ其上一萬本の松を乙矢山に寸志植付せしかば松山侯より二人日米を賜はり出入となり居りけるが其時本間家より依頼せられ懸合の要用にて江都に出居り松山の邸第へも伺候して献品せしかば酒食を賜はり外にも賜物ありけるを歎願の河北百姓共はいかに間違ひたりけん五右衛門河越の邸へ出献品して料理を賜はり庄内へ入部後は自分仕合の事を謀ひぬとおもひ悪みて騒ぎ立ち見懸り次第に打殺さんといきまきける酒田の家にも河北より大勢來り向ひて打こはし仕懸られいか様にいひ譯るといへとも頑愚の百姓只騒ぎ立て少しも聞入れず兎角してねらはるゝほどに其身は鶴岡へ避け來りて居り兩三年過ぎて病死す男子なければ酒田の家には笠谷某の次男を養子して家督相續いたしけり養子名ハ永幼字謙吾書を讀み和歌を詠し氣節ありて家聲を墜さす五右衛門正前條の志操敏惠勤功を特恩拔群の褒賞ありて家もますゝ繁榮なるを案外の疑ひを河北の百姓に得て不慮の災難に逢ひぬるは實に不幸にして哀憐すへき事を

けり 出 大 酒 田 家 傳 記 卷 之 四 傳 記 卷 之 四 傳 記 卷 之 四

今

町 往時荒涼ノ砂原ナリシヲ明曆三年ヨリ天和二年ノ間ヲ以テ漸次家作町

並トナレリ故ニ明曆圖ニ町名ヲ記セズ天和三年巡見使御用覺書ニ「今町一丁家數三十五軒」ト見ユ

(酒田町三組古控)今町者明曆三酉年より天和貳成年迄追々家作始申候觀音堂並別當滿藏院ハ傳馬町外レ砂山に引移リ其後追々家作出來申候

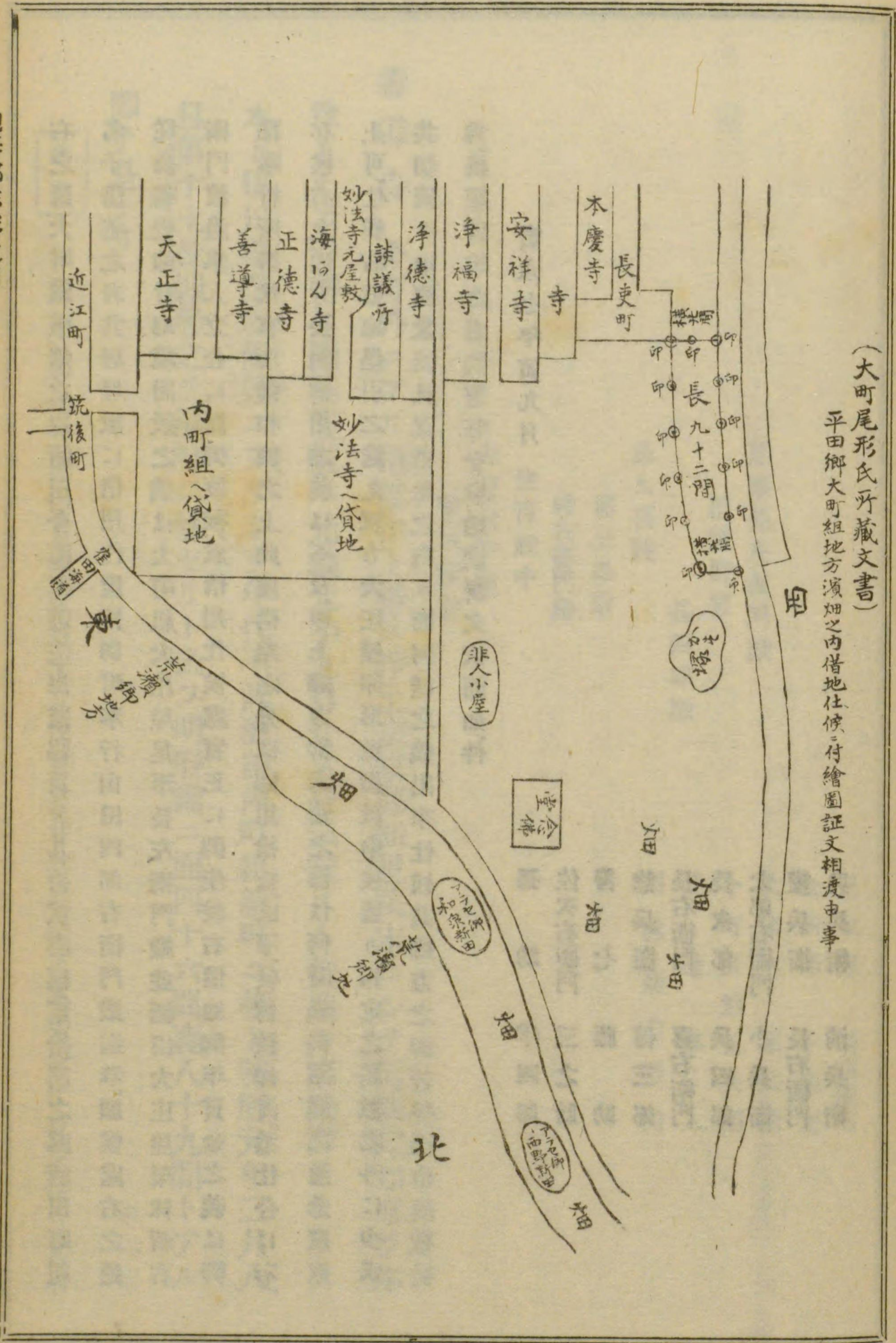
其地傳馬町ニ接近シ秋田街道ニ當ルヲ以テ自ラ茶屋渡世ノモノコ、ニ住シ其名諸方ニ知ラレ終ニ酒田町三遊處ノ一トナレリ寶永二年町端ノ東西廿間余ノ空地ヲ同町借宅廿一人ニ割賦シ町並トナセリ

(松平家御用留)寶永貳年十月朔日

酒田今町之末先年風除申付候垣之内西東明地貳拾四五間御坐候此處町屋に仕候得ば五六軒にも罷成候今町之義は秋田へ之道筋に候へば明地に仕候而は掃持等見苦御坐候町屋に相成候へば御役も相勤可申由願之書付今町五人組頭次郎兵衛四右衛門次右衛門太兵衛善兵衛與十郎六藏源四郎勘右衛門肝煎儀右衛門連判を以奉願候

四郎右衛門へ委細相尋候處何之障も無御坐由申聞候に付願之通空地之處町屋敷に
 申付候右願書會所へ納置
 附札 今町空地同町借宅貳拾壹人へ無高下町屋敷に割渡候旨今日山田四郎右衛門
 の書狀を以申遣候十月十日
 同七年ニ至リ其北端平田郷大町組濱畑地方ニ於テ巾廿間長九十二間ヲ借り酒田
 町組各町名子借宅ノ輩ニ貸附シ家作セシム即チ字今町外ノ起原ナリ最近ノ調査
 ニ據ルニ全町 戸ヲ有セシニ明治廿七年震災後貸座敷營業ノモノ悉ク高野濱
 新町ニ移轉シ復々昔日ノ面影ナシ

平田郷大町組地方濱畑之内借地仕候ニ付繪圖証文相渡申事
 (大町尾形氏所藏文書)
 今



(大町尾形氏所藏文書)
 平田郷大町組地方濱畑之内借地仕候ニ付繪圖証文相渡申事

右之通大町組濱畑之内酒田今町來遊佐海道脇長サ九拾貳間幅貳拾間之處酒田町組
名子借宅之者共居屋敷に借用仕度旨御町奉行山田四郎右衛門殿迄奉願候處右之通
從公義被仰付地境間敷之義は大町組大庄屋尾形長左衛門殿並酒田大庄屋栗林新右
衛門渡邊隼人立合に而御渡被成借用仕候處實正に御坐候右借地御年貢金之義は御
郡奉行所御代官所御相談之上此度借地之分は御用捨被成下候旨被仰渡忝仕合に奉
存候右之地方公義御用之義は不及申上郷方御入用之節は何時成共繪圖之通急度返
上可仕候右借地墨引之處え双方大庄屋印形致指置申候通り相定之間敷之外に少成
共切廣ク申間敷候且又借地之内ニ而何様之義出來仕候共郷方之御苦勞掛申間敷候
爲後証借地之者共連判を以繪圖証文依而如件

寶永七年寅九月

孫 助 半四郎
佐次右衛門 三之助
善 七 藤 助
惣兵衛 傳三郎
長右衛門 喜右衛門
長次郎 兵四郎
太郎右衛門 小兵衛
權兵衛 長右衛門
與兵衛 清兵衛

尾形長左衛門殿
濱畑肝煎 甚四郎殿
長人百姓
喜三郎殿
佐左衛門殿
惣百姓中
大町村肝煎 宇兵衛殿
三太郎 助右衛門
金四郎 十兵衛
太郎次 權兵衛
今町肝煎 五兵衛
渡邊 隼人
栗林 新右衛門

善導寺 今町外ニアリ悟眞山ト號ス淨土宗京都知恩院末ニシテ阿彌陀如來ヲ本

尊トナス寺傳ニ開基及徹ハ元龜元年九月廿八日示寂スト創始ノ事歴詳カナラス
本ト田川郡黒森附近ニアリシヲ年代不詳酒田内町組新町ニ移シ明曆元年二月八
日第十七世迎譽之ヲ濱町ニ移セリト云フ明曆圖ニ面四十六間裏八十九間トアル
即チ是ナリ

參照

(錯薪編)善導寺開山及徹慶長十五戌正月廿八日卒ス其先數代有之候へ共不

詳故炭徹開山と云往古之境內田川郡ニ有之今に黒森村一村且家に候其後内町組
給人町元米屋町片町裏通に引越又々何年か當境内え移轉東禪寺右馬頭位牌有之
といへとも古記焼失して由緒不詳天和三年正月公義御書上候節浄土宗悟眞山善
導寺塔頭報恩院一ヶ寺有

(寺社奉行所留書)

覺

- 一 南表口四拾四間
- 一 北方四拾三間
- 一 東方八拾四間
- 一 西方八拾貳間
- 何茂六尺三寸竿

右者善導寺屋敷御坐候以前は同處新町與申處に御坐候處攝津守様御代只今之所
に替地被下置候由申傳候今度御尋に付申上候少茂怪敷儀無御坐矣若相違之義申
上候はゞ後日に御會議之上拙僧何様にも可被_レ仰付候以上

元祿十二年卯月

酒田浄土宗

善導寺

加判同處同宗

浄徳寺

寺社御役所

爾後ノ沿革文書ノ徴スヘキモノナシ享保四年本堂造替アリシガ寶曆元年三月廿
九日酒田大火ノ際堂宇悉ク烏有二属ス後チ庫裏ヲ造リ法要ヲ營ミ安永八年ニ至
リ本堂ヲ建立ス

(寺社奉行所留書)

享保五年亥六月御月番松平原右衛門殿

六月十日酒田善導寺本堂造立出來に付入佛供養來る十五日と十七日迄說法をも仕
度相届に付開届之段申付候

安永八正月拙寺本堂庫裏共廿九年以前未年御町方出火之砌類焼仕候處其後庫裏斗
漸造立仕本堂之儀は造立仕兼罷在申候依之今度且方共相談之上奉願候元本堂梁間
九間三寸行間九間三尺御坐候間元間敷之通當四月中ヨリ普請に取懸り造立仕度奉
存候中絶事故繪圖面とも差添申す両通共甚五兵衛殿へも入披見願之通被_レ仰付候事

文政六年十月八日本堂庫裏類焼ニ罹リ同年八月庫裏ヲ造立シ安政五年七月十日
第廿四世源亮假本堂ヲ建築セシガ明治廿一年六月現住源敬コ、ニ移轉セラル

(同上)文政六年未八月廿七日酒田善導寺願書且家三郎右衛門使常念寺ニ而拙寺義
午十月中酒田御町方出火之砌本堂庫裏共焼失仕候今度且中相談之上庫裏再建仕度
旨被_レ仰付候事

臺町 明曆圖ヲ案スルニ上下臺町ノ地方ハ悉ク砂山ニシテ町割人家ナシ明曆
二年ヨリ家作始り天和三年ニ至リ既ニ上下二町裏町二丁トナレリ

(明曆圖書入)臺町之儀者明曆二申年カ家作始り申候右之内肝煎小路といふ小名有
之屋敷割被_レ仰付候節肝煎一人え一軒屋敷ヲ無役地被下置下々屋敷と唱來候處享保

十三申年ヨリ同十八丑年迄之内右屋敷御引上ニ相成翌十九年寅六月町之位により御町用金之内ヨリ年々鳥目に而被下置候様被仰付今以下屋敷代とて被下置候
一(天和三年巡見使御用覺書)上臺町二丁同裏町二丁家數百二十四軒下臺町二丁同裏町二丁家數八十一軒

或ル説ニ中臺式右工門町奉行在勤中町割セラレシヨリ苗氏ノ一字ヲ取り町名トナスト是非ヲ知ラス但中臺ハ寛文九酉年十二月ヨリ延寶元丑年マテ勤役セシモノナリ

日枝神社 下臺町ニアリ俗ニ下山王宮 上山王宮ニ對ス ト稱ス本ト大己貴命ヲ祭ル中

世以後本地佛釋迦如來ノミヲ安置シ神体ヲ奉齋セザリシニ慶長八年神体ヲ其南ニ奉安シ之ヲ本宮又南殿ト稱シ從來ノ本地佛ヲ北殿ト稱シ惣ヘテ之ヲ山王兩社ト稱セリ是ヨリ北殿ヲ日吉山王權現ト云ヒ南殿ヲ日吉山王宮ト云ヒシガ明治三

年神佛分離ノ際日枝神社ト改メ更ニ大山昨命大己貴命胸形中津姫命ノ三神ヲ祭ル

建物 本殿 二間ニ三間瓦葺 拜殿 九間ニ十間同上 樂殿 間四方瓦葺但明治廿七年劇震ニテ顛倒 隨神門 明治卅六年再建

境 内 六千八百十余坪

祭 日 五月二十日本ト陰曆四月中ノ申日ヲ以テ行ハレ慶長十四年ノ創始ニ係レリ當初ノ祭式ハ文書ノ徴スヘキナシト雖モ本間家所藏ノ文書ニ寛永二年及元祿八年ノ神事供物書アリ左ニ全文ヲ掲載ス ○左旁ニ白圈ヲ附スルハ龍巖寺藏本ヲ以テ校補セルモノナリ

寛永貳年

山王兩社神事供物控

表紙

四月吉日 本 宮

來當御祓納置供物之事

- 一 大方 貳狀 一 あがし 貳丁
 - 一 御酒 壹具 一 白米 但貳膳ニシテ六升
 - 一 代物 此代百文ニ口十五文ツ、右米上ニ 六百文
- 右之分壹人之手前調置可有之候

常^〇人^〇衆^〇ヨ^〇リ^〇月^〇々^〇上^〇ル^〇御^〇酒^〇之^〇事^〇

一あかし 貳丁 一御酒 壹具

右之分大年晚正月朔日初申十日ノ松同十五日二月朔日同十五日三月朔日同十五日四月朔日初申同十五日以上十三度壹人之手前ヨリ上り申候分

御宮前ニ立申御さかき供物

一長木 貳丁 一大方 貳狀
一あかし 貳丁 一御酒 一具
一白米 五升 一糸 五かけ
一代物 三百文

右之分御中ヨリ出方之分

四月酉ノ日立申候申迄十二日ニつたへ申候

當前人衆家前ニ御はけ立供物

一長木 壹丁 一大方 貳狀
一あかし 貳丁 一白米貳膳ニテ 六升
一代物右之米上ニ 四百文 一御酒 壹具
一糸 三かけ

右免々手前ニ調置可有之候

一七日ニつもり寅ノ日立申候

當人衆家前ニ而十二段供物之事

一かみ 五束 一あかし 貳丁
一白米 壹升 一あふき 拾貳本
一代物 五百文 一糸 壹組
一御酒 壹具 一帯 壹筋
一つゝみ初尾 拾貳文ツ入 新錢參文ツ入

右之供物免々之午前調置可有之候

同日御神樂初尾

一〇〇〇〇 貳せんニシテ 六升 一代物 右之米上ニ 四百文
一〇〇〇 白米

右之分免々手前調置可有之候

御宮籠晚朝供物之事

一御はち 口壹尺貳寸高同斷 貳ツ 一玉瓶 白米ニ而酒作り入テ 貳ツ
足六寸高サ 貳ツ

一 貳番赤飯入又次朝入テ 貳ツ 一御座 内壹枚のつとう分 五枚

一〇〇〇〇 一あかし 貳拾四丁 一御酒 拾貳具

一 かんむり 六人ツニシテ 四筋

右分御中ヨリ出方

御宮祝言供物之事

一 小竹 貳本 一大方 貳狀

一 あかし 貳丁 一御酒 壹具

一 白米 壹升 一代物 五百文

右之分御中ヨリ加にて出て申候

同御神樂御初尾

一 白米 六升 一代物 四百文

右之分御中ヨリ加ニ而出方

御宮下向ニ九度舞之事

一 かみ 五束 一あかし 貳丁

一 あふさ 拾貳本 一代物 五百文

一 白米 壹升 一糸 壹組

一 帶 壹筋 一包初尾 但拾貳文ツ入テ 拾貳包

右之分御中ヨリ加出方

當前衆御はけ引供物

一 あかし 貳丁 一御酒 片々

一 白米 三升 一代物 貳百文

右之分免々手前ニ調置可有之候

當人衆ヨリ口口ニ子供持出ル御幣供物之事

一 小竹 壹本 一大方 壹狀

右之分免々調可被遣候

○此下ニ「當人衆之事」ト題シ寛永二年ヨク元祿七年マテノ當人衆氏名ヲ記録セリ此ハ寛永後年々書加ヘタルモノナリ

元祿八年別當

山王神事祭禮當舞供物帳

乙亥 四月吉日 高大輔

表紙

來當引納申供物之事

一 大方 貳帖
 一 御酒 貳升入 壹具
 一 錢 さらす錢六百文代 九十文

一 あかし
 一 白米

貳挺
 六升

右之供物御手前ニ御調置可被下候

大歳之晩月々上ル御神酒之覺

一 神酒

壹具

一 あかし

貳挺

大歳之晩 元日 初申 松之晩 十五日 二月朔日 十五日 三月朔日 三日 十五日

四月朔日 初申 十三度上リ申候

右之御神酒十三具あかし廿六丁代直し壹貫宛一人御手前ヨリ毎年極月八日前ニ上リ申候

御宮前ニ御鉢立申供物之事

一 長木 貳本
 一 錢 四拾五文
 一 白米 六升
 一 いと 五掛

一 大法
 一 御酒
 一 あかし

貳狀
 壹具
 貳挺

右之供物御兩人御中ヨリ御調可被遣候

當前へ御鉢立申供物之事

一 長木 壹本
 一 あかし 貳挺
 一 錢 六拾文
 一 いと 三掛

一 大法
 一 白米
 一 御酒

貳狀
 六升
 壹具

右之供物面々御手前ニ御調置可被成候

御獅々十二段供物之覺

一 ちり口 五東
 一 扇子 拾貳本
 一 おび 但長八尺 壹筋
 一 包初尾 十二包
 同御神樂初尾之覺
 一 白米 六升
 一 あかし 貳挺
 右面々御手前ニ御調置分

一 白米 壹升
 一 錢 七拾五文
 一 いと 但し貳百め 壹組
 白米貳升五合ヲ十二ニ包錢三文宛入テ

一 酒 壹具
 一 錢 六拾文

御宮籠之晚朝供物之事

- 一 御はち 貳ツ
- 一 赤飯入テ又次ノ朝入ル 貳ツ
- 一 あかし 廿四挺
- 一 かんむり 但六尺五寸 四筋
- 一 同御宮のつとう供物之覺
- 一 大法 貳帖
- 一 酒 壹具
- 一 錢 七拾五文
- 右之供物御兩人御中ヨリ出方
- 御宮下向九度舞供物之覺
- 一 ちり口 五束
- 一 いと 壹組
- 一 錢 七拾五文
- 一包物尾 壹包ニ錢三文宛入テ 十二色
- 御宮御神樂初尾之覺
- 一 玉瓶 壹ツ白米貳升入テ 貳ツ
- 一 ござ 内一枚のつとうの分 五枚
- 一 酒 但大樽ニ而遣流シ 十貳具
- 一 あかし 貳挺
- 一 白米 壹升
- 一 小竹 貳本
- 一 あかし 貳挺
- 一 扇子 拾貳本
- 一 おび 但八尺 壹筋
- 一 白米 壹升

一白米

六开

一錢

六拾文

右御兩人御中ヨリ調出方

祭禮ニ子供持御幣紙

一大法

壹帖

一小竹

壹本

一うしべり

壹帖

此通面々御手前ヨリ御持參可被成候

當舞御鉢引納申供物之覺

一白米

三升

一あかし

貳挺

一錢

三拾文

一御酒

かた／＼

此供物面々御手前ニ而御調置可被成候

一赤飯直し壹人御手前ヨリ金三兩宛御渡し被成候

一御輿もり壹人御手前ヨリ四人宛出申候

一御輿休竹長サ四尺壹人御手前ヨリ貳本宛出申候

一當直シ金壹人御手前ヨリ貳步御神事祭禮前ニ御渡し可被成候

一振舞直し金壹人御手前ヨリ壹步ヲ祭禮前ニ御渡し可被成候

一神事祭禮之内ニ當舞忌有之候ハ、當直し金壹兩貳步壹人御手前ヨリ出申候

右之通神事無相違御勤可有之者也

元祿八年乙亥四月十五日

別當 高大輔

右ハ南殿別當齋藤家ヨリ當人衆ヘ神事ノ供物用途ヲ催告セルモノナリ

北殿別當不
動院ノ分ハ

傳ハ前後ニ通ノ文書ヲ對照スルニ寛永二年ヨリ元祿二年マテノ祭式ハ大差ナキ

ノミナラズ元祿以後維新前ニ於ケルモノモ其間民力ノ消長ニ依リ多少ノ損益ナ

キニシモアラスト雖祭式ノ大体ハ變更セラレズ依然繼續シ來レルヲ以テ之ヲ推

スニ寛永二年ノ法式ハ即チ慶長十四年創始ノ祭儀ニシテ永ク之ニ率由セラレシ

コト自ラ明カナリ

抑々神事ハ當人ヨリ成立ス當人ハ頭人ノ假字ニシテ氏子ノ神事ニ勤仕スルモノ

ト云ヒ其家ヲ頭屋ト云ヘリ之ヲ撰定スルニハ何如ナル方法ヲ以テセラレシ

ヤ今得テ知ルヘカラスト雖蓋御闈ニ依レルモノナラン當時八人ノ頭人アリテ四

人ハ南殿ニ屬シテ雄獅子ヲ奉シ四人ハ北殿ニ屬シテ雌獅子ヲ奉シ總ヘテ神事ニ

係ル前後ノ費用ハ悉ク之ヲ支出セラレタリ

參照

案スルニ日次記事二月ニ上加茂氏人東西兩家各々會年ノ頭屋ニ於テ響應ヲ

設ケ……凡民間神社ニ詣ル者親戚朋友心ヲ合セ其尊崇する處の神社縁日毎月輪轉

其家ニ聚る是を頭人といふ錢或は銀を出して之を貯ヘ以テ供物とは又路資とす……

社家其家に行き休憩は主人酒食を饗し湯沐を供し然る後ち其社に詣るトアリ當社

ノ頭屋頭人モ亦之ニ倣ヘルモノニシテ所謂「講」ノ意義ヲモ包含スルニ似タリ

而シテ神事ノ次第ハ四月酉ノ日酉ノ刻ヲ以兩別當社頭前ニ御榊御榊トモ稱スヲ立ツ

之レヲ御宮前御榊立ト云フ即チ神事ノ始メナリ寅ノ日後チ辰ノ日ヲ用フ頭人ノ宅前ニ

御銚ガホコヲ立テ其下ニテ獅子頭フシカシラ十二段ノ執行アリ未ノ日ハ宵宮ニシテ兩別當頭人衆

社殿ニ參籠ス之ヲ御宮籠ト稱ス此夜明年ノ頭人ヲ定メ御銚ヲ其宅ニ渡ス翌申ノ

日ハ神事ノ正日ナレハ社殿ニ供物ヲ獻ジ祝詞勤行アリ此時神輿ノ渡御ナシト雖

トモ上掲寛永二年ノ供物書ヲ案スルニ九度舞ノ供物及ヒ頭人衆ノ子供ガ奉持ス

ル御幣ノ料物ヲ記スレハ各頭屋ヨリ行列ヲ作り社頭ニ參向セラレシモノト見え

タリ成日來頭人ニ渡セル御銚ヲ引ク之ヲヲイトウオハライオサメ來當御祓納ト云フ是レニテ神事全ク畢ヘタルモノナリ

慶長ヨリ寛永ニ於ケル神事ノ次第大略斯クノ如シ以テ其祭儀ノ簡易ニシテ用途モ亦輕少ナリシヲ見ルヘシ寛永十五年町奉行ヨリ當人衆ノ町役ヲ免セラル

(寛永二年山王宮神事供物書附記)寛永十五年五ノ丁惣右衛門みのや助九郎砂山彌吉壹ノ丁作藏此四人當之時御町家役御免ニ罷成申候御町奉行石原孫右衛門殿

戊寅十二月十五日

正保三年ノ神事ヨリ東禪寺山王宮ノ神木ヲ遷シ祀リ宮附修驗舊記ニ據ル同四年ニ至リ大

ニ神事ニ莊嚴ヲ加ヘ酒田城代町奉行ヨリ神馬ヲ出シ儀仗トシテ鑓鐵炮弓ヲ貸附シ且東禪寺分ノ富家ヲシテ神馬宿ヲ勤仕セシム實ニ是レ御葛籠馬宿ノ嚆矢ナリ爾來酒田三組ノ大神事トナリ漸次盛大ニ赴ケリ

(山王當舞扣不動院分)正保四年ヨリ山王ノ御祭初ニ候但四月十五日ノ祭ニ候御城ヨリ鑓鐵炮弓御奉行所迄被指添候

(葛籠馬宿勤帳)酒田之鎮守山王兩社祭礼之節古來龜ヶ崎内町組ヨリ御供揃差出候儀若正保之比乙坂六左衛門殿御町奉行之節右祭禮相始り候に付當組に而其節々々御城内ノ金瓢御長柄五筋御鐵砲五挺拜借並御城代所御馬指出其外拜借之品々有之且御町御奉行所御馬被指出候儀茂全當組行列之内相連候ニ付万端危畧無之様申傳候右ニ付葛籠馬宿之儀者組方成内之者相撰申付候儀ニ而相勤候家柄之者ハ永久名譽云々

○當初葛籠馬宿二軒ナリシヲ元祿八年ヨリ一軒トナレリ事圖帳ニ詳カナリ

慶安元年初メテ神輿ヲ調進ス

(寛永二年神事供物書附記)慶安元年戊子此年御神輿初ル御町奉行乙坂六右衛門殿元茂殿へ三人年寄申上候處一段之事ト被仰候處十二日之晚少指合出來仕相やみ申候處惣町之衆六左衛門殿へ御わび申其外西ノ長兵衛殘リ罷在色々申上候へバ池田惣右衛門殿○燈屋ハリ同心被成鶴岡へ登リ御奉行所ニテ御申被成候へバ一段之事ト被仰初ル也

是レヨリ先キ吹浦大物忌神社ノ獅子頭モ行列ニ加ハリシガ寛文十一年ニ至リ之ヲ廢止セリ

(同上) 寛文十一年ヨリ吹浦大夫不參候

寛事大社考ニ詳カナリ同書ニ據ルニ當時吹浦ノ社家獅子守等危服ヲ差テ出酒ヲ
悦ハサリシガ原因トナリ終ニ廢絶セシト云ヘリ但吹浦ノ御鉾獅子頭酒田祭禮
ニ預リシ事由詳カナラス盖吹浦社僧ハ當時天臺宗タリシニ依リ山王宮ヲ尊敬
シ自ラコ、ニ至レルモノナルハシ

元祿七年町民疫癘ノ爲メ四頭ヲ減シ民力ヲ休養セシム

(同上) 元祿七年甲戌四月十三日之晚燈屋惣右衛門殿へ栗林新右衛門殿渡邊隼人殿
貳人先立ニ而兩別當被寄被仰渡候今度御町こんさうニ付小肝煎共四人ノ者共致相
談來當ヨリ八當ヲ四當ニ致度と被申候則かゝや與助殿風引被成御子息も御出一所
ニ相談被致候又々御町よろしく罷成候ハ、右之八當致可申ニ付是非ノ四當ニ可
仕由ニ而如此ニ候

正徳二年社殿ヲ現境内ニ造替後東禪寺山王宮ヲモ南殿ニ勸請シ酒田全町ノ大祭
禮トナセシヨリ益盛大ノ神事トナレリ

宮附修驗舊記ニ據ル
全文ト項ニ掲載ス

參照 (酒田町年寄御用留) 元文四年未

當年山王神事聖物類年ヨリ勝れて大きく雨天にては仕廻惡敷及難儀候依之來當ヨ

リ其心得致し榎物手輕仕急に雨天に成候ても大勢之者共難儀不致候様に可仕候然
共面々一代一兩度相勤候故少々入用相増候而も不苦存候者も可有之候勝手を以致
し候者臺輪四ツ之外増車成共いたし兎角引渡之節不致難儀候様可致旨御役所ヨリ
御内意被仰聞四月十六日來當之者へ申渡ス

天明三年本間四郎三郎殊ニ當社ヲ崇敬シ自ラ施主トナリ社殿ヲ造立シ規模ヲ擴
張シ神事ヲ莊嚴ニナシ其祭儀ハ莊内第一ノ壯觀トナリ名聲遠ク他邦ニ鳴リ數十
里ヲ遠シトセズ老幼群集シ爲メニ全町ノ利潤トナルモノ亦少カラズコ、ニ天明
八年ノ祭禮行列圖ヲ挿入シ當時ノ盛觀ヲ想見セシム

寛政十三年四月市中不景氣ノ爲メ二頭ヲ減シ二頭トナル

山王當
舞扣

爾後之レヲ繼續

シ維新ノ際ニ至リシガ明治三年四月廿二日令シテ頭屋ヲ廢止セシム

野附氏
御用留 同日

年寄大庄屋各肝煎ニ命シ冀望ノモノハ費用ヲ節減シ目論見封書ヲ差出サシム是
時ニ當リ人情世態一變シ獨力頭屋ヲ勤仕セントスル志願者其人ナク三百年來繼
續セル有名ノ祭儀モ絶エサルコト縷ノ如キニ至レリ茲ニ下村與次兵衛ナルモノ

アリ深ク之ヲ慨キ自ラ志願アリト稱シ同年九月獨力ニ當テ兼勤セシコトヲ出願
シ將ニ絶エナントスル祭式ヲ執行セラレタリ實ニ是レ明治四年四月十三日ノ神
事ニシテ下村ノ篤志ハ當社ノ歴史ニ特筆スヘキモノナリトス

(野附氏御用留)來ル末年ヨリ神事宿之儀以來被爲廢止候併市中之者明年ヨリ如何
して入費不相掛舊來之通神宿相勤度之趣意を以相應之日論見有之候ハ、當廿七日
迄各目論見書封印いたし差出候様御沙汰ニ付各扱下に不洩様可被申達候以上
八 (明治三千年)

四月廿二日

大庄屋 寄

三町 肝煎

覺

- 一金五拾兩 神主社人獅子守松 明講中宮番手當 一同貳拾兩 山代
- 一同貳拾兩 同斷かせ履賃 酒手とも見込 一同五兩 同斷中表木損料 繩代とも
- 一同十五兩 臺輪引履賃手綱 申掛とも見込 一同五兩 臺輪損料

- 一同五兩 神輿昇六人手間 酒手とも 一同貳拾兩 人形衣裳諸掛見込
- 一同七兩 蠟燭取合 一同十五兩 綱引損料
- 一同壹兩貳分 燈籠代廿二 一同四十兩 赤飯代
- 一同六兩 神宿中飯米 一同十五兩 酒壹石代見込
- 一同拾兩 肴代 一同四兩 味噌醬油見込
- 一同五兩 炭薪代 一同拾兩 野菜代
- 一同貳兩 鹽紙用紙見込 一同五兩 丁持坐頭町離非人

金貳百九拾貳兩

神宿飭之事

一當屋開當日迄三日三夜限リ
 一町内進物花無之事
 一笠鉾高サ臺輪上貳丈限リ之事
 右者前年ヨリ鉾引納迄祭禮引納迄諸雜費見込如此ニ御坐候

乍恐以書付御願申上候

當夏中日枝大神宮御宿目論見之者封書を以可奉差上候様被仰達候間私儀志願御坐候ニ付親類今町與平治傳馬町與次兵衛の兩當とも來ル末年御神宿相成丈質素爲仕相勤申度其節封書を以奉願置候へ共于今御申付も無御坐候仍而奉願候も恐入候得共右御神宿明年ニ相成差懸ケ被御申付候而も迎も手仕舞も行届兼候ニ付神宿願立之儀御免被成下度乍恐此段以書付御願奉申上候以上

午九月

染屋小路

與次兵衛

十月三日付

願之通聞届

肝

煎

清五郎

獨力頭屋ヲ勤仕スルノ慣例ハ既ニ廢絶セリ向後社頭ニ於テ簡易ナル祭典ヲ執行シ舊來ノ祭儀ヲ全廢セシカ然レ其祭儀ハ著名ノ神事ニシテ遠近來觀スルモノ頗ル夥シク爲メニ金錢ノ市中ニ注入スルモノ幾ント万余ニ上リ直接間接酒田全体ニ利益ヲ與フルコト少カラズ本ト祭禮ハ主トシテ神德ヲ報賽スル所ナレバ必スシモ誇大ヲ要スヘキニアラスト雖レ之ニ因リテ金融ヲ活潑ナラシメ町民ヲ利スルコト斯クノ如シ必竟舊式ノ存廢ハ全町ノ得失ニ關スルヲ以テ何人モ其繼續ヲ冀望セサルモノトテハナカリキ

是ニ於テ町民相議リ明治五年ヨリ營業組合ヲ以テ輪番神宿ヲ勤仕セラレ同十三年ニ至リ更ニ各町組合神宿トナレリ而モ當祭札ハ巨額ノ金圓ヲ要スルヲ以テ組合勤仕ノ方法向後非常ノ事變ニ遭遇スルアラバ町民祭資ノ負擔ニ堪ヘス或ハ祭儀ヲ廢止スルナキヲ保スヘカラズ本間光美夙ニコ、ニ見ル所アリ永續資本積立ノ方法ヲ計畫シ明治十九年五月當氏子惣代本間光訓白崎良彌上林熊記郷社日枝神社氏子惣代佐藤九郎右衛門外及ヒ各町ノ代表者ヲ本郡議事堂ニ集會セシメ其議決ヲ以テ資本金五千圓内ハ本間家ノ寄附ニ係レリヲ積立テ之レヨリ生スル利子ヲ兩日枝社ノ祭典費ニ支出スルノ方法ヲ確定セラレ爾後之レニ率由シ以テ今日ニ至レリ願フニ廿七年ノ劇震ハ近古末曾有ノ大變ニシテ酒田ノ過半焦土トナリシニモ拘ハラス例ノ如ク神事ヲ舉行シ得タルハ之レガ資本金ノ存スルニ賴レリ神事ノ沿革ハ既ニ斯クノ如ク而モ祭儀ノ大体ハ慶長十四年以後大ナル變更ナカリシト雖其間多少ノ異同ナキ能ハス蓋是レ時勢ノ然ラシムル所ナレバ今日執行シツ、アルモノモ數百年ヲ經過シタランニハ恐ラク時勢ノ變遷ニ伴ヒ新陳錯雜

終ニハ舊式ヲ町民ニ忘却セラル、ニ至ラン故ニ左ニ維新前實行セル祭儀ヲ叙シ
異日ノ參考ニ供ス

上ニ述フルガ如ク神事ハ頭人ヨリ成リ其之ヲ撰定スルニハ先ソ酒田町組ノ町民
ニシテ資力ノ勤仕ニ堪フルモノ若干名ヲ預選シ四月中ノ申大祭ノ前夜兩別當神
前ニテ御鬮ヲ以テ二名ヲ抽撰スルモノトス既ニ定マレバ直チニ御鉢獅子頭ヲ其
家ニ渡シ御鉢ヲ假柱ニ奉シ十二段ヲ舞ハス之ヲ「頭渡シ」ト云フ此御鉢ハ大祭後
一日ヲ隔テ戌日ヲ以テ之ヲ社頭ニ納ム之ヲ「鉢引」ト云フ響應アリ斯クテ四月酉
ノ日兩別當各御鉢ヲ社前ニ立ツ是レ神事ニ入ルヲ表スルナリ寅日早朝兩獅子
頭「御宮邊」ノ儀式ヲ修メ龜ヶ崎城内及ヒ町奉行所ヨリ次第ニ氏子ニ渡ス辰ノ日
兩別當各威儀ヲ整ヘ御鉢獅子頭ヲ奉シ頭屋ニ下向シ御鉢ヲ宅前ニ立テ十二段ヲ
舞ハス畢テ響應アリ之ヲ頭前鉢立ト稱ス總ヘテ儀式鄭重ニシテ響應ノ如キハ山
海ノ珍味ヲ重ネ善盡クシ美盡クシ今日ヨリ之ヲ觀レハ實ニ意想ノ外ニアリ是レ
ヨリ先キ頭屋ニ於テ豫メ山鉢各一臺ヲ便宜ノ處ニ製作セシメ且屋內ニハ立山俗

頭屋飾
ト云フ

ヲ飾リ長押天井ニ松櫻等ノ作り物ヲ裝ヒ之レニ彩燈短冊疊鶴ヲ吊シ山鉢
ニ載スヘキ人形ヲ安排シ且親戚知人ノ其觀ヲ壯ンニセントシテ贈ル所ノ造花柱
懸置飾等處狹キ迄布置セラレ以テ衆庶ノ縱覽ニ供ス是レ皆意匠ヲ練リ工風ヲ凝
ラシタルモノニシテ趣向斬新人目ヲ悅ハシメ夜ニ入レハ燈ヲ点シ光彩相映シ一
層ノ美觀ヲ添フ

未ノ日ハ御鉢獅子頭ヲ宮ノ浦ニ渡シ夜ニ入り前記ノ「當渡シ」アリ翌申ノ日ハ即
チ大神事ナリ兩別當頭人ヲ始メ行列ニ加ハルヘキモノ悉ク社頭ニ參集シ山鉢笠
鉢等ハ順次街頭ニ出テ神輿ノ渡御ヲ俟ツ既ニシテ神輿ハ警固ニ擁セラレ正門ヨ
リ中町通ヲ渡リ檜物町ニ至ル頃ハ時正午ニ屬セリコ、ニ行列ヲ解キ晝飯ヲ喫シ
再ヒ列ヲ立テ米屋町ヨリ給人町片町ヲ經町奉行所前ニ至ル此時頭人草履取花奴ハナヤツ
ヲ從ヘ奉行所ニ式臺ノ儀アリ當時士民ノ懸隔甚シキ封建時代ニ於テ一平民ノ身
ヲ以テ公ケニ從者ヲ具シ奉行所ノ門ニ出入スルハ當人其物ノ最モ光榮トスル所
ニシテ神事ノ爲メニ獨力數百金ヲ投スルモ此刹那ノ間ハ眞ニ千金ノ價值アリト

自ラ神事ヲ勤メシ古老ハ得々トシテ編者ニ語ラレキ夫ヨリ内町通り本町ニ出テ
 本間家ニ於テ御輿受ノ儀式アリ順路秋田町傳馬町ヲ經裏門ヨリ社頭ニ還御シテ
 二段ヲ執行ス之ヲ九度舞ト云フ畢テ社前頭屋前ノ御鉢ヲ撤ス是ニテ神事ノ終リ
 タルヲ表スルナリ左ニ文久元年四月十五日祭禮ニ於ケル行列ノ次第ヲ野附御用
 留ヨリ抄出シ參考ニ供ス宜シク上掲ノ天明八年行列圖及ヒ現存ノ笠鉢等ニ參照
 シ古今ノ異同ヲ知ルヘシ

山王祭禮行列之次第

職傳馬町 辨財船 獵師町 職上本町 笠鉢 鏡谷太郎吉同 上林熊記同 本間正七郎
 同 三十六人 鍾 魘 四之丁 職 五之丁 同 寺町 笠 鉢 下内匠町 同 臺町 西王母
 上内匠町 雌獅子 笠 鉢 六孫王 新井野嘉右衛門 鷹 匠 兩中町 臺 花 大工町 檜物町 桶屋町
 猿田彦命 秋田町 神 樂 肴町 雄獅子 笠 鉢 周武王 藤屋傳之丞 早乙女 鍛冶町 朱之
 丸 米屋町 母衣武者 米屋町組 日之丸 笠鉢 内町 御供揃 内町組 花 馬 齋藤清太郎
 御神輿 齋藤筑前 御神輿 不動院 通離子 今町 同 船場町 以上

山鉢引終レバ丁壯蟻附争フテ之ヲ剥取り復々隻紙ヲ留メズ幾多ノ意匠ヲ凝ラシ
 巨額ノ金ヲ投シテ作りタルモノ瞬間之ヲ毀タシムルハ頗ル無益ニ属スト雖古來
 之ヲ以テ祭儀ノ特色トナセリ

由 緒 年代不詳江州志賀郡坂本山王宮ヨリ勸請スト本ト田川郡酒田ニアリテ其
 産土神タリシヲ町民當處ニ移轉シ酒田町組ヲ成立スルニ及ヒ當社モ亦遷シ奉ラ
 レ西濱字御富士山附近ニ鎮坐アリシガ慶長六年東禪寺城主志村伊豆守光安ノ沙
 汰トシテ町家近邊ニ移シ奉ラル其位置ハ詳カナラスト雖盖今ノ荒町地方ナリ此
 時東禪寺城内山王宮モ今ノ山王堂町ニ鎮坐アリテ東禪寺分内町米屋町兩組ノ鎮守トセラ
 レタルハ當社ノ西濱ヨリ荒町地方ニ遷シ奉ラレシハ即チ酒田町組ノ鎮守ト定メ
 ラレタルモノナルヘシ

(吹浦佐々木氏藏山王宮々附修驗舊記)

往古酒田は最上川を隔て南北に有り川の北を飽海郡酒田といふ家數百四五十軒
 川の南を田川郡酒田といふ家數千軒余宮の浦のつきに於て飯盛山の西にあり鎮
 守は日吉大權現慈覺大師の開基にして佛像を作らせ給ふにや
佛像は座像の釋加如來也新しき
 佛体なれば後人の作なるへし

跡を岬山に止め給ふ其地卑濕にしてしばしば洪水の患ひあり官家の許容ありて慶長四年に飽海郡酒田の西濱に総引移に相成り飽海郡酒田の鎮守は富士權現なり其頃田川郡酒田の鎮守をも遷し奉り後には今の荒瀬上小路の角に遷座せり其後の遷座の嵐七左工門云人住居せり慶長十四年四月中ノ申日山王宮の祭り始り其後正保三年より毎年に御城内の正一位日吉神社の神木を神木は天子より給ふものなり遷して祭禮いたせり今の山王宮を松林に遷宮のをり日吉神社をも永く勸請し奉り三町一統の鎮守として漸々に大祭とはなれりけり

(別當不動院安政二年四月書上)酒田御町鎮守山王宮往古砂山藤ヶ森與申所ニ有之尤小社ニ而在之其後由來有之由ニ而御町方鎮守與奉仰慶長十四年四月中之申ヲ以御神事始リ其時分別當不動院尤別當屋敷只今見受候處あら町五十嵐七郎左衛門屋敷續與申事ニ御坐候右之印ニ候哉七郎左衛門方々明和ノ比迄正月明松之節升形與申笹付之竹貳本ツ奉納云々

而シテ當社ハ本ト大巳貴命ヲ祭りシガ下掲明和八年祭禮記參照スヘシ中世以後更ニ本地佛釋迦如

來ヲ安置シ別當不動院之レニ奉仕シ別ニ神体ナカリシガ慶長八年酒田町長人上

林和泉永田讚岐等相議リ山王ノ本体大巳貴命ノ靈代ヲ其左方ニ奉安シ之ヲ本宮ボングウモトミヤ

ト稱シ東禪寺山王社家齋藤某ヲシテ兼テ之レカ別當タラシム實ニ是レ當社南殿

ノ草創ニシテ之レニ對シ從來ノ本地佛ヲ安置セルモノヲ北殿ト稱シ當時社殿ハ東向ナリ故ニ左

右ノ方位ヲ東北ニ取リテ爾云 惣ヘテ之ヲ山王兩社ト云フ

(酒田町長人粕谷氏所藏文書)

酒田鎮守山王宮古來ハ上杉景勝公御代ニハ西の大濱おふじ山に候處其節村上城主本莊繁長龜ヶ崎城代川村彦左衛門右兩人度々代參御坐候其後百三年以前慶長六辛丑最上出羽守御手ニ入城代志村伊豆守ハ酒田鎮守山王宮被相尋三奉行寺内近江齋藤筑後高橋伊賀右山王宮西の濱に候ては町之鎮守ニハ遠方ニ付町近所致建立候様被仰付即別當不動院ハ社地を見立いまの社地二十間四方願下し建立致候元祿七年迄百三年ニ成ル翌々卯年慶長八年上林和泉永田讚岐兩人三十六人頭ニ而山王御神体建立也伊賀守先祖本宮別當致候

天和三年亥年山口三郎左衛門殿御町奉行御勤之節山王宮建立之儀被仰出候小黑七左衛門殿寺社奉行御勤之節と被存申候宮附世話人西野七兵衛松田又左衛門兩人
○此記錄ハ明治卅三年佐藤良次が粕谷家ニ就キ文書採集ノ際新ニ發見セルモノニ係リ殊ニ年號ヲ明記セサルモ「元祿七年迄百三年ニ成」ノ文字アルノミナラス「伊賀

守「ハ當社南殿別當齋藤大隅ノ先人ニシテ名ヲ清次ト云ヒ寶曆十年七月四日ヲ以テ
 歿セラレ即チ元祿ヨリ寶曆ニ亘レル人ナレバ此書ノ元祿七年ノモノナルコト自ラ
 明カナリ當社ノ事跡ヲ記スルモノ一ニシテ足ラズト雖モ未タ之レヨリ古ク且珍ナル
 ヲ見サルナリ就中最モ注意スヘキハ酒田町組ノ鎮守トシテ西濱ヨリ町家附近ニ迂
 座ノ事歴ト本宮即チ南殿草創ノ由緒ナリトス東禪寺山王宮ノ城内ヨリ今ノ山王堂町地
 方ニ移シ東禪寺分町家ノ鎮守トセラレシ時代ハ彼社ノ記録ニハ單ニ最上家領分ト
 云ヒ其年號ヲ逸シ不明ニ屬セシガ此記録ニ據リテ慶長六年志村家ノ取計トシテ當
 社ヲ酒田町附近ニ迂サル、ト同時ニ彼社モ亦東禪寺分ニ移サレ共ニ同年ノ事歴ナ
 ルヲ知リ得ヘキナリ且當社ト東禪寺山王宮トノ關係ハ古來異說アリテ或ハ云フ當
 社ハ彼社ヨリ勸請スル處ナリト終ニ本宮ノ稱呼ヲ以テ彼此本未ヲ相爭フニ至レリ
 然モ此記録ニ據レバ所謂本宮ノ名稱ハ彼社ヲ云ヘルニアラスシテ正シク當社ノ南
 殿ヲ稱スルモノナリ後出ノ南殿ニ本宮ノ稱スルハ頗ル不穩當ニ似タリト雖左ニア
 ラス山王宮ノ本体ハ大己貴命ニシテ本地佛釋迦如來ヨリスレバ本宗ナリ根元ナリ
 本体ヲ安置スル南殿ヲ本宮ト稱スルハ事理當然ニシテ名實相適セルモノト謂フヘ
 シ故ニ寛永二年山王兩社神事供物書ノ南殿ニ屬スルモノ表紙ニ「本宮」ト記スルハ
 體カニ南殿ヲ本宮ト稱セルモノ加之此記録ニ「伊賀守先祖本宮別當致候」トハ神体

ヲ安置セル本宮ハ東禪寺山王社家齋藤伊賀ノ先祖ヲシテ別當タラシメタルノ意義
 ニ外ナラズ亦以テ本宮ハ當社ノ南殿ニシテ東禪寺山王宮ニアラサルコト炳焉トシ
 テ誣ユヘキニアラズ然ルニ慶長八年以後東禪寺山王ノ社家本宮ノ別當ヲ兼帶セシ
 ニ依リ當社ヨリシテ本宮モトミヤコ太夫ノ字ヲ得何時シカ其本務タル東禪寺山王宮ヲモ本宮
 ト訛稱シ終ニ名義混亂シ兩社ノ關係幾ント五里霧中ニ彷徨スルニ至レリ百載ノ下
 此記録ノ發見スルアリテ絶エテ久ク混淆セル名實ヲ甄別シ得タルハ實ニ社頭ノ爲
 メニ賀スヘク且此記録ハ社頭唯一ノ寶典トシテ什襲セマホシキモノナリ

慶長十四年四月中ノ申日ノ祭記ヲ創始シ頭人ヲ立テ神事ニ勤仕セシメ別當不動
 院ハ北殿ノ御銚雌獅子別當齋藤氏ハ南殿御銚獅子ヲ奉シ祭祀ヲ執行セラレ爾後
 恒例トナレリ 寛永二年山王兩社神事供物帳山王當舞扣 寛永二年社殿ヲ鷹待小屋ニ移建ス其位置ハ高野
 濱ノ東ナル御富士山ノ北今ノ臺町ノ北ニアリテ天和頃ノ酒田町繪圖 酒田城ノ下ニ挿入スルモノ
 ニ山王社ト記スル所ニシテ粕谷文書ニ所謂「いまの社地二十間四方」トアルモノ
 即チ是レナリ但不動院ハ舊ニ仍リ荒町ニ住セリ

(本間家文書 文政元年八月 山王社地圖書)

一元宮故宮地者山王堂町行藏院向松原地南の方ニ有之○コ、ニ元宮ト云ヘルハ例ノ詠
傳ナリ事本行ニ辨スルカ如シ

一慶長十八年荒町末東向山王兩社建申候己來四月申之日祭禮始ル而社砂埋ニ而替

地○兩社ノ建立ハ慶長八年ニアリテ申之日祭禮ハ慶長十四年
ニ係リ而シテ荒町ニ移轉ハ同六年ニアレハ此一項ハ詠レリ

一寛永二丑年酒田北之方鷹待小屋と申山を崩し兩宮建四月十日御宮入仕候○四月十
日ハ明曆

三年四月十日造替ノ遷宮月
日ト錯誤セルモノナルヘシ

一明曆二年酒田南之方御富士山北之大神宮山右兩山之間ニ建申候○此レハ前項ト明
曆三年ノ造替ノ事

ト混淆錯亂セルモノナ
リ説下欠ニ詳カナリ

其後下臺町邊ニ引越替地奉願候得共平田郷方論地社地難成獵師町下河原之内奉願

五十間四方被下置候得共地窪ニ而早速社地ニ難成寺町之末西砂山兩宮相建申度旨

正徳二辰年三月替地被仰付五十間四方被下置候

右之内鷹待小屋と有之候ハ當時臺町末北之方と相見候

御富士山太神宮山者○東ノ
誤奥羽軍談ニモ有之内町組下内町染屋與三郎先祖土門與左

衛門陣取之模様を以考候得者高野濱ハ北西ニ當リ候富士權現者酒田山

龍巖寺境内え右兩山追々砂埋ニ而相分リ不申候下臺町邊え引越候○此間ハカノ字
ヲ記セルナラン

獵師町下河原か右兩所奉願候節寛永七寅年と相見申候

(明曆大繪圖)

町 山王別當山伏

(同圖書入) 荒町二丁右二丁之内下之山王別當住居致居候得共山王ハ高野濱ニ當
リ御富士山南方大神宮山北方右兩山之方ニ御坐候故此繪圖ニ無之ニ付斷置申候

○別當ノミ荒町ニ住シ山王宮ハ御富士山大神宮山ノ間鷹待小屋ニアリテ
酒田町以外ノ地方ナルヲ以テ圖面ニ載サセルヲ特ニ示セルモノナリ

○御富士山ハ酒田町舊鎮守富士權現ノ境内ナリ上掲山王宮附修驗舊記ニ據ルニ

同宮ノ向酒田ニ移轉ノ初メハコ、ハ鎮坐セラレシナリ故ニ不動院書上粕谷家記ニ

モ最初御富士山ニアリト云ヘリ而シテ同山ノ位置ハ龍巖寺藏高野濱圖ヲ案スル

ニ平田地境二ノ杭ヨリ三ノ杭ノ間ニアリテ富士神社ノ下
ニ詳カナリ大神宮山ハ下臺町附近ノ

砂山ニシテ今ノ出町皇太神社ノ元境内ナリ同社ノ下ニ
詳カナリ此兩山ノ間ハ即チ鷹待小屋

ニシテ今ノ下臺町ノ北端ニ屬シ現境内ヨリ東北ニ當レリ

但上掲文政元年社地調書ニ寛永二年移轉ノ鷹待小屋ト明曆二年ノ造立ト其位
置ヲ異ニセルカ如ク記スルモ蓋非ナリ且明曆二年ハ三年ノ誤ニテ此年四月十
日ヲ以テ迂宮式ヲ行ハレ其造立ハ移轉ニアラスシテ造替ナリシコト下項ニ詳
カナリ然ルニ同書ニ寛永二年ノ迂宮ヲ四月十日ニ係ルハ明曆度ノ遷宮ト混
淆セルモノニシテ其實寛永二年荒町ヨリ鷹待小屋ニ遷座シ明曆三年造替シ四
月十日遷宮式ヲ行ハレタルナリ

明曆二年造替アリ事田詳カナラス同年四月十日遷宮式ヲ行ハル

(寛永二年山王兩社神事供物書附記) 明曆三年丁酉三月五日ハ大工遣申候八日迄

九日二年寄へ遣參候乙坂六左工門殿元茂殿被仰付候様ハ別當ニカゲ候へ而は氏神氏子のわけ無御坐候間三人之者共請取御宮成就仕御宮入迄可被成候乙坂六左衛工門殿元茂殿ヨリ御奉加には上でんがや三千把代物壹貫文白米三斗もち米貳表被遣候四月十日に御宮入仕候

天和三年造替アリシモ事曆亦詳カナラズ 上掲粕谷家記 參照スベシ 寶永七年風砂ノ爲メ埋没ノ

憂へアルヲ以テ更ニ下臺町邊ニ移轉ヲ請願セシモ其地平田郷トノ論處ニ属スルヲ以テ聽サレズ獵師町下河原ニ於テ五十間四面ヲ賜ハル而モ地勢低窪ニシテ社地ニ適セサルヲ以テ正徳二年三月之ガ替地トシテ寺町ノ末砂山ノ内五十間四面ヲ賜ハル即チ是レ現今ノ境内ナリ 文政元年 社地調書

是ニ於テ土功ニ看手シ同年九月十五日迂宮式ヲ行ハル當時ノ建物ハ亦東向ニシテ寺町通ヲ正面トナセリ是レヨリ先キ正保三年神事ノ儀式ヲ擴張シ東禪寺山王宮ノ神木ヲ請シ祭事ヲ行ハレシガ是ニ至テ同社ノ神靈ヲモ永ク當社ノ南殿ニ勸請シ酒田町三組聯合ノ大神事トナシ一層盛ンニ之ヲ舉行セラレタリ 山王宮々附 修驗舊記

舊説ニ當社ヲ東禪寺山王宮ヨリ勸請スト云ヘルハ之レニ係ル勸請ヨリシテ起レ

ル傳誦ナリ同四年不動院荒町ヨリ境内接續地ニ移住ス

(棟札 龍殿寺所 藏勝本)

聖主天中天 正徳二壬辰年 迦陵頻加聲 郡君酒井左衛門佐忠眞公

寺社御奉行 阿部 惣内 御町奉行 白石茂左衛門

品合天 惣成師釋迦牟尼如來奉造立出羽國田川郡酒田山王宮六間四面一字

哀憑衆生者 導師酒田山龍嚴寺現住大河關梨晃辨 我等今敬禮 九月十五日

町年寄	池田惣左衛門重依	長人	西野	長兵衛殿種	大工頭	本間與左衛門重次	塗師	藤伊兵衛
長人	白旗大郎左衛門言長	田桑	亦兵衛重好	大工	小川惣兵衛伊名	鑿師	齋藤伊兵衛	
同	小幡嘉兵衛善敏	山本	多兵衛易盛	大工	本間喜三郎高本	齋師	齋藤伊兵衛	
同	成田彌兵衛林盛	青塚次郎右衛門勝方	永野五郎右衛門盛重	小工	小川七郎兵衛	齋師	齋藤伊兵衛	
同	尾關又兵衛定赫	池田茂右衛門茂明	池田茂右衛門茂明	小工	同名長兵衛	齋師	齋藤伊兵衛	
(裏)	別當大越家四印不動院存盈	肝煎	木工	木間惣兵衛	同大野與治右衛門	齋師	齋藤伊兵衛	
町年寄	上林七郎左衛門正寛	三浦藤助政種	木	玉木善三郎	同大野與治右衛門	齋師	齋藤伊兵衛	
同	太庄屋 木與助素次	同五十嵐清助技將	金具師	同大野與治右衛門	同大野與治右衛門	齋師	齋藤伊兵衛	
同	栗林新右衛門政賀	同伊東清七定利	嚴	同大野與治右衛門	同大野與治右衛門	齋師	齋藤伊兵衛	
同	渡邊隼人久直	同山田藤左衛門政信	同	同大野與治右衛門	同大野與治右衛門	齋師	齋藤伊兵衛	

別當大越家ノ上ニ別當齋藤大隅守清成ノ下ケ紙アリ

〔藩老松平某文書〕 正德四年六月

一酒田町山王社僧不動院別紙繪圖之通山王宮之脇砂地之處空地御坐候巾十五間長
貳拾間之處替地ニ被下置只今迄住居候屋敷表口八間長拾八間之處差上申度旨願
書付差出寺社御役渡邊郷兵工右地方支配白石茂兵衛願書取次申聞候ニ付私共相
談之上則願之通不動院ニ替地申付是迄之屋敷をハ御取上ニ仕候則願書繪圖共四
通指出候を御覽被成下序ニ被仰上度候以上

六月九日

多左衛門
平右衛門
武右衛門

舍人様
帶刀様

享保十一年五月八日夜片町火ヲ失ヒ三千二百戸ヲ延燒ス當社亦烏有二屬セリ同
二十年之ヲ造立シ八月朔日遷宮式ヲ行フ

〔夢宅年代記小泉佐藤氏所藏〕 享保十一年丙午五月八日片町より出火して本町中町かし通臺
町今町一時の煙と成其節山王堂も燒失して亦候建立してかやふきは出火の爲あ
しきとて今は○延享二年ヲ云フ瓦葺になる○延燒ノ戸數ハ山崎邑高橋善四郎家代記ニ據ル

棟札龍嚴寺藏勝本

封

聖
迦

千時享保二十歲
龜ヶ崎御城代松平甚三郎治親
領主酒井左衛門尉忠寄公

寺社奉行
本多五郎兵衛
伊黒笹右衛門
御奉行
豊原多助

年寄
上林七郎左衛門計寛
池田惣左衛門養重
同 二 木 圓次郎素保
世話長人
同 西 野 長兵衛元堯
同 市 田 嘉右門好別

○惣戒師釋迦牟尼佛奉造立山王宮六間四面一字出羽國飽海郡酒田町鎮座守護所

哀
我

天長地久所願圓滿氏子息災子孫繁昌悉地成就所
遷宮導師酒田龍嚴寺現任燈傳大阿闍梨法印卓英
乙卯八月朔日

長人
松田亦藏舍久
同 藤井與兵衛成定
同 白 廣 多七灼長
同 大庄屋 邊 隼人久直
同 栗 林新右衛門政央

大工頭

鍛冶

世話長人
渡邊源助榮昌
同 岡田多右衛門政易
同 根上伊右衛門昭純
願主別當大越家不勤院盈遷

本間與左衛門
本間喜二郎
小川惣兵衛
小川善六
本間長左衛門

小松治郎兵衛
小野寺治右衛門
池田惣兵衛
齋藤孫右衛門

世話肝煎

五十嵐清助 枝將
伊藤清右衛門光刻
同 向井孫兵衛光廣
同 小武名右衛門久忠

小工 小川茂兵衛
木挽 本間七左工門
材木屋 榎田多郎右工門
同 中 西 六兵工

檜物師
塗 彌 兵 工
岡部平右工門

〔裏書〕

丸

一切皆替一切皆替賢諸佛皆威德
羅漢皆斷漏以斯誠實言如來成吉祥

永

從來當社ハ萱葺ナリシモ毎ニ類焼ノ虞アルヲ以テ延享元年瓦ヲ以テ之ヲ葺換ヘ
同年十月五日遷宮式アリ

(棟札全)

封封 聖……

于時延享元年

封封 迎……

天長地久所願圓滿氏子息災子孫繁昌悉地成就所

○惣戒師釋迦牟尼佛奉葺瓦山王宮六間四面一字出羽國庄内飽海郡酒田鎮座守護所

遷宮導師酒田山瀧嚴寺現任傳燈大阿闍梨法印國豊

封封 哀……

甲子十月五日

封封 我……

世話長人

大工 小川惣兵衛

年寄 池田惣右衛門養重

渡邊 源助房昌

同 二木圓次郎素保

大工 本間長左衛門

同 上林治郎治恒敏

小工 小川新助

世話長人 市田嘉右衛門好端

木挽 本間七左衛門

同 白旗多七灼長

願主別當不動院俊盈

(裏書) 前ニ全ジ

世話長人 岡田多右衛門政易

瓦師 上林九兵衛

同 松田亦藏舍久

同 鈴木長兵衛

同 藤井與兵衛成定

世話肝煎 五十嵐清助枝將

大庄屋 渡邊隼人久直

同 向井孫兵衛光廣

同 栗邊新右衛門

同 小武名右衛門久忠

寶曆元年三月廿九日酒田大火アリ當社亦燒失シ同八年七月十三日傳馬町火ヲ失

ヒ延テ看町ニ及ヒ二千七百余戸烏有二属セリ

山崎邑高橋善四郎家代記

前後ノ火災ニ町民悉ク

疲蔽シ社殿ヲ造立スル能ハス荏苒十余年ノ久キニ亘レリ本間久四郎後チ四郎三郎ト改ム深

ク之ヲ慨キ大志願ヲ發シ自ラ「惣計」トナリ土功ヲ計畫シ明和ノ初メヨリ之ニ從

事シ舊來ノ規模ヲ改メ社殿ヲ南面ニシ土居ヲ繞ラシ樹木ヲ植エ風砂ニ備ヘ並セ

テ境内ニ雅致ヲ添ヘ隨神門ヲ創建シ斜メニ路ヲ開キ中町通ニ向ケ華表ヲ立テ又

寺町通ノ裏門ニ對シ唐金ノ華表ヲ傳馬町角ニ樹テ以テ社頭ヲ莊嚴ニシ明和三年

八月ニ至リ其功ヲ竣ヘ翌九月朔日ヲ以テ遷宮式ヲ行フ此時久四郎ノ宅ヲ假殿ニ

充テ僧祝氏子神輿ニ供奉シ各町臺輪練物等ヲ出シ盛ンニ儀式ヲ舉ケラレタリ其

法式次第遷宮記錄ニ詳カナルモ之ヲ略スコ、ニ挿入スル圖面ハ即チ當時ノ規模

ナリ

(吹浦佐々木氏所藏)

酒田山王宮ハソノカミ東向ニシテ寺町通りニ向テ大己貴命ト釋迦如來ト二尊ヲ一

社ニ安置シ山上ニ建テアリシガ寶曆元年辛未ノ三月町家ノ出火ヨリ延焼シ其後モ

シバノノ火災ニテ氏子モ困究シテ十六年ヲハタリ本間久四郎志願ヲ發シ明和ノ初ヨリ再建ニカ、リ地形ノ砂ヲ除キ土居ヲ築廻ハシ御本社ヲ南向ニシ墓股ニ御領主ノ御紋ヲ置キ岑々タル拜殿南ニ向テ路ヲ開キ二町許ヘテ隨神門ヲ建テ夫ヨリナ、メニ東半町斗リニ路ヲ開キ中町通りニ向テ鳥居ヲ立テ額ニハ京都慈恩院賢賀僧正ノ御筆ナリ拜殿ノ額モ御同筆ナリ又寺町通りノ裏門ニハ傳馬町角ニ唐金ノ花表アリ額ニハ京都東寺ノ長者觀智院様ノ御染筆ヲ掛奉リこの花表燒失セリ又京都勸修寺宮より御紋附ノ纏五ツ紫ノ御幕一張寄附セラル何レモ御寄附狀ヲ下シ置レヌ明和三年丙戌ノ八月ニ落成セシハ偏ニ本間氏のいさほしにて實に北方の一壯觀の宮地とはありけり久四郎後に國に忠勤ありて御領主より藩士に擧られ名を四郎三郎と改めけり同九月朔日酒田御町中神輿を渡し町々よりも五六尺の臺輪□□物をいたし諸寺院社家ノ供奉にて遷宮し奉りけるは誠に賑はしき事なりけり

(棟札) 聖……
 迎……
 封封 天乃御柱國乃
 ○奉造立
 封封 御柱於見奉
 哀……
 我……
 出羽國飽海郡 日吉山王宮本地阿彌陀如來一字八尺四面
 酒田湊惣鎮守
 國君酒井左衛門尉忠温公
 若君酒井豊太郎公
 明和三丙戌年
 天長地久所願圓滿氏子息災子孫繁榮悉地成就
 遷宮導師酒田山龍嚴寺現住傳燈大阿闍梨法印則瑞
 九月初朔日

龜ヶ崎御城代酒井圖書御宮惣計本間久四郎光丘御町年寄
 家老水野内藏助重誠同御子
 同竹内八郎右工門茂昆御宮隨身成就院末葉
 組頭堀彦大夫三誠 御町大庄屋
 栗林新右工門政順
 渡邊治三郎
 榮上寺北之坊
 水戸舟積方
 儀屋孫三郎
 輪島舟積方
 若木屋兵助
 酒田増口錢方
 尾關亦兵工光保
 間幸三郎
 菊地文右工門
 疋田多右衛門
 上寺北之坊
 水戸舟積方
 儀屋孫三郎
 輪島舟積方
 若木屋兵助
 向井孫兵衛 佐々木八十郎
 丁字屋長七 阿邊吉兵衛
 五十嵐長助 小使長次郎
 岩屋五郎兵衛 渡部宇兵衛
 高岡屋長右衛門筆役 田中三五郎
 久村利兵衛 高野濱 多賀甚四郎
 大工棟梁 本間喜右衛門 木挽勘太郎 鍛冶與兵衛 屋根師 五郎兵衛
 脇棟梁 惣兵衛 惣兵衛 惣兵衛 惣兵衛
 孫五右工門 彌五右工門 亦次郎 內助郎
 木挽勘太郎 施主隨喜中 御町惣氏子中 惣屋根中 惣屋中 面々中
 別當齋藤圓治藤原清富
 御材木方
 渡邊多助久隣
 用達方
 林多郎右衛門至久
 京注文所
 田中多兵衛
 同 美濃屋惣助
 同 亦兵衛
 姫路住
 奈良屋權兵衛

封封 聖 國 明
 封封 出羽國飽海郡 若 國 明
 ○奉造立 酒田湊惣領寺 日吉山王大權現本地釋迦牟尼如來一字八尺四面
 封封 我 哀 天 迂 九

本 地 村 地
 掘 山 中 石 上
 本 地 村 地

別當大越家法印不動院智道

安永二年三月廿八日寺町大信寺境内ヨリ出火シ百九十余戸ヲ焼失シ當社モ亦回
 祿ニ罹レリ 公儀被 仰出書 是ニ於テ本間四郎三郎 久四郎 改名 施主トナリ造立ヲ計畫シ天明四
 年ヨリ之ニ着手シ拮据經營從來ノ規模ヲ擴張シ一層ノ美觀ヲ添ヘ同八年ニ至リ
 竣功シ同年八月十三日ヲ以テ盛大ナル遷宮式ヲ行ハル是レ即チ現在ノ建物ナリ

但中町ニ向ヒタル華表ハ明治 年道路規則ニ依リ現今ノ位置ニ移サレ隨 造營及ヒ遷宮式ニ係ル
 神門ハ廿七年ノ震災ニ顛倒シ目下建築中ニ屬セリ神樂殿ハ未タ造立ナシ
 文書記録等ハ本間家ニ存シ頗ル豊富ナルモ繁ヲ避ケ省略シ左ニ他家ノ記録ヲ抄
 出シ參考ニ供ス

(野附氏御用留)天明四年辰歲
 三十四年以前寶曆元未年濱山王宮御燒失後志願十二年以前安永二巳年大變尤天災
 今度再建之地中町通り櫻小路坂上別紙繪圖面之通南面御宮立被爲造建致度相願申
 候仍而惣氏子中ニ爲御知如此ニ御坐候已上

辰五月八日

山王別當

不動院 齋藤幸大夫

繪圖面壹枚並口上書添

本町通獵獅町船場町並小路同斷肴町河岸通
 並小路同斷銀冶町中町荒町並小路同斷檜物
 町工町並小路同斷寺町臺町並小路惣氏子中
 山王宮造立ニ付別紙之通繪圖四郎三郎殿御發端ニ而兩別當ヨリ右之通町々へ廻文
 差出候様役所ヨリ被仰付候間別當にも其旨申達候右爲御知申上候

加、や與助様
鏡谷惣右工門様
渡邊 隼人様

上林七郎右工門
栗林新右工門

借地証文之事

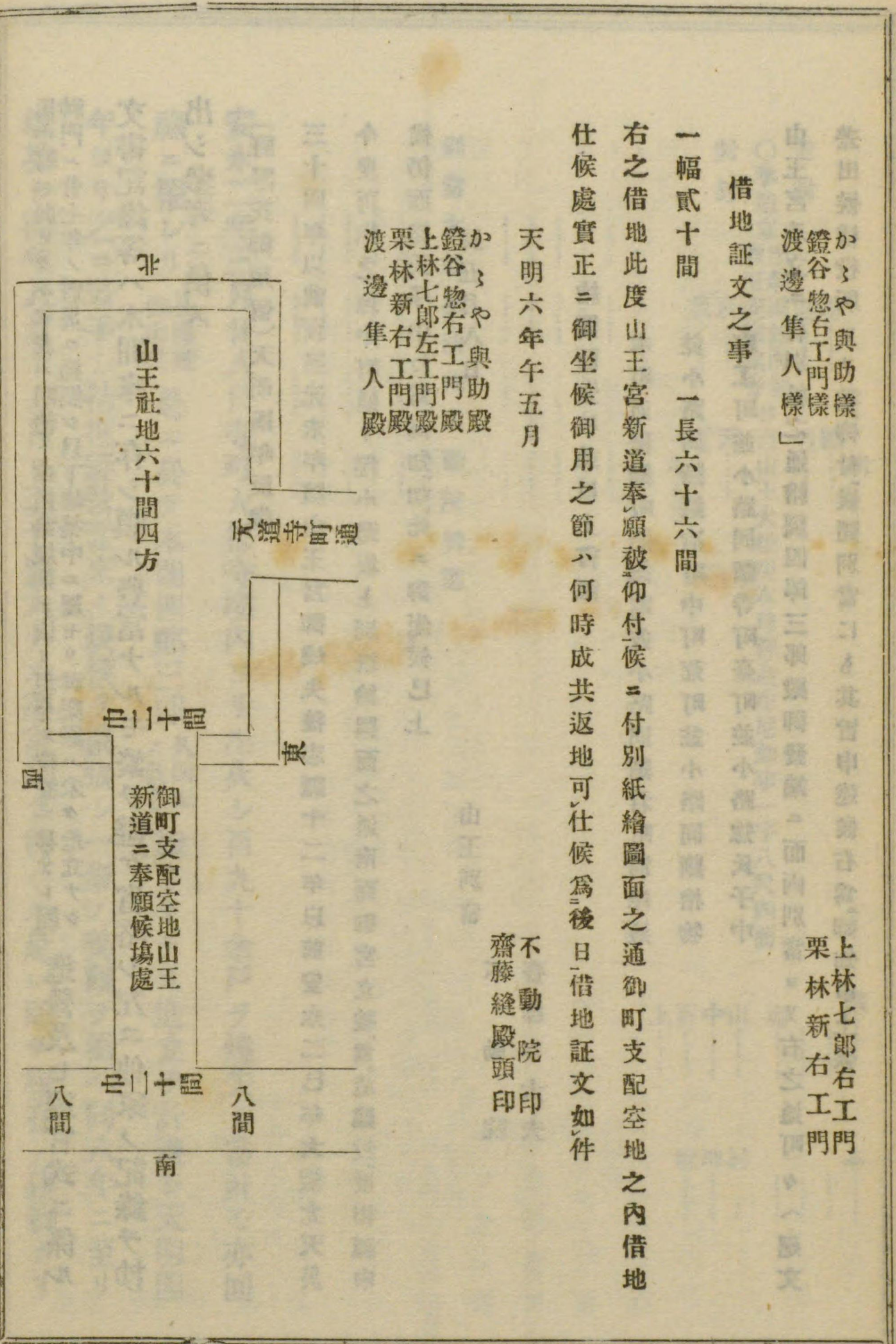
一幅貳十間 一長六十六間

右之借地此度山王宮新道奉願被仰付候ニ付別紙繪圖面之通御町支配空地之内借地仕候處實正ニ御坐候御用之節ハ何時成共返地可仕候爲後日借地証文如件

天明六年午五月

不動院印
齋藤縫殿頭印

加、や與助殿
鏡谷惣右工門殿
上林七郎左工門殿
栗林新右工門殿
渡邊 隼人殿



○此地形今ノ模様ト異ナレリ蓋天明六年五月後多少ノ異同ヲ加ヘ現今ノ境内トナレレモノナルヘシ

(天明六年酒田町奉行堀大夫御用引續○加藤今覺書)
一山王用金ノ儀ハ七十年斗以前寶永年中當屋四人ノ者一人ニ付三兩壹歩上金致サセ合テ拾參兩宛年々元ニ立段々仕立候事之由然處先年四郎三郎殿世話ニテ山王宮建立在之候節○明和三年ノ造立ヲ云フ右用金も不殘普請ノ入用ニ差出候由帳面モ安永二巳年

ヨリ以前ノ分ハ相見不申候故四郎三郎殿世話之社モ巳年○安永二年ニ類焼いたし候ニ付後年普請ノ爲ト申候テ翌午年小七殿勤ノ節當屋共へ壹兩參歩上金申付都合五兩ノ出金年々廿兩宛ノ元金ニ相成候處是又其當座假宮普請ノ節之借方等ニ差向其外諸入用ニ當候由ニテ殘少ニ相見再建之元立一向相見不申候然處祭礼之節當屋共ニテ赤飯相贈候儀鶴ヶ岡同様古來々ノ停止ニ候得共相用不申近年別テ盛ニ相成當屋ノ物入ハ第一赤飯ノ由ニテ既ニ先年當屋ノ内赤飯相贈候儀必至ト御停止被成下候ハ、御宮へ金廿兩さし出可申旨内意申聞候者モ停止トハ乍申内々ハケ様仰山ナル致方ニテ何方ノ爲ニモ不相成儀ニ候間安永七年戌ノ祭禮ノ節ヨリ改テ嚴敷停止申付家内ニテ相祝候分ハ格別一町内隣家親子ノ間ナリ其他へ一切贈リ申聞敷旨申渡此未當屋ノ赤飯持あるき候使ノ者見當リ候ハ、名前承届可申出旨御同心目明共

へ申付置候尤先年々三兩壹歩ツさし出させ候モ赤飯代トシテ申付候義此度尙又嚴
 敷停止申付候ニ付二兩増七兩宛爲指出都合廿八兩ツ年々元ニ立候而丑年再建ノ切
 組有之ニ付百兩無盡二口初掛金等ニ指向サセ候委貸方等ノ儀ハ帳面ニ相見候赤飯
 贈候儀モ戌年以來必至ト相止何モ悅候由追々承候
 一丑年ヨリ御町役人共志願ニ而山王宮再建切組ニ取掛リ候處存ノ外施物モ寄不申
 建前ノ一段ニ必死ト行丈候間何分沙汰致吳候様辰ノ春申出候間右建前ノ一段四郎
 三郎殿へ相頼處被致承知四郎三郎殿世話ニテ米無盡杯出來追々取掛候而當四月迄
 ニ出來上リ迂宮モ在之積ニ御坐候右ニ付山王用金ノ儀モ色々拂方在之委勘定帳ニ
 相見へ申候

(棟札)

國君酒井左衛門尉忠徳公

御家老

封封 聖……
迦……

松平甚三郎久敬
 松平舍人信親
 水野内藏助重幸
 末松主税公隆

○奉建立 出羽國飽海郡 酒田湊總鎮守

日吉大權現兩社御本地 釋迦牟尼如來 阿彌陀如來

一字八尺四面 別

封封

哀……
我……

天長地久所願圓滿氏子息災
子孫繁榮悉地成就

御中老

竹内丘兵衛茂樹
 酒井吉之允重熙
 朝岡助九郎良往

遷宮導師酒田山龍嚴寺現住傳燈大阿闍梨法印及貞

施主本間四郎三郎光丘
寺社奉行

御町年寄

世話方 本間新四郎

石井丹治清知
興津彌傳治長賢

加賀屋與助
上林七郎左衛門

隨喜方 村上與四兵衛工珍英

同 津國屋多助

御町奉行 加藤今右衛門 同格

本間正五郎

同 高岡市左衛門正押

同 高岡屋善八

別當大越家法印不動院智丈

同格

同 久岡村利兵衛

同 川吉郎兵衛

別當從五位下齋藤縫殿頭藤原清定

本間正五郎

同 當棟梁又内政勝

同 喜右衛門

御町大庄屋 栗林新右衛門

渡邊隼人

同 喜右衛門

同 喜右衛門

天明八戊申年 九月十三日

持者眷屬

同 喜右衛門

同 喜右衛門

(裏書) 南无堅牢地神 南无五龍帝王

與諸眷屬

同 喜右衛門

同 喜右衛門

明治三年神佛分離ノ際本地佛ヲ撤シ日枝神社ト稱ス同六年二月郷社ニ列シ同八

月 日縣社ニ陞セラレシガ同九年二月一般ニ社格廢止ノ令アリ同月廿四日更メ

テ縣社ニ列セラル

寶物 寶物器什數十点ヲ有スルモ今其二三ヲ掲ク

飽海郡誌卷之四

一木鉾 銘 慶長十四年申四月中ノ申日造之別當不動院

一額 文 日吉山王宮 天明三年勸修寺宮殿下ノ御寄附

一同 文 出羽國酒田總鎮守日吉山王大權現(二行)同上

一劔 總長サ壹尺七寸内中心四寸壹分

明治廿二年月日百年祭執行ノ爲メ社頭掃除ノ際本殿長押ヨリ發見スルモノ本ト不動院護摩修行ノ木割ニ用キシ品ナリト云フ本阿彌鑑定副狀左ノ如シ縣社日枝神社之寶劔無銘之品遂熟察候處奥州舞草友長作正真相違無御座候金百枚代付可申候地及紋尙端正永延之古物珍敷候依御依頼審定証書暨管三蓋書付諸進申候永世可被爲成御保護候猶万縷拜眉可申候頓首

八月一日

本阿彌長識

め

本間光輝殿
白崎良彌殿

舊社僧ト社家

北殿ノ別當ヲ不空山白鳳寺不動院ト稱シ羽黒派修驗タリ

五大院書留神社分限調書

先祖岡部隼人亮ハ年代不詳浪士トナリ當國ニ來レルモノナリト云フ 文政二年四月補職ノ

年代亦詳カナラズ寛文二年川北羽黒一派頭トキンカシラ頭ヲ命セラレ子孫之ヲ襲フ本ト上

荒町南側ニ住セシヲ 明曆 正徳四年現在ノ處エ移住ス事前項ニ詳カナリ明治三年復

飾シ社家トナリ岡部氏ト稱シ今尙奉仕セリ

南殿別當ハ東禪寺山王宮ノ社家ナリ慶長八年南殿 即チ本宮 創始以來之ヲ兼帶ヲ命セラ

レ子孫之ヲ襲フ因テ本宮大夫ト字ス明治廿一年之ヲ辞シ專ラ彼社ニ奉仕ス

松林 銘 日枝神社ノ境内ニアリ文化十三年兩臺町ノ人民故本間四郎三郎ガ酒田

西濱植付ノ功績ヲ欽シ之ヲ不巧ニ傳ヘントシテ加藤長助ナルモノ願主トナリ建

立スル所ナリ銘左ノ如シ

夫酒田之爲地也南對宮浦枕最上川東則原濕衍沃村落基布月峯鳥嶽左右對峙羽黒胎藏廻合數十里外水山洵美積粟百萬賈舶輻湊富商豪民莫物不備焉實是北方一都會但西北之交遙承北海相距數十里平沙漠々無有寸木尺草生植其間者冬期朔風一起リ簸揚細沙雲散霧集其所堆積或施及酒田乃屋舍傾倒市門絕路况加以雨雪其勢不可嚮焉邑民患之久矣本間君宗善住酒田富累巨萬爲人好善不啻瞻貧恤究國家之利知無不爲然而於彼風砂之難憂無苦之何矣既而大興人徒使爲囊砂數百萬累之積之高數十尋長數百間突然如邱俄然成山就其最高頂遷山王祠新修堂宇又植之以稚松數百萬株滿山蒼然加草新生而每一經冬根露枝枯或爲沙所埋存者十一二然竭力不已百方施術漸及平沙數年後竟果成一大松林於是風沙之患頓止焉一邑無虞市人樂業種麥養疏者間就

其陰刈楚艾萎以備薪者時入其中莫往不利邑民大喜曰此是本間君之賜也則人一過彼松林莫不稱歎其功之速者嗚呼人雖有一時赫々之功而後世其名煙晦不傳何也是豈非由無金石記之以告後者耶是以邑人加藤長介願擇一勝地建一巨石昭著其功以垂諸無窮一唱之衆人響應乃於山王之祠上下其地戮力合志經營不日而成請余爲之銘余雖不嫻文字而以君爲余檀越義不可辭乃作銘曰

富惟潤屋 德能瞻貧 風沙之患 舊惱國人 藁沙功就 松林維新
萬壽無疆 永世施仁 無忠之功 固非真功 無功之忠 豈是實忠
忠之與功 相濟不空 宜哉爾德 昭著無窮

文化十三年丙子正月

釋公巖撰

糶藏址 文政元年藩主非常ノ備トシテ鶴岡酒田兩町ニ豊年毎ニ糶二百表宛ヲ賜ヒ之ヲ蓄積シ本間外衛光暉ヲシテ之ヲ監督セシム天保四年ノ大凶荒ニ悉ク究民ニ救恤シ皆無ニ屬セシヲ以テ五年兩町二年々三百表ヲ賜ヒ非常ノ用ニ備ヘ亦外衛ヲシテ之ヲ掌ラシム外衛爲メニ三百表ヲ效シ之ニ加フ

(野附氏御用留)兩御町え大非常御備として年々無豊凶糶三百表ツ當午年ヨリ御下穀之分期月十月ニ取極候尤御郡代裏判を以受取可申証文案左之通

大非常御備糶請取申事

一糶三百表

納四斗入

此米百五十表

但去ル文政元寅年ヨリ大非常爲御備豊年斗一ケ年糶三百表宛御下穀被成下候處去巳年御入國以來之大凶作ニ而御備糶不行届他國御買入米を以御備被仰付候次第ニ付今度格別之御沙汰を以去ル天保五年ヨリ以來年々無豊凶百表相増都合三百表御下穀御備糶被仰出候此糶年々積置飢渴ニ可及程之事柄無之候而ハ決而差出不申御定之事

右之通相渡申候様御裏判可被下候以上

未正月

小川渡大夫

御郡代所

- 一酒田へ御下穀之義ハ平田ヨリ年々三百表ツ相渡事
- 一鶴岡分ハ年々櫛引ヨリ三百表ツ相渡候事
- 一入藏等之義評議之上可被申出候事

時ニ未夕倉廩ノ設ケナク松山藏ヲ借り貯蓄セラレシガ外衛糶藏建築ヲ計畫シ白崎五右工門佐藤高庵ヲシテ工事ニ着手セシメ同八年十二月其功ヲ竣フ事本間家

ノ記録ニ詳カナリ實ニ是レ酒田糶藏ノ始メナリ 後チ一番藏ト稱ス

(同上) 覺

一御糶三百表 天保五年年御下糶ニ御坐候

一同 三百表 同六年年 右同斷

一同 三百表 同七年年 右同斷

一同 三百表 同八年年 右同斷

ノ千貳百表

外ニ 三百表 本間正七郎ヨリ天保六年年差出候分

此分松山御藏拜借積入置候處鼠切亂表多相見へ候ニ付天保八酉年御町方ニテ御糶藏相立翌戌年六月中本表ニ拵直シ候處四百八表半減穀ニ相成申候

千九十壹俵俵半

一御糶千貳百表 天保九戌年ヨリ去丑年迄四ヶ年御下糶

正有糶

貳千貳百九十壹表半

右之通御坐候尤一ヶ年分ツぬか俵ニテ包入仕置候得共鼠切亂俵等モ多少有之減穀可有御坐ト奉存候得共先有俵之員數申上候以上

(天保十三年)

寅十一月

鎧谷渡邊 伊東野附

御町奉行所

爾後年々石數増加シ狹隘ヲ告ケ嘉永三年更ニ一棟ヲ建築シ之ヲ二番藏ト稱ス之ニ係ルコト亦同家ノ記録ニ詳カナリ廢絶ノ事歴文書ノ徴スヘキモノナシ現今神宮奉齋會酒田支部ノ敷地ハ實ニ其址ナリ

海向寺 下臺町ニアリ砂高山ト號ス眞言宗湯殿山注連寺未ニシテ大日如來ヲ本

尊トナス創始詳カナラス 寺傳ニ天長中僧空海ノ開基トスルモ據ナシ 明曆圖ニ境内ノ間數ヲ記セズ元祿中

寺社境内改ノ際差出セルモノ左ノ如シ 寺社奉行所書留ニ據ル

覺

一東表口廿間 一北之方廿四間四尺

一南之方廿五間三尺 一西之方廿間 但六尺三寸竿

右者海向寺屋敷ニ御坐候間尺之義右之通少モ相違無御坐候若相違成義申上候ハ、後日御食議之上拙僧何様ニ茂可被仰付候以上

元祿十二年卯五月

真言宗 海向寺

同宗加判 觀音寺

寺社御役所

其他ノ事跡不明ニ属セリ明治廿七年ノ劇震ニ本堂庫裏顛倒シ目下建築中

水月觀音堂 本ト粟嶋觀音ト稱ス文化中現住鉄門海越後國岩船郡粟島江渡ニ於テ當中ヨリ光明ヲ放テル影向ヲ感拜ス因テ其處ノ靈石ヲ齎ラシ歸リ境内ニ安置シ之ヲ水月觀音ト稱スト寺傳ニ云フ

忠海即佛堂 忠海ハ庄内藩士富樫丈右衛門ノ次男ナリ深ク湯殿山ヲ信仰シ元文中注連寺ニ於テ得度シ一世木食行者トナリ仙人澤ニ參籠スルコト一千日延享三年當寺ニ住シ修行彌堅固ニ寶曆五年二月廿一日入寂ス遺言ニ依リ三年ノ後チ龕ヲ開キシニ尸骸解体セズ依然トシテ入寂ノ日ニ異ナルナシ遠近ノ信徒以テ即身即佛トナシ爲メニ一字ヲ建立シ之ヲ安置セルモノナリ

持地院 上臺町ニアリ良茂山ト號ス曹洞宗奥州瞻澤永德寺末ニシテ釋迦牟尼如来ヲ本尊トナス創始以來數回ノ火災ニ罹リ寺家ノ文書悉ク烏有二属セルモ他ニ存スル記録ニ據ルニ開山理元ハ永德寺二世ノ住僧ナリ應永廿二年當國ニ巡錫シ小湊ニ抵ル領主蒲地氏之レニ歸依シ爲メニ一字ヲ造立ス即チ當寺ノ濫觴ナリ理元永享四年四月十日ヲ以テ入寂ス文安二年十月七日蒲地氏兵亂ニ依リ滅亡シ小湊亦漸次衰微シ民家酒田ニ移轉スルニ及ヒ長祿三年第四世天南堂宇ヲ本町五丁目附近ニ移建ス今ノ持地院小路ニシテ當時ノ境内五十間四方南向ノ建物ナリシト元龜元年第十二世通天更ニ今ノ五大院坂上ニ移ス明曆圖ニ長廿二間四尺裏ニ十四間四尺トアル是レナリ寛政九年第廿九世萬量火難ヲ避ケ現境内ニ移轉セルモノナリト云フ

(五大院書留)持地院從草創舊記寫

當開祖湖海理元禪師者奥州仙臺瞻澤之邑白雲關報恩山永德寺二代之尊者也于茲應永廿二年子春爲化度狂駕遊歷于羽州其頃小湊縣而有屋形領處高六千石余性者蒲地氏名勝大夫飯依理元禪師造立伽藍名良茂山持地院小湊之河上岸至今當時之古跡儼

然翌丑之春理元師臨興袖之浦開闢海晏寺功成再飯興當院永享四丁丑年四月十日理元禪師六十三示寂時刻取中道夜半子之刻滅度其夜海中自然不知火法燈灼然矣及後年領主蒲地氏爲兵亂亡其已後小湊縣自然衰微酒田大成繁華渡海船出入而最上河白帆如布依之小湊之人家盡引越酒田繁華十倍小湊當長祿三年亥四代天南和尚當寺易地酒田今之持地院小路是也地面五十間四方門向五之丁元龜元子年十二代通天和尚再易地今之當山古屋敷右之上件舊記如件十三代通山誌
此地十七代相續當寬政九巳廿九世萬量易地當屋敷今文政六未年迄廿有七年從開山示寂到文政六未年既三百九十一年

開基法號持地院殿泰山儀全大居士

貞法院眞應妙月大姉

文安二年丑十月七日兩靈他界

(錯薪編)持地院開基者理元奥州仙臺膽澤村報恩山永德寺二代之僧也應永二十二子年小湊ニ下向ス其比屋形有而蒲地勝大夫と云て六千石余領スト云右理元を歸依して一字建立し良茂山持地院と號ス小湊川上ニ當寺の古跡有と云翌丑之春理元袖の浦に至り海晏寺を建立して再歸て持地院に住ス永享四丑年四月十日ニ卒ス其後蒲地氏ハ兵亂の爲に亡スト云夫ヨリ小湊自然と衰微して民家酒田へ引移長祿二亥年

四代之僧天南の時今の持地院小路といふ地面に引越ス五十間四方表門五ノ丁ニ向と云其後十三代道山の時坂の上五大院前之屋敷元龜元子年引移ル天和三亥年公義え書上ニハ曹洞宗良茂山持地院と有之寛政九巳年廿九世萬量之時臺町の北當時之境内ニ引移ル

荒 町 天正中ヨリ慶長十七年マテノ間ヲ以テ成リ明曆ノ比既ニ貳丁戸數三十

ニテ有シ天和三年ニ至リ三十七戸 同年巡見使御 用覺書 トナレリ

(酒田町三組古控) 錯薪編明曆圖 書コレニ同シ

荒町二丁ニ而三十一軒天正年中ヨリ慶長十七年迄之内ニ出申候町ニ相見申候右貳丁之内下之山王別當住居致候得共山王高野濱ニ當る御藤山ノ南方大神宮山之北方ニ御坐候故此繪圖面ニ無之故斷置申候

櫻 小路 明曆圖ニ町割ノ形狀アルモ町名戸數ヲ記セス唯其南小路ニ片平町十

六軒ト注セリ櫻小路ノ名義詳カナラス野附氏御用留ニ文化十二年坂上ノ家作ニ係ル文書アリ録シテ參考ニ供ス

口上書を以て奉伺候

獵師町櫻小路西之方山王表口左之方砂山ハ先年ハ塵芥等積上高ミニ相成居候處
處借地仕引平均家作仕度旨別紙書付之通浦役人小幡周治願申出候ニ付差障之筋
も有之間敷哉與町内爲相糺候所差障之筋も無之旨申出候右高ミ續櫻小路裏空地
之處近年も追々願出家作仕御町役も相勤申候依之右周治願出申候場處え差障も
無御坐候ハ、願之通拜借地被仰付可被下哉年々地代金御町方え取納益筋茂相見
申候間此段口上覺書を以奉伺候以上

文化十二年亥正月

栗林孝次郎

二木重之助

御町奉行所

但正月廿二日寄合之節町内差障りも無之ニ付右口上書添上申候

獵師町 明曆圖ニ獵師町東小路四十九軒獵師町西小路三十五軒トアリ東小路
ハ上小路ニシテ西小路ハ下小路ナリ當時酒田町ノ西端ナレハ獵師渡世ノモノ多
ク住セシヨリ町名トナレルモノナルヘシ天和三年巡見使覺書ニハ上獵師町一丁
家敷四十軒下獵師町一丁家敷五十軒ト見ユ

出 町 明曆圖及ヒ天和三年巡見使覺書ニハ當町ナシ以後新出ノ町家ナルヘキ

モ創始詳カナラズ

皇大神社 天照大御神ヲ祭ル創祀詳カナラズ本ト臺町ノ北大神宮山ニアリ享保
十九年燒失ノ後風砂ノ憂ヲ避ケ元文五年現境内ニ移建ス

(上野澤佐藤氏文書)

乍恐書付を以奉願候

大神宮之宮地寶永七年寅九月奉願臺町末砂濱空地之處三十間四方拜借宮建立仕候
處享保十九年寅歲宮燒失仕候ニ付此度建立仕候然者只今迄拜借之社地者砂吹寄宮
も埋り人通無之處ニ而宮不繁昌迷惑仕候依之奉願候只今之社地ヨリ南出町口北之
方各樣御拜借地三十間四方之處代リ地拜借被仰付被下候ハ、難有仕台奉存候 御
公義御用之節何時成共差上可申候願之通被仰付被下候様奉願上候以上

申五月

別當法性坊印
加判中町久兵衛印
同七ノ丁治左衛門印

鑑谷惣左衛門殿 上林七郎左衛門殿

かゝ屋圓次郎殿 渡邊隼人殿

栗林新右衛門殿

(野附氏御用留)神明替地之事

一三十間四方 出町之未濱空地之處

右者大神宮之社地拜借奉願之通被仰付無相違請取難有仕合奉存候右之濱地 御公儀御入用之節ハ何時成共差上可申候爲後日之証文仍如件

元文五年申五月

伊勢宮別當

法性坊印

同上宛

爾後ノ事歴詳カナラズ天保十四年社殿燒失シ弘化三年之ヲ造立ス即チ現在ノ建物ナリ明治九年郷社ニ列セラル社僧法性坊後チ靜照寺ト稱ス神佛分離ノ際社人トナリ宮川氏ト稱ス今退轉セリ

下 藏 址 明曆圖ヲ案スルニ下藏ハ今ノ日和山方面ニアリテ丸岡御料大山御料及ヒ京田中川櫛引通ノ租米ヲ收ムル倉廩ナリ下ハ内町外ノ上藏ニ對スル稱呼ナリ明曆二年五月二日酒田大火ノ際悉ク燒失セシカバ寛文七年之ヲ米屋町組筑後町外ニ移建セラル事新井田藏ノ下ニ詳カナリ本ノ藏ハ大藏宮山ニテリ
日和山 本ト土塚山ノ一部ニシテ不毛ノ砂丘タリ年代不詳之ヲ築堅メ石礎ヲ

疊ミ晴雨ヲ占候シ船舶ヲ觀望スル處トナシ之ヲ日和山ト字ス日和ハ天候ノ方言ナリ故ニ騷客ハト晴臺ト稱ス文化十年紀州日方浦ノ橋本屋源助太田屋彌右衛門庄内加茂ノ長澤屋清吉主唱トナリ更ニ土壤ヲ盛り面積ヲ擴メ之ニ常夜燈ヲ建設シ船舶入津ノ標識トナス

(酒田文庫三) 乍恐書付を以奉願候

紀州日方浦船頭橋本屋源助太田屋彌右衛門御當所加茂村船頭長澤屋清吉右三人申合諸國廻船渡海爲使用御當處日和山ニ常燈建立仕度志願ニ付諸國因之船々ハ茂相談仕夜燈出來此節積下し申候ニ付右船頭共相願候通日和山ハ相建候様被仰付被下置候ハハ難有仕合奉存候尤通船二三月頃ヨリ十月比迄常夜燈ニ仕灯守之儀ハ神明別當法性院へ相頼油料之儀も追々備相立申度段申聞候彌願之通被仰付候ハハ海船入津往來之船ニ指當ニ相成且又川船最上上下下之節目當ニ茂罷成可申奉存候依之夜燈相建候而も少し低相見候ニ付冲合ヨリ目當も薄く可有御坐哉と奉存候間是迄通ノ高サヨリ三尺築立仕幅も東西ヨリ貳間南北ヨリ四間築出し仕度奉存候間御差障も無御坐候ハ、前段之趣拙者ヨリ御願申上吳候様右船頭共申聞候願之通被仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候是等之趣何分宜敷様御沙汰被成下度乍憚以書付奉願上候以上

文化十年酉八月

獵師町 與右衛門
肝煎與作

年寄宛
大庄屋宛

是レヨリ一段ノ風致加ハリ獨リ天候ヲ徵シ入津ノ標トナルノミナラス地方ノ一勝區トナレリ明治九年酒田縣令三島通庸毎ニ其風光ヲ愛シ 車駕東北ニ巡幸セラレントスルヤ更ニ附近塵家山ヲ修治シ之ヲ朝日山ト名ケ常燈ヲ其頂ニ移シ當山ノ方域ニ收メ四民偕樂ノ公園トナス此時酒田問屋等相議リ新ニ石燈ヲ作り之ヲ其址ニ建テラレシガ廿七年震災ノ爲メ顛倒破壊セリ

あつみ嶽や吹浦かけて夕すくみ 芭蕉

人のやなきうらやましくもなりにけり 長翠

夏山のかけひたしけり最上川 湖南

船場町 明曆圖ヲ案スルニ當時此地方ハ悉ク最上川ノ流底ニテアリシナリ其後河流ノ變迂ニ依リ起上地トナリ獵師町下河原ト字ス元祿ノ末ヨリ漸次人家出

テ寶永四年初メテ屋敷割ヲ命セラレ町並トナレリ

(明曆圖書入) 舟場町之義者元祿十五年之比ヨリ獵師町下タニ少々人家モ間原ニ有之候處寶永四亥年ヨリ屋敷割被仰付御町並ニ相成申候

(野附氏御用留) 享保十二未年舟場町繪圖面へ御奉行中御書入左之通 未五月御家老中へ入御覽候

船場町々繪圖

舟場町之義山田四郎左衛門勤之節元祿年中御町ヨリ奉願御檢地相濟候得共地高之處え連々屋敷築立其外ハ河原ニいたし置候享保十一年午五月大火之以後前森次郎右衛門被遣燒跡相改候節舟場町御改候處肝煎源七郎類燒ニ付元祿年中之繪圖燒失ひ役所之扣も年寄共面々之扣共ニ類燒いたし不埒ニ候故次郎右衛門致兼依之何様ニも繪圖相調其上ニ而次郎右衛門相改候様ニ被仰付候而御家老へ被仰右役人共屋敷主へ相尋此繪圖仕立未五月中御家老中へ入御覽同年六月中次郎右工門罷下檢地相濟清繪圖差出申候大方此繪圖之通ニ候

此舟場町貳拾貳年已前新地被仰付繪圖差上申候處ニ舟場町段々築立家作等いたし候ニ付先年之繪圖相尋候處ニ繪圖紛失仕候間此度前森次郎右衛門殿御下被成御改之上相調申候其節在番之御徒目付佐藤庄右衛門殿御立合相究申候以上

享保十二年丁未六月廿八日

渡邊隼人
栗林新右衛門
笠谷惣右衛門
か、や、與助
上林七郎左衛門

寶永二酉六月酒田御町人所持之谷地調書

酒田地方
一臘師町下谷地 長三百九十間程
橫三十七間程

但臘師町下ヨリ利
右衛門小路川原迄

此野手金壹步錢貳百五十文

萱御役人方の上納仕候

右之場處ハ酒田御町家ニ御坐候處四十年已前川崩ニ相成其已後段々川原出申候
少々萱等生申事御坐候得共只今ハ何年も萱生申事無御坐下川原ニ御坐候野手金
之儀ハ年々入札被仰付向山居谷地共ニ落札次第上納仕候當年ハ壹步ト錢貳百五
十文上納之筈ニ御坐候

獵師町下向谷地 長五十貳間程
一葉草谷地 橫三十貳間程

栗林新右衛門

此野手錢 但獵師町下谷地野手金壹步錢二百五十文之内ニ而六百文ツ上納
仕候

其地酒田湊ニ接近シ最上川ニ枕ミ運輸ノ利便ヲ占ムルヲ以テ漸次問屋ヲ營業ト
スルモノ來往シ且娼家サへ出テ大小ノ船舶之ニ輻湊シ街道頗ル殷盛ナリシガ廿

七年ノ劇震ニ全町焦土トナルノミナラズ震盪ノ際地裂ケ水湧キ地形ニ異狀ヲ生
シ爲メニ他町ニ轉住スルモノ多ク復々疇昔ノ觀ナシ

新^{シン}

町^{マチ}

酒田西濱ノ一部分ニ屬シ高野濱ト稱ス庄内昔聞書ニ天長中僧空海袖之

浦ニ巡錫シ當所ニ一字ヲ建立シ高性寺ト稱シ村落ヲ高野山ニ因ミ高野濱ト名ケ
タリト云フモ覺束ナシ一説ニ舊名ヲ金華崎ト稱スト云フモ亦文書ノ徵スヘキナ
シ古來當所ニ住スルモノハ多ク渡守及ヒ半^{ワタシモリ}バ乞食ニ衣食スル賤族ナリシヲ以テ
之ヲ平民ニ伍セズ町外トシテ取扱ハレタリ

(明和七年巡見使御用覺書)笠屋町家數十二軒高野濱貳拾壹軒右ハ酒田御町四十四
町之外ニ御坐候

酒田港ノ繁榮ニ赴クニ從ヒ地勢ノ便利ニ依リ民口ノ來往スルモノ多ク文政元年
ニ及ヒ四十戸ヲ見ルニ至レリ 酒田町年寄御用留 是レヨリ先キ「茶屋」ト唱ヘ娼婦ヲ置キ來

客ニ待セシムルモノアリシガ文政四年初メテ其營業ヲ許可セラレ 事下項ニ 漸次

繁華ノ地トナリ同五年當所ノ内十六戸ニ步役ヲ課シ臺町支配ニ屬セラル爾後民

家ノ移住スルモノ多キヲ加フルト共ニ從來住居セシ賤族跡ヲ歛メ萬延元年ニ至リ新屋敷ヲ新町ト改メ酒田町組ニ編入セラル

(野附氏御用留)文政五年午六月高野濱住居之者共十六軒家敷歩付相改御郡役地ニ被仰付臺町支配ニ相成申候

萬延元年申五月當時高野濱住居之もの追々町在カ引移候ものともよて古來カ住居之者一向無之新屋敷町方被仰付候間綠組等も無差間相結候様

遊

廓 酒田港繁榮ニ趣クニ隨ヒ今町船場町ニ娼家數戸起リ之ヲ茶屋ト稱セシ

ガ文化十年三月初メテ今町ニ茶屋永株式三十七軒船場町ニ三十六軒ヲ公許セラレ相競フテ其業ヲ營ミ一宵ノ春ニ百金ヲ抛チ豪遊ヲ試ムルモノ亦少カラス兩町ノ名ハ夙ニ海客ノ間ニ喧傳シ既ニ海内ニ稱道セラレタリ

(同上) 願立之覺

船場町茶屋組

私共茶屋業体之儀從古來仕來候處文化年中爲火防柳小路通土手築立候節人夫數日寸志勤右土手築立御出來之節願立左之通

一土手築立之節人夫數日寸志相勤候事

一御町方端々並高野濱隱賣女手廣ニ相成御町方娘子供風俗にも相掛リ候ニ付隱賣女並鳴もの御指止被仰付被成下度且惡もの御穿鑿ノ節ハ私共へ内穿鑿被仰付被成下度事
一出火ノ節龍吐水持出シ火消急處相働可申旨依而茶屋株式永々被仰付被成下置度段肝煎衆ヲ以奉願候處文化十年酉三月廿三日奉願候通三十六軒へ茶屋株式被仰付翌廿四日御請御禮申上候以上

今町茶屋組

一私共業体之儀先年文化十年酉三月廣小路土手築立之節寸志仕龍吐水御引請出火之節ハ火消ニ罷出申度旨御支配頭肝煎久右衛門殿ハ仲間一統願上候處同月廿三日茶屋株式三十七軒願之通被仰付候趣被仰渡難有仕合奉存候依而廿四日御受爲御禮廻勤仕候様御支配頭ヨリ被仰渡即日爲惣代ハ兵衛庄三郎御役所並御町役人中へ御禮申上候右火消相勤候ニ付茶屋株式三十七軒ハ被仰付候

當時高野濱ニモ亦茶屋營業ノモノ五戸ヲ有シ各賣婦ヲ置キ漸次盛ナラントスルノ勢アリ今町船場町ノ同業者ハ以テ自己ノ不利益トナシ文政四年當處ノ賣婦ヲ停止セラレンコトヲ出願セシガ

上掲兩町茶屋株式免許ノ始末ハ本願書ニ添附セシ文書ナリ

町役人調停ノ結果明

年ヨリ高野濱茶屋毎戸給仕女三人ヲ限り兩町茶屋抱へノ名義ヲ以テ置カシムル
ノ契約ヲ結ヒ初メテ其營業ヲ公認セラル是レヨリ同業ノモノ三町ニ散在シ之ヲ
酒田三遊處ト稱ス

(同上) 高野濱約定証文之寫

一賣女抱置候儀御兩町ニテ近來御願被成被仰付罷在候由ニ付私共村方之内茶屋家
業仕來賣女抱置客扱爲致候ニ付往々増長可致哉之趣ヲ以私共抱女之儀御兩町茶
屋方指障ニ罷成候ニ付差置不申候様今般御歎奉願候趣ヲ以肝煎權四郎殿同重四
郎殿御兩人へ双方内濟熟談ニ及候様御取扱方被仰付候趣ニテ委細被仰含御尤至
極ニ奉存候依而御願申上候前々ヨリ私共茶屋家業渡世之義ニ候得共給仕女等無
御坐候而ハ家業相續モ相成兼必與迷惑仕家名相續モ相成兼何共歎敷奉存候ニ付
私共當時抱置候賣女之分來午六月中迄相減一軒へ三人宛五軒ニテ十五人高ニ限
候事ニ可致候間夫迄御用捨被下其外以來之義ハ爲給仕女私共壹軒へ三人宛御名
前ニ指置候事ニ御聞濟被下度段右肝煎衆肝ヲ以內濟熟談之義御頼申上候處御聞
濟被下私共一統忝奉存候依而以來之儀ハ左之通
一御兩町ニテ火消御勤被成候ニ付右道具廻修覆並御仲間年中爲雜用備私共五軒ニ

金壹兩宛明年ヨリ年々三月中ヨリ八月中迄割合ヲ以指出可申候

一賣女衣服之義ハ御停止之品々一切相用不申花美仕間敷候

一客來之節御兩町ヨリ相招候賣女不埒無之様取計可申候

一御名前ニテ指置候賣女年期明ニ近寄候節相應候もの見當り候ハバ各方へ御相談

之上指置可申候

一萬一欠落掛リ合等出來仕候節ハ各方へ早速御相談ヲ得御損失等曾テ相懸申間敷

候

一私共之内指置候賣女万一變事等出來候節早速爲御知可申候右ニ付御吟味被仰付

候節ハ各方ニテ御取扱被下候事尤右雜用等ハ私共方ヨリ差出可申候

一御名前ニテ差置候賣女ノ外隱賣女一切指置申間敷候萬一隱置女指置候節ハ其當

人ヨリ爲過料錢五貫文宛指出可申候

右之通急度相守可申候爲後日約定証文如件

文政四年巳九月

高野濱村茶屋

六 長 五 藏
重 兵 衛 郎
清 次 郎
又 四 郎

今船場町

茶屋御中

維新後貸座敷ト改稱シ舊ニ仍リ營業セシニ廿七年ノ劇震ニ今町船場町ノ同業大率火災ニ罹リシヲ以テ貸座敷規則ヲ實行セラレ同業者ヲシテ悉ク新町ノ一區域ニ移轉セシム即チ新町遊廓ノ始メナリ

新寺町 附牢屋址 明曆圖ニ丁離トアル是ナリ丁離一ニ長吏ニ作ル穢多ノ別名

ナリ最上時代ニハ鵜渡川原横道邊ニアリシト云フ

(明曆圖書入)丁離最上家ノ比者鵜渡川原横道今五助といふ者の家の邊りにありしといひ傳ふ斬罪場の跡ありとて今俗に人切場と唱ふる處三の廓にあり其比ハ大町より今の中ノ口へ往還ありたりといへども言傳のみにして儘かなる物なしとなん

移轉ノ年代詳カナラス文政元年九月肝煎扱家數調ニ家數三十軒長吏頭仁右衛門組頭一人ト見ユ古來革工ヲ專業トシ傍ラ竹細工萬歲春田打舞及ヒ罪人ノ取扱葬具ノ取除等ヲ以テ生活セリ故ニ町外トシテ平民ニ伍セラレサリシガ昭代ノ沛恩ニ俗シ初テ平等ノ人民トナレリ但牢屋ハ當處ノ東側ニアリシヲ維新後撤却セ

ラル

新濱畑 元祿十二年寺院境内圖妙法寺ノ下ニ挿入セリニ「非入小屋」トアリ所謂河原者ノ

聚落ナリ古來濱乞食ハムコシキト稱セラレ埋葬及ヒ夜番等ノ賤業ニ從事セシヲ以テ穢多ト共ニ平民ニ齒セラレサリキ文政元年九月肝煎扱家數調ニ家數二十五軒濱乞食小屋頭二入ト即チ是ナリ米屋町組大庄屋伊東彌十郎深ク此輩ノ境遇ヲ憐ミ誘掖シテ園藝ヲ習ハシム爾後其業ヲ傳ヘ園丁ヲ以テ衣食シ爲メニ乞丐ヲ免ル、モノ甚多シ亦昭代ノ沛恩ニ俗シ平民トナリ濱畑町ニ編入セララル

御米置場址 日和山ノ西字陳屋ニアリ幕府直領ノ租米ヲ積圍ヒシ處ナリ東西八十三間余南北五十三間余ノ敷地ニ土居ドキヲ築キ空堀カラホリヲ穿チ木柵ヲ繞ラシ五口ノ門ニ各棧橋ヲ構ヘ米苞ノ出入ニ便ナラシム之ヲ五河戸ト稱ス一ヲ尾花澤河戸ト云ヒ御料代官之ヲ司リ一ヲ漆山河戸ト云ヒ山形藩主之ヲ監シ三ハ寒河江河戸四ハ柴橋河戸共ニ御料代官之ヲ掌リ五ヲ大山河戸ト云ヒ我力藩主之ヲ預リ各所属ノ米苞ヲ柵内ニ積圍ヒ毎年時ヲ以テ海路江戸大坂ノ藏前ニ廻漕スルモノトス其積

置ノ方法ハ地上ニ木材ヲ並ヘ臺トナシ之ニ米苞ヲ積重ネ苦モテ雨雪ヲ防キシモ
 ノニシテ數十万ノ米苞整然堆積シ頗ル壯觀ナリ俗ニ之ヲ瑞賢倉ト稱ス川村瑞賢
 ノ創意ニ成レルヲ以テナリ而シテ幕府ノ租米ヲ御城米ト稱シ各地ヨリ御米置場
 ニ回漕スルヤ沿岸ノ名主規定ノ手續ニ依リ之ヲ船頭ニ引渡シ酒田長人ハ遠奉行
 トシテ遙ニ出張シ之ヲ警衛シ斯クテ御米置場ヨリ海船ニ積入ルモ亦長人浦役人
 等之ヲ監督シ太々嚴重ナリ抑モ此御米置場ナルモノハ寛文十一年川村ガ案出ス
 ル所ニシテ其事歴ハ酒田港ノ沿革ニ大關係ヲ有スレハ左ニ之ヲ詳述スヘシ
 蓋幕府ノ政略上ヨリシテ其領地ヲ諸侯ノ封内ニ犬牙相錯ハラシメ以テ内外輕重
 ノ勢ヲ制セシム之ヲ御料ゴレツ又天領テンレツト稱セリ庄内ノ大山、丸岡、余目、最上ノ延澤漆
 山等ノ如キ全ク此種ニ屬スルモノナリ此等ノ地方ヨリ出ス所ノ租米ハ幕府代官
 ヲ置キ支配セシムルノ制ナリシガ當時何如ナル方法ヲ以テ之ヲ回漕セシヤ事跡
 詳カナラサルモ寛文ノ比ハ既ニ已ニ正木半左衛門一説ニ正木彌兵衛ト云ナルモノ之ヲ請負
 ヒツ、アリテ即チ酒田町藏ニ收容シ之ヲ越前執賀ニ廻漕シ或ハ入札拂トナシ其

代金ヲ幕府ニ上納セラレシナリ

然凡當時海運ノ聯絡未タ全ク相通セス爲メニ回漕延滞ニ及ヒ賣買ノ機會ヲ愆ラ
 シメ將タ入札ノ法タル吏其人ヲ得レハ已ム苟モ否ラサレバ奸商ト結托シ價格ヲ
 二三ニシ加之市中ノ倉廩ハ動モスレバ水火ノ難ニ罹リ徒ラニ損失トナルモノ古
 來幾何ナルヲ知ラス斯ル不便不利ハ獨リ庄内ノミニアラサルヘク全國ニ通シ共
 ニ免ルヘカラサルモノトスレバ之ガ爲メ幕府ノ損害ニ歸スルモノ實ニ驚クヘキ
 巨額ニ上リシナラン

川村瑞賢ハ身ヲ貧窶ヨリ起シ巨萬ノ富ヲ累ネ志氣濶達ニシテ意志極メテ緻密ナ
 リ彼レ眼ヲ放ツテ宇内ヲ觀ルトキハ富岳ノ大モ盆中ノ假山トナシ更ニ心ヲ小ニ
 シテ萬有ヲ視ルトキハ一粒ノ米モ尙徒ラニ失ハンコトヲ懼ル經濟ノ才ニ富ミ遺
 利ヲ收ムルニ敏キ夙ニ御料米回漕ノ迂ナルヲ看破シ茲ニ其直輸ノ方法ヲ案出シ
 之ヲ當路ニ建議シ自ラ進ンテ其任ニ當ランコトヲ稟請セリ幕府其議ヲ採用シ令
 ヲ沿海ノ諸侯ニ下シ川村ノ爲メニ可及的ノ便宜ヲ與ヘシム寛文十一年正月我カ

藩主ニ下サレタル奉書ハ左ノ如シ

(承露盤)

一延澤大山漆山領御城米江戸御藏へ相廻候義當年ハ入札ニ不被仰付從公儀御直廻被成手廻之義川村瑞賢ニ被仰付候間於領内用事有之候ハバ手問無之様可被致事
一於酒田前々ハ町屋之内ニ御米指置候由ニ候火難も難計候間町屋ヨリ引離舟積之手寄能場處可被申付事

一酒田川湊ニ候間 御城米船入津出船之砌於川口破損無之様可被人念候附小船を以瀬取又ハ川船等手廻宜様可被申付候委細於彼地瑞賢手代可相達候以上

寛文十二年

是レ川村カ酒田港ニ於ケル御城米積圍及回漕ノ設計ヲ幕府ノ奉書ヲ以テ發表セシモノナリ彼レ未タ來港セサルニ酒田ノ地理形勢ハ既ニ腹中ニ畫キ自ラ實踐セルモノ、如シ其周到寧口驚クニ堪ヘタリ

所謂瑞賢手代ハ即チ雲澤六郎兵衛ニシテ同年正月十七日ヲ以テ來港シ中町二木九左衛門ニ投宿シ龜ヶ崎城代松平藤兵衛町奉行中臺式右衛門等ト交渉シ位置ヲ檢定シ諸般ノ準備ヲ整へ同月廿五日土功ニ着手セシメ身ハ最上ニ赴キ又是レ最

上地方御料代官ニ回米ノ手筈ヲ謀合センカ爲メナリ當時莊内ノ天地ニ優遊セル士民ハ其舉動ノ敏捷ナルニ一驚ヲ喫セシト云フ

雲澤ニ代リ梅津三郎兵衛來港シ頻ニ工事ヲ督勵シ翌二月廿五日ニ至リ悉ク成功ス顧フニ斯バカリノ大工事而モ積雪冱寒ノ期節ナルニモ拘ハラズ僅々三十ノ日子ヲ以テ竣功セラレシハ領主ノ幕命ヲ重ンジ藩吏全力ヲ盡シテ監督スルノ致ス所ナリトハ云へ必竟川村ノ規畫宜キヲ得ルニ非ラサレバ安ゾ能クコ、ニ至テ得ン斯クテ雲澤ガ最上ニ趣キシ結果御米置場竣功ト同時ニ豫期ノ如ク二月廿四日ヲ以テ彼地方ノ御城米ハ續々酒田ニ着船セシニ依リ各河戸ヨリ指定ノ場處ニ累々積圍ハレタリ

(五大院書留) 寛文十二年正月十七日川村瑞賢手代雲澤六郎兵衛下着宿二木九左衛門云々右九左衛門其節中町ニ住宅其後享保之初め比内匠町え引移右九左衛門ハ二木重之助家之番頭相勤別家したる家といふ

(承露盤) 覺

一濱御城米御藏屋敷御普請寛文十二年子正月廿五日始リ同二月廿五日終ル

此人足三万三百九十八人

内一萬八千九十九人
同一萬二千九十九人

郷中出方
町方出方

其節之役人三浦七右衛門殿仙場彦右衛門細井松兵衛殿中臺式右衛門殿毎日御出被成候下役人鶴渡川原御足輕四五十人斗鶴岡百人斗參候酒田大肝煎不殘郷中大肝煎並長人大杖突相詰申候

一御藏萱屋根行間十五間二ツ立申候又公義御役人衆被居候座敷二ツ其外番所二ヶ所皆々殿様ヨリ之御物入ニ而御坐候

一外ニ水除仕候ニ付明表四萬表酒田在々ヨリ出し申候

御役人雲澤六郎兵衛様梅津三郎兵衛様御兩人被參候

一御米置場南向東四八十三間
南北五十三間四方土居から堀

四方柵立回有之柵木數千八百四十三本
但大小の柱とも御門四ヶ所外ニ御壹ヶ處南口ニ四口
西口ニ一口御番所五ヶ所

ニ在御礎綱入候小屋有之臺木小屋二ヶ所

御圍御高札場有之

○右ハ寶曆五年七月江戸在勤御郡代矢口半彌服部外右衛門ヨリ國元御郡代鈴木筑大夫久米五郎兵衛ニ御城米積置場ノ由來ヲ照會セラレシキ酒田町奉行山本重次郎ノ命ニ依リ酒田年寄が浦役人ノ手扣ヨリ拔萃シ差出セル覺書也

尋テ川村ハ實地視察並回漕指導ノ臺命ヲ奉ジ諸港ヲ巡回シ同年四月八日嫡子傳

十郎ト共ニ來港セリ此時ニ當リ川村ハ「公義御役人」ノ資格ヲ帶ヒ從僕上下五十人ニ擁セラレ大道ヲ誰何シニ木家ヲ以テ旅館ニ定メラレ其酒田ニ入ラントスルヤ町奉行三組役人袖ヲ連ネ駕ヲ郊外ニ迎ヒ着館ノ後町奉行以下更ニ禮服ヲ着ケ其起居ヲ候ヒ時人尊稱シテ「瑞賢様」ト云ヘリ

川村ノ酒田ニ滞留スルヤ二木九左衛門同與兵衛ヲ浦役人ニ補シ御城米ノ監督回漕ノ方法等總ヘテ之ニ係ル萬般ノ所務ヲ指導セラレシガ是レヨリ先キ大坂ニ打照セル御雇船ハ海上恙力ナク五月二日入港シ御城米ヲ積入レ首尾能ク出帆セラレヌ乃チ酒田ニ於ケル任務ハコ、ニ結了セシヲ以テ五月十日一行酒田ヲ出發シ路ヲ北陸ニ取り歸府セラレタリ實ニ是レ御米置場ノ創始ナリ

(承露盤) 覺

一寛文十二年壬子年延澤漆山大山御城米川村瑞賢と申者ニ被仰付御直回ニ被成候其節御町奉行ハ中臺式右衛門様御城代ハ松平藤兵衛様

一川村瑞賢手代雲澤六郎兵衛と申者子正月十七日酒田に罷下宿二木九左衛門方ニ罷在御米野積可仕場處致見分御普請初候節も此方ニ罷在正月末最上へ罷登代リ